学習院

輔仁会雑誌

No.248 2025

5%から、
最大10%のご優待。

※松屋DCカードのご優待には、食料品・セール品・修理代・送料・一部の特定ブランドなどの除外品がございます。

松屋DCカード会員募集中。

●松屋（銀座店・浅草店・マロニエ通り館・銀座インズ内プチプチマルシェ・松屋オンラインストア）での年間お買い上げ額によって、翌年のご優待率が決まります。● 年間のお買い上げ額20万円未満→5%ご優待 20万円以上→7%ご優待 50万円以上→10%ご優待
●初年度年会費無料（2年目以降年間 税込1,100円、年間のお買い上げ額50万円以上で翌年無料）●ご入会は松屋銀座7階松屋カードカウンターまたはオンラインでも承ります。●松屋DCカードについて詳しくはこちら→https://www.matsuya.com/corp/card/credit/

MATSUYA GINZA

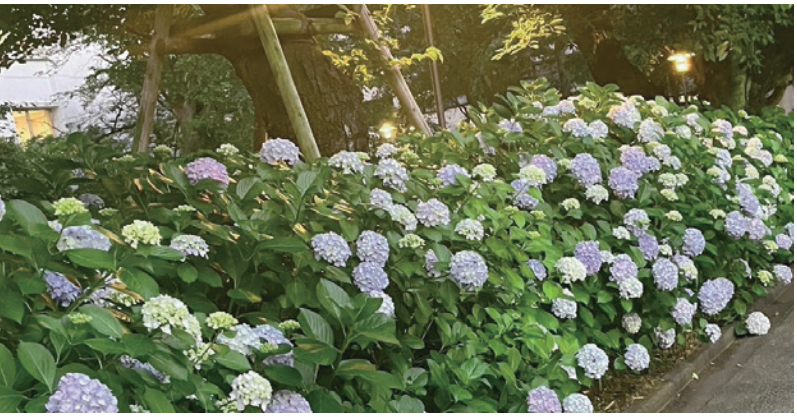
MATSUYA GINZA：3-6-1 GINZA, CHUO-KU, TOKYO 104-8130 PHONE 03-3567-1211 www.matsuya.com

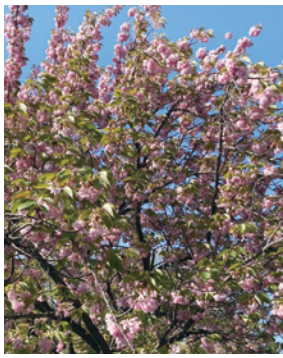
株式会社 学習院蓁々会（ガクシュウインシンシンカイ）

Tel. 03-5979-7767 Fax. 03-3985-3709

学習院 100%子会社として、輔仁会館 2 階大学売店（03-3985-1920）での学習院グッズ・文具類販売・自動車教習所・専門学校ご紹介、住まいのご紹介、学生保険窓口・海外旅行保険窓口、就職用証明写真、卒業式用貸衣装、電子辞書・パソコン販売等様々な分野で学習院コミュニティへのお役立ちを目的に設立されました。最新情報をご入手頂く為には、ウェブサイトをご覧頂ければ幸いです。

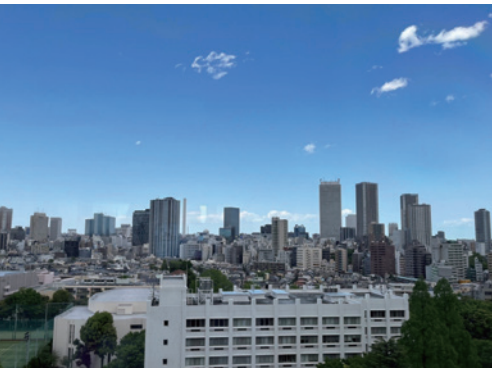
http://www.g-shinshinkai.co.jp
info-kabu@g-shinshinkai.co.jp





目次

4 キャンパスライフを彩る通学コーデ
8 インタビュー
14 創立75周年　学長からのメッセージ
16 学習院の伝統
22 学生のミカタ　食堂
26 大学のオシゴト
28 学習院ならでは！ 気になる講義
30 バレットジャーナル
34 大学周辺のガツンと飯！
38 レコード、聴きたい。
42 今あなたに読んでほしい絵本
46 トキワ荘



COVER

今号の表紙は、「学習院の過去と今、そして未来」をテーマに遠藤学長に飾っていただきました。学長先生の見つめる先には空のフィルム＝未来があります。

51 作文集

82 エッセイ　学習院女子中・高等科国語科教諭　深澤克俊

83 雑誌賞

119 ゲームひろば

123 エッセイ　学習院大学文学部教授　工藤晶人

124 デスク通信

126 奥付・編集後記

キャンパスライフを彩る 通学コーデ

ミスファイナリストのある一日の通学コーデを紹介。お気に入りのポイントや通学事情もお聞きしました。

取材・文／藤原優花、横山大貴、小崎有彩、
高島帆乃花、福田さくら、及川翔太、高杉紗弥子、馬目晏奈
撮影／清水真穂、猪俣俊人、菅原優羽
取材協力／学習院大学広告学研究会、
学習院女子大学大学祭実行委員会

point

通学バックには出身である広島名産の牡蠣のマスコットを！

point

キラキラしたカバーのApple Watchはアクセサリーとしても機能。

01_Eri Yasuda

保田 絵里さん

文学部フランス語圏文化学科 3 年

①友達と暑い日にお祭りに行く
②小花柄模様が可愛くて、白に水色で涼し気な印象になるところです！
③LANAの99です

02_Momoka Ishinabe

石鍋 桃香さん

経済学部経営学科 2 年

①テスト週間に図書館で勉強するコーデ
②白いワンピース単体でも可愛いのですが、アクセントで花柄のベストを着て、華やかさを出しています。
③西野カナさんのHave a nice dayです。

①コーデの設定　②コーデのポイント　③通学中よく聴く音楽は？

point

襟のレースで上品さも可愛らしさもプラス！

point

コーデを締めるベルトは大きなリボンで存在感アップ。

point

小さなリボンをあしらったネイルで指先も可愛く♪

05_Mikoto Kato

加藤 瑞琴さん

文学部フランス語圏文化学科 3 年

①一限絶対間に合うぞ！　即席コーデ！
②ブラウスの襟のレースで可愛らしさを出しました。（朝は支度に割ける時間があまりないので）アクセサリーは着用せずに可愛く、そして動きやすいように低めのヒールを履くというのがポイントです！
③T-Pistonz+KMCさんの「マジで感謝！」です。

04_Riko Kaburagi

鏑木 璃子さん

法学部法学科 3 年

①授業後、お友達とランチに行く日のコーデ
②水色と白のストライプのワンピースはそのまま着てもお気に入りなのですが、コーデが締まるように紺色のリボンのベルトを付けました。
③広末涼子さんの「MajiでKoiする5秒前」です！

03_Nanami Horikawa

堀川 ななみさん

法学部政治学科 3 年

①放課後、お友達とカフェに行く日のコーディネート
②コルセットタイプのワンピースで、少しスタイルアップして見える点とフリルがついている事でふんわりと見せるデザインがポイントです。
③ユイカさんの恋泥棒です

ミス学習院女子 Ms. Gakushuin Women's College

point

日差し対策になる帽子がアクセントに!

point

目を引く赤いパンプスはコーデの差し色にも〇

point

生まれ月の星座をモチーフにしたネックレスで自分らしく。

03_Ramu Horio

堀尾 来夢さん

国際文化交流学部日本文化学科 1 年

①放課後ひとり街散歩コーデ
②歩き回るのでパンツスタイルでアクティブに! 帽子で頭部にアクセントをつけるとともに日差し対策もバッチリです! 普段から使っている大きなバッグはショッピングにも〇です!
③通学時間が長いので、文庫本を持ち歩きます! 電車ではほとんど寝てしまいますが笑

02_Moe kawafuchi

川淵 萌さん

国際文化交流学部国際コミュニケーション学科 3 年

①放課後友達とカフェデート♡
②花柄のキャミワンピースで夏っぽく! 真っ赤なパンプスで全体が引き締まるようにコーデを組みました! ゴールドのネックレス、ピアス、リングもポイントです!
③パソコンです! 講義でメモを取る時や課題をする時に使用しているので常に持ち歩いています! ただ、重いので毎日学校に持って行くのが大変です汗

01_Kana Takahashi

高橋 可奈さん

国際文化交流学部国際コミュニケーション学科 4 年

①少し背伸びして高いバーに行く日
②ズバリ、ワンピースで着痩せを狙いました! 笑。また、大人っぽい雰囲気になるように白黒で統一してみるのに加え、アクセサリーで華やかさをつけ足しました。ちなみにこのネックレスは、私の生まれ月である牡羊座をモチーフにしているのでとても気に入っています!
③手帳です。時間単位でスケジュールを把握することの便利さに気づいてから手放せません! オススメです!

Q ①コーデの設定　②コーデのポイント　③通学で必ず持ち歩いている物は？

point

テンションを上げてくれる大切な腕時計！

point

深みのある赤いルビーの指輪がコーデに映える。

point

オリジナリティあふれる地図記号トートバックと自作のブレスレット♪

06_Hikari Kondo

近藤ひかりさん

国際文化交流学部国際コミュニケーション学科４年

①放課後に友達とひまわり畑に行くコーデ
②夏らしさを感じることができるデニムのワンピースです！　実際にこのコーデに麦わら帽子を被り、お友達とひまわり畑に行ったことがあります笑。そして、お洋服がシンプルめなのでアクセサリーはキラキラにしました！
③時計です！　この時計はお誕生日に頂いた大切な時計です。時間を確認するのに便利で、なにより可愛い時計を見るとテンションが上がるので私にとって必要不可欠です！笑

05_Ayano Fujibayashi

藤林 彩乃さん

国際文化交流学部日本文化学科４年

①授業後気になる彼とカフェデート
②大学で教職課程を履修しており、3年生までは荷物が多かったのですが、4年生になり授業はゼミだけなので荷物は少なめに……爽やかな白いワンピースと祖母からもらったルビーの指輪がポイント！
③パソコン
授業を聞きながらタイピングを高速で打っているのを見かけたら、きっとそれは私！　見かけたらお気軽に声をかけてくださいね！

04_UmiShanti Yoshibayashi

吉林 海美シャンティさん

国際文化交流学部国際コミュニケーション学科３年

①大好きな推しびに会う日♡
②放課後に推しびに会いにいく日のコーデです♡最近とっても暑いので、涼しげな水色と白で統一しました。ネット編みトップスとバルーンスカートで流行りを取り入れています。これで推しびの目線は私のもの♡
③天文部で行った国土地理院でもらえた地図記号トートバックです！　誰とも被りません！！！　いちばん好きな記号は電子基準点♡

01 備前島 幹人

小学館　プロデューサー兼
クロスメディア事業センター室長

――大学で受けた講義で印象に残っているものはありますか。

一般教養科目で夏目漱石の『こころ』を一年間かけて読み解くという授業です。ミステリーを追求するような面白さがありました。例えば、『こころ』の中にいくつか花が出てくるのですが、後々起こる出来事や人の気持ちが、その花言葉に例えられているところがあります。それを知った時は夏目漱石はすごいなと思いました。元々本は好きだったのですが、文学の表現への興味はあの授業からだと思います。

――具体的なお仕事の内容を教えてください。

小学館から出た本を映像化する仕事をしています。

例えば、去年『葬送のフリーレン』という作品をアニメーションにしたのですが、どこの制作会社さんにお願いするか、どこの放送局さんで放送してもらうか、製作費や主題歌、声優さんはどうするのかを幹事会社と考えたり、脚本家さんに作っていただいた台本を監督をはじめ、プロデューサー陣と一緒に検討したりしました。

――現在のお仕事のやりがいは何ですか。

やっぱり原作者さんに喜んでいただくこと、原作本が爆発的に売れることが本当に嬉しいです。その上で、会社以外の人から「あの作品見たよ」「良かったよ」と言われたときは、スタッフの方に作っていただいた感情に訴えるものがしっかり届いている感じがします。

映像化を通して広げたい原作の良さ

例えば、私が担当させてもらったアニメーション映画『BLUE GIANT』（二〇二三年公開）という作品は、今の大学生ぐらいの男の子によるJAZZの話で傑作です。アニメーションにした時に、原作の面白さをどう観客の方に届けられるかということをとても悩んだ作品でした。映像化すると、原作とは違う印象になることもあり、映像化しても良いのかと悩むところはあります。出来上がって最初の関係者だけの試写では、いろいろな不安があったため、ちゃんと見られなかったです。ですが、多くの方に観賞いただき、高い評価をいただいたときに、ようやく達成感がわきました。脚本か

ら時間をかけて、監督と脚本家、またプロデューサーの方達と何度も話し合いを重ねて良かったなと思いました。

――お仕事で大変だと思われることは何ですか。

一つの作品を映像化するのに、原作者や監督、出資者など様々な方が関わっています。その中でそれぞれのクリエイターの方々に、「原作としてはこういうことを守って欲しい」ということを話します。一方で、映像クリエイターの方々の気持ちも尊重しなくてはならないため、調整が大変になることもあります。

また、映画を作る場合何千万、何億というお金が必要になるため、事業収支シミュレーションから出資を検討しますが、実はリクープしないこともあります。その中で、少しでも回収率を上げるために幹事会社と交渉したり、原作本が売れるように考えたりするなど、出資のリスクを減らせるかということも考えなくてはなりません。

これらのような大変さはありますが、アニメ化や実写化などの映像化は、なかなか本を簡単に手に取っていただかない時代に、本を買ってもらったり、原作、また原作者を広く知ってもらったりするためにはとても大切なことだと思っています。また、映像クリエイターやテレビ局、映画会社の方々と向かい合って仕事をするのは、出版社の仕事の中でも珍しいと思うので、貴重な業務経験をさせてもらっています。

作品に関わる人々の思いを繋げる役目

――備前島さんから見たアニメーションなどの映像コンテンツの魅力は何ですか。

まずは、アニメーションの原作になることが多い日本の漫画はやっぱりすごいなと思います。常に新しい作品が作られているので、表現の仕方やキャラクターの設定、ストーリーの緻密さが進化し続けているところが、世界の漫画と比べて、日本独自の魅力であると思います。これらの魅力をさらに高めるためにアニメーションにしていただくのですが、かつては国内のみで楽しんでもらうことが多かったのに対し、現在は国内だけでなく、世界中で楽しんでもらうコンテンツを作っているという感じです。Netflixや Amazon Prime Videoなどのグローバルな動画配信サービスに預けることによって、漫画も含めて日本のコンテンツがさらに世界に広がっていくんだろうなという感じがします。

――映像業界を目指す学生は、どのようなことをやっておくべきでしょうか。

学生時代にやっておいたほうが良いと感じているのは英語ですね。先ほど言った通り、現在は原作IPやアニメーションコンテンツをどう海外にアピールしていくか、という段階に入ってきています。海外の方々と直接話すことができる人はますます貴重な存在になってくると思います。

――学生に向けたメッセージをお願いいたします。

たくさん本を読んで映画を観てください。コロナ禍を経て、リアルに人と会えるというのはすごく貴重なことだと実感したので、いろいろな人に出会ってその時間を大事にしてください。

備前島幹人（びぜんじま・みきと）／1971年、埼玉県出身。1994年、学習院大学法学部法学科卒業後、小学館に入社。『葬送のフリーレン』（原作・山田鐘人 作画・アベツカサ）テレビアニメのエグゼクティブプロデューサーや、『BLUE GIANT』（石塚真一・著）劇場版アニメのプロデューサーなどを担当。『BLUE GIANT』では第42回藤本賞・新人賞を受賞。

取材・文／佐々木舞緒、寺本悠莉、有本涼、今野有季乃　撮影／清水真穂、松原正樹

02 chay

シンガーソングライター

——学生時代の思い出を教えてください。

学生時代から、シンガーソングライターになることが夢だったので、大変だったことも多かったです。私は大学生から路上ライブを始めました。最初は、ただ自分で作った曲を誰かに聴いてもらいたい一心で路上ライブを始めました。でも、誰にも足を止めてもらえませんでした。都会の雑音に自分の音がかき消されてしまって、悔しくて泣きながら帰ったこともありました。何をすれば聴いてもらえるのか考え続けて、悔しさを原動力にして頑張っていましたが、やっぱり落ち込むことも多かったです。なので、周りの友達が就活の時期になると、みんながむしゃらに頑張る姿を見て私も頑張ることができました。いろいろな刺激を受け合いながら過ごした大切な四年間だったと思います。学生時代の友人とは今でも変わらず仲が良く、ライブにも来てくれています。悩み相談をすると視野が広がりますね。

選りすぐりのアイデアで唯一無二のライブを

——シンガーソングライターを目指した理由は何ですか。

私は幼い頃から音楽が大好きでした。幼稚園生の時から、家ではもちろん、幼稚園でも誰よりも前で歌うような子で、その時にはすでに歌手を夢見ていましたね。生きていたら誰でも落ち込んでしまうときがあると思います。そういうときに、私は本当に音楽に心を救われてきました。だからこそ、私も音楽の力で少しでも誰かにとっての希望や明日の活力になれたら、と思うようになったのが、シンガーソングライターになりたいと思ったきっかけです。もしも私の音楽で誰かの心を救えたら、そんな素晴らしいことはないと思いました。

——ギターを始めたのはなぜですか。

デビュー前は歌手になりたくて、歌手のオーディションをよく受けていました。大体最後までは残るのですが、そこで落ちてしまうんです。自分には何が足りないのだろうと考えたときに、皆さん歌が上手いのは大前提で、プラスアルファで何か大きな武器がある人が多いことに気が付きました。私は見た目がガーリーだったこともあり、そのギャップも強みに変えられたら良いなと思い、ギターを選びました。自分の少しハスキーな声質も生かせると思いましたね。

そこから大学生の頃は、授業以外のほぼ全ての時間をギターに費やしました。毎日五～八時間は弾いていたと思います。日に日に上手くなっていくのを実感していたので、苦に感じたことはありませんでした。

――ライブのこだわりはありますか。

耳だけでなく、目でも楽しめるように演出や衣装もこだわっています。ツアーのバックスクリーンに流す映像を自作したこともありました。また、雑誌のモデルをしていたことがあるのですが、可愛いお洋服を見ていると、ふとメロディーが浮かんでくることがあり、その曲を歌う衣装なども想像しながら楽曲制作することもありました。このように、ライブの演出や衣装を考えるときに、たくさん浮かんだアイデアを整理して、制約の中で譲れない部分を選び抜いています。私は、ライブはファンの方々に自分を最もダイレクトに見せ合える場所だと思っています。そして、限られた条件の中でいかにchayにしかできない世界観を見ていただくことができるか、妥協はしたくないので自分のこだわりを貫いています。

私らしさを追求していきたい

――YouTubeでの活動で意識していることはありますか。

見ていて〝楽しいか〟を意識しています。面白いからバズるとも限らないので、エンターテイナーとして企画を考えることが多いですね。YouTubeの活動はコアなファンの方だけでなく、新規の方とも出会えるのが良いところだと思います。また、曲を作る過程や即興の弾き語りは、YouTubeを始める前はあまり見せる場がありませんでした。自分の可能性に向き合うことができるのも、YouTubeの良いところだなと思います。大学生の時に得た、弾き語りのスキルを見せることができる環境があることは本当に嬉しいですし、大切にしていきたいです。

――今後挑戦してみたいことや継続したいことはありますか。

音楽スタジオを作って、自分で曲のアレンジなどをしてみたいです。それができるとチームのみなさんに、より自分のイメージを伝えやすくなるため、ますますchayらしさを追求していけると思います。

また、誰でもできる事ならする意味はないと思っています。なので、耳だけでなく目でも楽しめるというコンセプトのライブ演出や衣装のこだわりは、これからも継続していきたいです。コロナウイルスによりライブができなかった時期があり、ライブの大切さをより一層実感しました。やっぱりライブはこれからも開催し続けていきたいですね。

――学生に向けたメッセージをお願いいたします。

年齢を重ねると夢に費やせる時間が少なくなっていくので、目標や夢に向かって全力を注ぐことができる今を大切にして欲しいです。私は、大学四年間を音楽に費やして本当に良かったなと思っています。また、学生はいくら失敗しても大丈夫だと思っているので、失敗も経験して欲しいです。怖い気持ちも分かりますが、トライしてみないことには何事も始まらないので、突っ走ってみるのも良いと思います。その中で自分に合うものに出会えても出会えなくても、その挑戦は必ず人生の糧となるので、とにかくたくさん挑戦してください。

chay（チャイ）／1990年、東京都出身。学習院女子大学入学と同時にギターを始め、2012年に『はじめての気持ち』でCDデビュー。6枚目シングル『あなたに恋をしてみました』がヒットし、現在のMV再生数は約3000万回に上る。歌手活動の傍ら、10年に渡って『CanCam』専属モデルを務め、アパレルブランド「threesisters」を立ち上げるなど、ファッションの面でも活躍している。

取材・文／小柴愛和、今野有季乃、平林渉、藤岡朱莉

03 山木 翔遥

アナウンサー

——学生時代の学びがお仕事に活かされていると思われることはありますか。

大学で所属していたゴルフ部の先輩方に厳しく教わった礼節や、ゴルフ場でやっていたキャディーのアルバイトで学んだ、身内ではない人との付き合い方が活かされていると思います。特に、部活動などのチームで同じ目標に向かって切磋琢磨し合うというのは、会社に入ってからプロジェクトなどを通してみんなで同じ方向に向かうことにとも同じように感じます。そういった貴重な経験が大学でできたのは本当に良かったと思います。

かけがえのない一瞬を伝える

——アナウンサーを志望された理由は何ですか。

小さい頃からアナウンサーを目指していたわけではありませんでした。周りの先輩や別の大学の先輩に他局のアナウンサーに受かっている人がいて、大学三年生になり就活どうしようとなった時に、受けてみたらと勧めてもらいました。その時にそういう道もあるということを知り、挑戦してみようと思いました。本格的にアナウンサーを志したきっかけは、毎年夏にあるインターンに行った時に、実際にアナウンサーの方々に話を聞いてみて、楽しそうだなと思ったのが一番大きいです。インターンでは、一日ニュース原稿をスタジオで読ませてもらうなどのアナウンサー体験ができたり、フィードバックがもらえたりしました。当時はゴルフ部に所属していたので、ゴルフ中継のリポーターになりたいと思っていました。

——就活で印象に残っている出来事はありますか。

自分がどういう人間なのかということを分析して、その伝え方を探すのに苦労したことが印象に残っています。自分だけで考えても分からないので、家族や周りの人に聞いてようやく分かったこともあります。自分を見つめる時間は生きてきてほぼ初めてだったので印象的でしたね。それまで自分のことをアピールする場もなかったですし、考えたこともなかったので、それを突きつけられて焦っていました。

——アナウンサーのお仕事で、やりがいを感じるのはどんな時ですか。

アナウンサーという仕事は、同

じ瞬間というのが二度と無い仕事だと思っています。例えば、報道であれば、同じ現場でシチュエーションが近い事件や事故はあるかもしれないですが、全く同じ瞬間というのはあり得ません。二度と訪れることのない場面に立ち会って、伝えることができる時にやりがいを感じますね。それはスポーツでも同じです。唯一無二の瞬間に立ち会うことができて、それを自分の言葉で伝えられるというのは、すごく嬉しいです。

――アナウンサーのお仕事で最も大切にされているのはどのような事ですか。

声と言葉で陰から支える

伝え手である自分が前に出すぎないように、目立ちすぎないようにすることが大切だと思っています。例えば、スポーツでは目の前でプレーをしている選手が一番大切なので、どう伝えればその選手を最も輝かせることができるのかということを常に考えます。聞いている人にとって、良い意味でアナウンサーが印象に残りすぎない実況を心掛けています。事件事故でも、起こった事実や被害に遭われた方々の気持ちがメインなので、私たち伝え手の自己満足にならないようにすることを意識しています。

――約三年半記者をやられたそうですが、その期間で印象的だった出来事はありますか。

社会部に三年半いて、最初の三年間は警視庁の捜査一課担当で事件記者でした。扱う事件が全て人の生死に関わる事件や事故だったので、取材をしたものは全て覚えています。夜討ち朝駆けで警視庁の警察官の家の前に立って、出勤される時に声を掛けて話を聞いて、再び帰るのを待って話を聞くというのを毎日行っていて、本当に刺激的でした。一番大変だった事件は、指示役とされる人物がフィリピンから指示を出して、日本全国で芋づる式に強盗事件が多発したルフィ強盗事件です。あの時は一ヶ月半ほど続報を求められる毎日で、知っている捜査関係者に電話をかけまくったり、警視庁内で幹部を周り、いろいろな角度から質問を投げかけ、新情報・独自情報の入手に試行錯誤していました。

――アナウンサーに向いているのはどのような人だと思いますか。

アナウンサーの仕事において、テレビ画面に映っているのは一割ほどで、残りの九割ほどは準備の時間だと思っています。例えば、スポーツ中継を実況している時間は二時間ほどしかないですが、そこに向かうために二、三週間調べ物をすることもあります。それぞれの選手の資料を作ったりして頭に叩き込んでいますね。そういう過程を楽しむことができたり、いろいろなことに興味を持って自分なりの楽しみを見つけることができたりする人は、アナウンサーに向いていると思います。

――学生に向けたメッセージをお願いいたします。

思い返すともっとこんなことしたかったなとか、やっておくべきだったなということが次から次に思い浮かびます。当時は自由に使える時間が無限にあると思っていましたが、社会人になって年を重ねていくごとに自由な時間はどんどん少なくなってしまうものです。なので、学生時代にどんなに小さいことでも、やりたいことや楽しめることを徹底的にやって欲しいなと思います。

山木翔遥（やまき・しょうよう）／1992年、東京都出身。2015年、学習院大学法学部政治学科卒業後、テレビ朝日に入社。『羽鳥慎一モーニングショー』『ANNニュース&スポーツ』『GetSports』へ出演。2020年7月にアナウンス部から社会部へ配属され、取材記者に転身。2024年1月、アナウンス部へ復帰。現在『スーパーJチャンネル』のプレゼンター&フィールドリポーターや『ワールドプロレスリング』の実況を担当。

 取材・文／関田百華、今野有季乃、鈴木乙文、宮本采依　撮影／松原正樹

MESSAGE

今号では、遠藤久夫学長に表紙を飾っていただいたことに関連して、「学習院の過去と今の繋がり」をテーマにインタビューを実施しました。

＊　＊　＊

――学習院大学は今年で創立75周年を迎え、記念式典が開催されました。一方で、学校法人学習院は3年後の令和9年に創立150周年を迎えます。これらの違いはどのようになっているのでしょうか。

学校法人学習院は、明治10年に華族の教育機関として発足して、その後、宮内省の所管の官立学校となった学習院を母体としています。学校法人学習院はこの明治10年を創立年としていますので、令和9年に創立150周年を迎えます。一方、学習院大学は戦前の学習院を母体としていますが、昭和24年に新制の私立大学として開学したので、大学の創立年は昭和24年としました。そのため今年が75周年になります。もっとも大学の創立年として大学の前身となった学校の創立年とする大学もあるようです。そのように数えれば学習院大学は今年で創立147周年となるのでしょうが、戦前の学習院は華族を対象とした官立学校であり、戦後の学習院大学は開かれた私立大学という大きな違いがあります。再出発という意味も込めて、大学の創立年は昭和24年としたのではないでしょうか。

――今年75周年を迎えた学習院大学の創設時はどのようなものだったのでしょうか。

終戦によって華族制度がなくなると戦前の学習院の存立基盤が消失しました。学習院の再生とその中核となる学習院大学の創設は表裏一体の関係にあったと思います。大学開学時の歴史を振り返ると、先人の大変なご苦労がうかがえます。その中でも、山梨勝之進先生と安倍能成先生は、今日の学習院、学習院大学の基礎を築かれた方だといえます。

山梨先生は「予備役」の海軍大将でしたが、とてもリベラルな方で、昭和14年に学習院長に就任されました。終戦後、山梨院長を中心にGHQとの交渉が重ねられ、学習院を私立学校として再出発する方針が定められました。

安倍先生は、第一級の哲学者で、平和主義者、リベラリストとして知られていました。終戦後は旧制一高の校長を辞されて、文部大臣をお努めになられました。旧知であった、山梨院長から「旧軍人である自分は公職追放となるであろうから、後をやってほしい」との、依頼を受け、昭和21年に新しい学習院の院長に就任され、昭和24年に学習院大学が開学すると、初代大学長になられました。

安倍大学長は、退任されるまで14年間にわたり学習院大学の発展に貢献され、大学開設時には文政学部と理学部の2学部体制でしたが、昭和39年には、文学部、法学部、経済学部、理学部の4学部体制を作り上げられました。

戦後の私学としての学習院の道筋を作られたのが山梨先生、学習院大学の基礎を作られたのが安倍先生だといえるのではないでしょうか。

――大学創立75周年はどのような意味があったのでしょうか。

平成11年には、当時の皇太子殿下、現在の天皇陛下のご臨席の下、「学習院大学開学50周年記念式典」を挙行いたしましたが、開学25周年というのは行っていません。また、令和9年に学習院創立150周年事業が控えていますので、75周年という中途半端な時期に大学の周年事業を行う必要はあるのかと思っていましたが、私が学長になったときには75周年事業を行うことが決まっていました。そこで、皇族の方をお招きすることはせずに、学生諸君の部活などの団体の表彰や、卒業生のご活躍を紹介する講演会などアットホームな感じの式典にしました。

これまでの戦績や大学などへの貢献から総合的に選んだ8団体を、課外活動優秀団体として表彰しました。

また卒業生特別講演として、宇宙航空研究開発機構（JAXA）の徳川直子氏（理学部物理学科卒）と、川崎市岡本太郎美術館館長の土方明司氏（文学部哲学科卒）に、それぞれご講演いただきました。

お2人とも、学習院大学での学びが今のお仕事にどのようにつながっているか、思い出を込めながら素晴らしいお話を聞くことができました。

――75周年事業を開催していかがでしたか。

結果として、75周年事業はやってよかったと思います。それは50周年事業から25年間の学習院大学の発展を再確認できたからです。

たとえば、学部や学科については、平成21年に、理学部に「生命科学科」を増設し、ライフ・サイエンスの教育・研究の拠点が誕生しました。

平成25年には文学部に「教育学科」を増設し、さらに平成28年には「国際

社会科学部」を開設しました。この学部は留学や海外研修を卒業要件としており、学習院大学の国際化に大いに貢献しています。

大学院の研究科や専攻については、平成16年に「法科大学院」を開設いたしました。

平成20年には、「大学院人文科学研究科」に、「アーカイブズ学」に関する日本で初めての大学院課程として「アーカイブズ学専攻」を、また、舞台芸術、映像芸術、マンガ・アニメーション、ジェンダーなどの領域を学ぶ「身体表象文化学専攻」など、それぞれ先進的な分野の専攻を増設しました。そのほかにも、生命科学専攻、臨床心理学専攻、教育学専攻などの大学院専攻の増設を行い、大学院の充実が図られました。

今回、大学の歴史を改めて振り返る機会ができたのはよかったと思います。大学生の皆さんもこのような大学で学んでいるということを知っていただければと思います。

――学習院には様々な歴史や背景があるのですね。現在の在校生が経験した大きな出来事といえば、新型コロナ感染症の影響で課外活動が大きく制約を受けたことであると思います。これについてどのようにお考えでしょうか。

新型コロナ感染症対策として授業はオンラインで行われましたが、当然ですが課外活動にも大きな影響を与えました。

新型コロナ感染症の拡大が認められた令和2年4月に「対面授業が再開するまで課外活動は全面禁止」としました。しかし、8月にはオンライン授業が続いていましたが、公式試合の出場や発表活動にむけての練習や出場に限定し対面活動を認めました。これによって運動部は活動を再開できましたが、試合もなく、発表活動の少ない文化系団体では活動できませんでした。そこで令和3年に「学内のみ」での活動を認めましたが、令和2年度全体では、運動部の9割は対面活動ができましたが、文化系部会は3割しかできませんでした。

また、輔仁会大学支部の規約の改定を行い、「活動休止」（休部）制度の追加や元々部員が25名以上必要であったところを、3名以上に緩和するなどして部会の存続を図りました。これらの対応の結果、令和6年10月現在では文化部会2団体、文化系同好会4団体が「活動休止」となっています。

また、感染予防の観点から黎明会館を令和2、3年度は閉館し、令和4年度は15分以上の在室禁止の措置をとりました。さらに、濃厚接触者の確認等の理由で活動参加者の名簿を保健所に提出しなければならなかったため、指導者登録をしていない卒業生の参加を禁止しました。令和5年度からすべての制限は撤廃されていますが、卒業生と現役生の交流が少なくなり、関係が希薄になってしまった部会もあると聞きます。その意味で、今でも部活動にはコロナの影響は残っていると言えますね。

課外活動は一度中断すると意義や運営方法を引き継ぐことが難しいため、大学としてはできるだけ課外活動の復活につとめました。令和2年には運動部リーダースキャンプを対面開催し、令和3年には新入生歓迎行事を対面で実施しました。同年11月の大学祭は人数制限をしましたが対面・オンライン併用で開催することができました。

今年の10月の第75回四大学運動競技大会で学生の皆さんが生き生きとして競技に励んでいるのを見て、着実に「復活している」と思いました。

多くの変化を経験した学習院が先人から受け継いだ学びは、どのように今に生きているのだろうか？

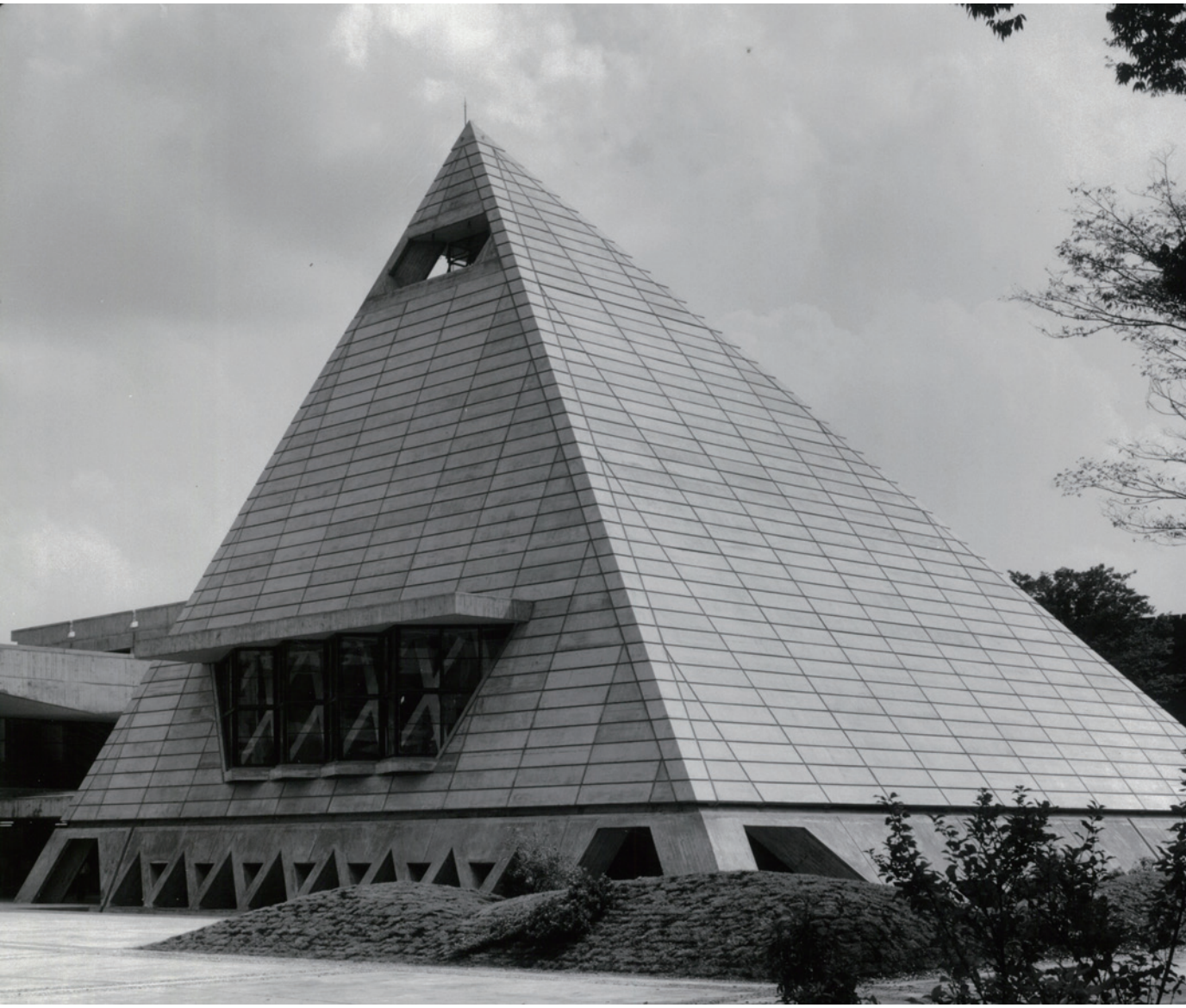
取材・文／藤岡朱莉、松原正樹　撮影／松原正樹、猪俣俊人

ピラミッド校舎

中央教室

～今は無き学習院のシンボル～

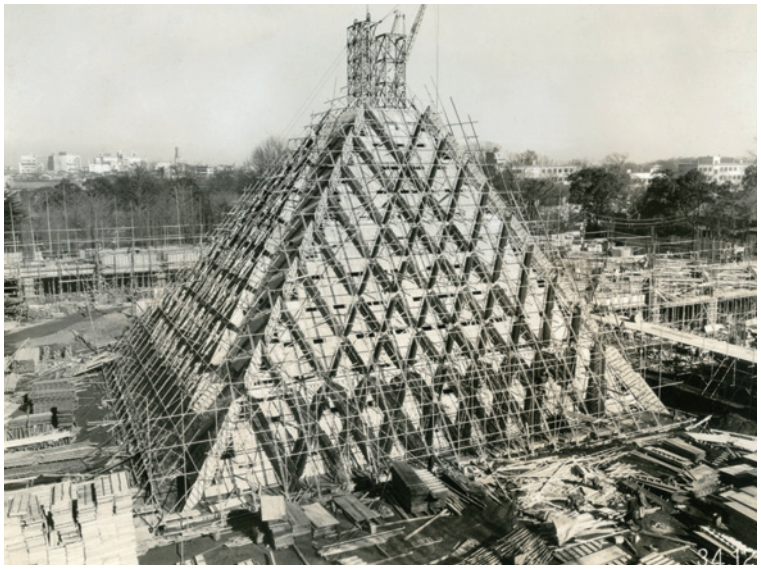
2008年まで学習院の中央教育研究棟の後ろにある広場に中央教室という建物があったのをご存じだろうか？
今はもうすでに解体されてしまっているが、その見た目のインパクトから、学生の間でピラミッド校舎と呼ばれ、
長く学習院のシンボルとして君臨してきた。ここでは、その中央教室についてまとめてみた。



提供：前川建築設計事務所 撮影：川澄昭男

中央教室とは

- 昭和35（1960）年に竣工され、平成20（2008）年に解体された。
- 南一号館、南二号館、西一号館、中央教育研究棟に囲まれた位置にあった。
- 設計を担当した前川國男は日本近代建築界をけん引した建築家であり、代表作品に東京文化会館や東京都美術館、神奈川県立図書館などがある。
- 四角錘の形状をしているが、正四角錘ではなく、東北に偏心している。
- 床面積…900・12㎡／高さ…25 m／一片の長さ…約30 m／体積…2500㎥



提供：前川建築設計事務所 撮影：川澄昭男

中央教室が作られた背景

学習院は戦前、華族という特権階級の人々の教育を目的としていた官立の学校であった。しかし終戦を迎え華族制度が廃止されたことにより、学習院はもう必要ないのではないかと存続が危ぶまれたため、学習院は官立という形態を辞め、私立の学校となることで存続を可能にさせた。それが現在の学習院である。その後10年ほど経過して学生も多くなり、学校の財政が安定したことにより施設の拡充が図られ、様々な校舎が建てられた。その中の1つが、ピラミッド校舎なのである。

なぜピラミッドの形なの？

なぜ中央教室がピラミッドの形をしているのか。それは以下のように考えられる。新旧の建築物に四周を囲まれているため窮屈感が生じる恐れがある。それを避けるために日影が少なく、開放感を感じさせる空間でなくてはならなかった。また、教室という機能上、柱や梁を使うことができない空間であったことから、以上の条件を満たす理想形がピラミッド型であったのだ。また、東北に偏心しているのは、西南方向に教壇が置かれるという内部構造から音響設定を行った結果であると考えられる。

提供：前川建築設計事務所

 文・宮本レン / 古藤真唯 / 吉川礼紗

学 習 院 大 学

七つの文化財

学習院大学キャンパス内に七つの文化財があるのはご存じだろうか。あなたが何気なく講義を受けている建物は国の登録有形文化財かもしれない。ぜひ本企画を通して学習院の建物についての知見を深めてほしい。

東別館（旧皇族寮）

奥まった場所にひっそりたたずむ東別館

東別館・車寄せ

■建築様式等

東別館（旧皇族寮）は、宮内省匠寮によって設計され、大正２（1913）年に建築されました。木造２階建て、桟瓦葺で、北側が寄棟造（屋根の頂部にある水平な棟から四方に隅棟が下りる形式の屋根）、南側が切妻造（屋根の頂部にある水平な棟から両端に葺きおろす形式の屋根）という複合的な屋根を持ちます。外壁は南京下見板張というアメリカ系の建築様式の影響がうかがえる一方、木肌を見せた塗装や欄間付きの引き違い窓を配するなど日本の伝統的な建築の要素も認められます。

■皇族寮として

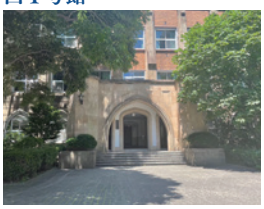
旧制時代は全寮制であったため、皇族学生のための寄宿舎・皇族寮として竣工された東別館の正面玄関には、馬車を寄せる車寄せがあり、桜花の校章が印され、鋳鉄製の柱で支えられた美しい玄関庇が設けられています。玄関庇に付けられた桜模様の飾りは、向かい合わせに建っていた院長官舎と対をなしていました。

竣工直後には４人の皇族が入寮していました。大正４年 (1915) には秩父宮雍仁親王が中等学科に進学しここを控室としており、皇族寮としての使用終了後は主に演習用の教室として使用されていました。その後は史料館として利用されています。

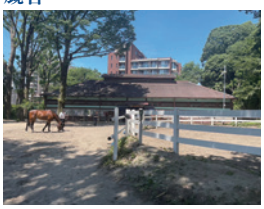
その他の建築

この他の建物たちも、在学生なら一度は目にしたことがあるのではないでしょうか。

西１号館



展舎



正門

北別館

乃木館（旧総寮部）

明治 41 年（1908）築

一見、民家の様な乃木館・手前には説明の立て看板が

乃木希典

■建物の概要

キャンパスの南西奥にたたずむ木造平屋建ての乃木館は、明治 41 年（1908）、6 棟の寄宿舎・食堂・衛生病棟とともに「総寮部」として建てられました。全寮制を導入した第 10 代乃木希典院長は、自らも総寮部内の一室に起居して、学生と寝食をともにしたそうです。昭和 19 年（1944）の総寮部取り壊しの際、乃木院長の居室部分だけが「乃木館」として保存され、現在は、書道部などの部活動に使用されています。

■建築様式

木造平屋建で、桟瓦葺、寄棟造の屋根／外壁は鎧子下見板張で、鉄格子付きの引き違い窓が配置／東・南・西の三方の外壁の窓下の小壁は、竪羽目板張りとなっており、下部に横長の換気口がある。

■乃木希典との関わり

乃木希典は全寮制を導入し、総寮部内の一室に起居して学生と寝食をともにしました。翌年には洋館を備えた院長官舎（昭和 39《1964》年博物館明治村に移築）が完成したもののそちらには移らず、大正元（1912）年に亡くなるまでこの建物で起居したそうです。竣工当時の建物は乃木の寝室、会議室兼居室、事務室、購買部、倉庫などからなり、乃木希典は学生と同じベッドや机、書棚などを使用し、軍隊生活で身に付けた質実剛健な暮らしをしていました。乃木希典の没後、昭和 19（1944）年に乃木の居室部分を「乃木館」として キャンパスの南西地へ移築しました。

南 1 号館（旧理科特別教場）

周りの緑とその外観から歴史を感じる南1号館

■歴史

南一号館（旧理科特別教場）は、関東大震災（1923 年）で焼失した校舎の再建の一環として、宮内省内匠寮によって設計され昭和 2 年（1927 年）に建設されました。当初は中等科・高等科の理科教室として使用され、昭和 24 年（1949 年）には大学理学部の研究棟となりました。現在は、各学部の演習授業などが行われています。

■建築様式

南一号館は、鉄筋コンクリート造で地下 1 階・地上 3 階建ての建物です。平面は H 型で、中央に玄関ポーチがあり、全体としてシンメトリーなデザインとなっています。ネオ・ゴシック様式を採用しており、1 階の尖頭アーチ窓や縦長の 2・3 階の窓、スクラッチタイル張りの外壁が特徴です。玄関ポーチには重厚感のある八角形の柱があり、各階の階段や窓枠、手すりにはアール・デコ風の意匠が凝らされています。また、当初から化学実験のためのドラフトチャンバーが設置されていました。

文・田中亜実／石戸さくら／中山優花

白 樺 の デ ィ ス ク ー ル

東からのぼりくる感情の陰に西にしずみゆく感情あり、我々はやむことのない
心のカスケイドによって生じる景色を愛でることを強要された、哀れな機械だ

頭はまだ何だか明瞭しない。
心細いほど真直な一筋道を、縊り殺されそうな淋しい杯をのみほさなければならないその孤独に耐え、
よろよろと歩く。いつまでも黙って歩く。

マイナスの感情が染みてきていた

冷え冷えとした夕方、視覚は遠い灯を感ずるだけで、心はほかにあって、いつものように幸福を感じることは出来なかった。何かもの足りない。何かおちつかない。彼は立ったり、坐ったりした。いろいろの本をもちだしてはひろいよみした。
彼は本物が見たくなった。レオナルド、ミケルアンゼロ、淋しい秋の山峡、レンブラント、ベートオフェン、髑髏、マーテルリンク、蝶蝓、ローマン・ロラン、蜂、ちょろちょろと燃える囲炉裡の根粗朶。
悲しみと淋しさに向って彼が自ずと用意していた甲冑がいつのまにか溶けている。自分の心には、何かしら死に対する親しみが起こっていた。自分が値しない幸福と死んでしまっていることの悲しみと、それは両極ではなかった。それ程に差はないような気がした。これを空と云うか。
美しすぎる自然の深いよろこびからあわれみの火花が飛び散っていた。それは自分の額に傷を与え、一人だけになったような心持ちがして、彼はまだ何となくすべての人の愛と感謝を信じ切れなかった。

生死について向き合い、死を身近に感じたからこそ、
生かされたことに使命を見出した

神よ助け給え。
頭はまだ何だか明瞭しない。

（この文章は白樺派作家たちの言の葉の断片を紡ぎ直すことによって生みだされた）

引用

有島武郎『カインの末裔』
志賀直哉『城の崎にて』
武者小路実篤『友情』

有島武郎
1878年生～1923年没。志賀直哉、武者小路実篤らと共に同人誌『白樺』に参加。代表作に『カインの末裔』、『或る女』など。

志賀直哉
1883年生～1971年没。「小説の神様」と称され、後続の作家たちに多大な影響を与えた白樺派を代表する小説家。代表作に『暗夜行路』、『城の崎にて』など。

武者小路実篤
1885年生～1976年没。同人誌『白樺』の創刊に参加し、新たな思想的潮流を生むだけでなく、「新しき村」建設により実践運動を行う。代表作に『友情』、『お目出たき人』など。

学生のミカタ 食堂

多くの学生が毎日利用し、お昼時には大行列を成す大学食堂。
そんな食堂の、学生に愛されるそのワケに迫る。

PART 1 店長さんに聞きました！

今回は岡本店長にお話をうかがった。店長のお話やお人柄から、食堂が学生に愛されるそのワケが見えてきた。

「自分のため」が「お客さんのため」に

——店長のこだわりを教えてください

うちはレトルトもあるけど6〜7割は手作りだね。ソース類はほとんど手作り。レトルトを使えばそりゃあ楽なんだけどね。でも大変な方を選んじゃう自分がいる。妥協したくないとかそんなのは考えてない。実際やってみたら「我ながら馬っ鹿じゃない？」と思う自分もいるんだけど、料理っていうのは、自分がいいなと思ってしまったら後先考えずに行動してしまうものなんだよね。仕入れも、独自の方法で直接業者に交渉して、学習院にだけ情報を提供してもらっているから、良いものを安く提供できるんだ。交渉は大変だけど、良いものを学生さんに食べてもらいたいから頑張っている。だから他の

大学の学食を食べたらうちの良さに気づいてもらえると思うんだよね。まあ、あまりにも人気になって忙しくなるのは困るけどね（笑）自分の中ではまだ納得していないんだ。もっと良いものが作れるんじゃないかって。だから自分が食べたいと思うもの、綺麗で美しいと思うものを提供できれば、必ずお客さんにも喜んでもらえると思う。よく「お客さんのため」とか言う人もいるけど、違うんじゃないかな。実際は自分のためにすることが、結果的にはお客さんのためにもなると思うんだよね。

――メニュー考案の裏側について教えてください

その時自分が食べたいものを、「よし作ってみよ！」って。2、3日前、なんなら当日に考案したメニューを提供する時もある。ここ最近の物価高の影響や原価の問題、仕入れの問題で、急遽変更したり、新メニューを出したりすることがあるね。それが学習院大学の食堂の特徴であり良さだと思う。

――店長の今後の目標を教えてください

やっぱりコロナ以前に戻したいというのは最低目標かな。例えば、さくらラウンジを再開したい、従業員のクオリティをさらに上げたいというのがあるし、元のメニューに加えてまた新たなメニューも入れたいとも思う。ただ元に戻せばいいというわけではなくて、新たなものを投入したい。今はどんどん世の中が変わってきているから、それに対応したものを出したい。まあ変えてきてはいるんだけど、もっとやりたいというのはある。ただやれていない。今後再開に向けて、とりあえず今は基礎を固めることが1番大事な部分ではないかと思う。やはり基盤がいかに固まっているかというのは、味のクオリティにも影響してくるんだよね。変なもの出しても意味ないでしょ？「なんだこれ」って言われても嫌だもん。恥かくようなことはしたくないというか。基盤がしっかりしていればクオリティは全然びくともしない。だから今は、クオリティが崩れないようなやり方をしていかないといけないのかな。

――最後に、学食を食べて日々を頑張る学生たちにメッセージをお願いします

従業員によく言うのは、怪我なく、事故なく、安心安全でいてほしいということ。そればかり心配している。ちゃんと美味しいもの食べているかなとか。カップラーメンを食べている学生を見ると心配になる。今はいいかもしれないけど、これから先、薬漬けの生活にならないかな、と。だからレトルトとか、そういうものを食べるなとは言わないけど、極力避けて、食堂を利用して、カレーでもカツ丼でもなんでもいいの、食べた方がいいんじゃないかなあ。お金の問題があるから言えないんだけどね。ただ、1人の親としてはやっぱり心配するかな。絶対嫌だもん。自分の子供がカップラーメン食べていたら。「カレーとか食べてこい」と言いたくなる。自分だったらね。本当に、今はいいかもしれないけど将来自分に返ってくるから。ちゃんと健康管理、気をつけてほしいと思う。やっぱり、健康な身体があっての勉強であり、将来であると思うし。後悔のないようなことをしてくれればいいのかなと。目先じゃなくて、将来的な自分の身体の中のことを気遣ってあげてほしい。それを大事に、勉学に励んでもらえれば良いのかなあと思います。

後悔のない生活をしてほしい

Gランチ！

学生の好きな学食ランキングで第1位に輝いたGランチは、
日によってメニューが変わるというのが1番の特徴である。
そこで、とある1週間のGランチのメニューを見てみよう。

学生100名に聞いた メニューランキング

第1位	Gランチ	¥450	23 票
第2位	カツカレー	¥410	16 票
第3位	唐揚げ定食	¥450	12 票

堂々の第1位に選ばれたのは、みんな大好きGランチ。Gランチはその名の通り、学習院ならではの名物メニューである。人気の理由はやはり安さ。懐が寂しい大学生にとって、450円という安さでお腹いっぱいになれるというのは魅力的である。また日替わりでメニューが異なるため、「今日はどんなメニューかな？」とお昼の時間を楽しみにさせるところもGランチが人気な理由の1つであろう。店長もGランチには特にこだわっているそう。納得の結果だ。

＼いただきます！／

MONDAY

G-Lunch

月曜日

鶏の照焼き＆白身フライ
ひじきご飯（味噌汁付き）

月曜日は鳥の照り焼きと白身フライと、学生が大好きなおかずを2つ同時に食べられるという嬉しいメニュー。ガッツリ食べて、良い週のスタートが切れそうだ。

TUESDAY

G-Lunch

火曜日

オムハヤシライス
唐揚げサラダ（味噌汁付き）

火曜日はオムハヤシライス。トロトロ半熟の卵はまるでカフェのぱっかーん系オムライスのよう。量が多く、唐揚げもついてくるため、おなかいっぱい食べたい人にオススメ。

＼どれにしようかなー♪／

PART 2

食堂の横綱

＼おいしいな〜／

WEDNESDAY

G-Lunch

水曜日

チキンカツおろしあん
おかか梅飯（味噌汁付き）

水曜日は大きなチキンカツ。学食とは思えないほどサクサクな衣に大根おろしの餡、ご飯が止まらない。

G-Lunch

木曜日

ハンバーグチーズ焼き＆
ミートパスタ
コロッケサラダ（味噌汁付き）

木曜日はみんな大好きハンバーグ！パスタとハンバーグにかかったミートソースは、実は大豆で作っているそう。美味しく栄養がとれる嬉しいメニュー。

THURSDY

＼ごちそうさまでした！／

FRIDAY

G-Lunch

金曜日

鶏竜田揚げ
ふりかけご飯（味噌汁付き）

金曜日はジューシーな鶏の竜田揚げ。食堂の人気メニューである唐揚げ定食とは少し衣が違い、甘酢だれがかかっている。これまた逸品。

取材・文／前田明歩、藤村咲子、松原正樹、猪俣俊人、及川翔太、田中茉莉、馬目晏奈　撮影／松原正樹、猪俣俊人

大学のオシゴト

学習院大学では多くの方々が働いていますが、
実際にはどのようなお仕事をされているのでしょうか。
普段何気なくお世話になっている
大学職員の皆さんについて調べてみました。

01 学長室広報センター

年間スケジュール

4月－7月	大学案内発行 オープンキャンパス等各種イベントの準備
8月	夏季オープンキャンパス
9月－3月	次年度の準備（広報活動の計画立案、広報媒体の制作） 秋季オープンキャンパス（10月） 入試結果分析、広報活動の振り返り（2月以降）

年間を通して、広報活動（広告出稿、相談会・説明会参加）を実施しています。

ある一日のスケジュール

8：40	始業、メール対応 取引先との打ち合わせ
11：30	お昼休み（1時間）
12：30	先生や学生に対する取材の立ち会い 冊子の原稿チェック
16：45	退勤

Q1 広報センターの概要と業務内容について教えて下さい。

大学の中で広報を担当するのが広報センターです。大学のブランディングをする一般広報と受験生獲得のための入試広報が主なお仕事です。特に入試広報は、Web サイトや大学案内などメディアを通じた広報の「間接広報」と、オープンキャンパスや説明会などで直接受験生と接する「直接広報」の２つに分かれます。

Q2 どうしてここに就職しようと思ったのですか。

私は学習院大学の卒業生です。自分の大学生活を振り返ったとき楽しい思い出ばかりで、今度は私が後輩を支える仕事がしたいと思い、学習院大学の職員を目指すようになりました。

Q3 この仕事のやりがいを感じるのはどんなときですか。

大学は学生がいて成り立つ場所、つまり受験生を獲得することは大学の運営に直結します。だからこそ「学習院大学を受けたい」という言葉が聞けたときや、実際に受験者数が増えたときには、学習院大学の魅力が伝えられたと実感でき、やりがいを感じます。

02 キャリアセンター

Q1 主な業務内容を教えてください。

セミナーや講座企画、講演、企業対応、学生相談、諸資料作成などです。

Q2 ここに就職した経緯は何ですか。

新卒就職は、民間企業（株式会社リクルート）で採用、営業、経営と様々な業務を担い、次世代の若者への教育事業を営もうと、起業しました。次世代の教育を柱に、2010年から母校にてキャリア・教育領域業務に従事しています。

Q3 この仕事のやりがいは何ですか。

多くのステークホルダー（学生・保護者・企業・官公庁・海外・マスコミ・桜友会）との接点を通じて、就業や、出会いの機会を提供できる点です。多種多様なステークホルダーからの感謝の声を聞く時にやりがいを感じます。

Q4 学生時代はどんな就職活動をしていましたか。

現代とは異なるアナログ就活時代でしたが、様々な企業や社会人に会って聞いてみよう、は意識しました。そして就職後はどんな組織・環境でも５年は絶対に辞めない（石の上にも５年）ことを決めて活動しました。

院の下の力持ち 知ってますか？

03 教務課

Q1 教務課の概要と業務内容について教えて下さい。

教務課は、授業、試験の運営、履修、成績処理、証明書の発行、学生情報の管理を担当し、学生と教員のサポートを行います。

Q2 学生時代はどのような就職活動をしていましたか。また、どの業界のインターンに参加しましたか。

大学職員を第１志望として就職活動を進めつつ、選考期間の遅さや倍率の高さを考慮して民間企業も視野に入れていました。３年生の夏から様々な業界のインターンに参加し、ＩＴ、教育業界などで自身の興味や適性を試しました。

Q3 どうしてここに就職しようと思ったのですか。

選考を受けた大学職員業界の中で、最も自分らしさを認めて内定をいただけたのが学習院でした。価値観を引き出す質問が多く、それに赤裸々に答えた上で内定をもらい、「ここでなら自分らしく働ける」と感じたことが決め手になりました。

Q4 この仕事のやりがいは何ですか。

日々事務処理や関連部署との調整を行っています。学生には見えにくい部分ですが、重要な学生生活を支えるという信念を持っています。窓口業務では、時には厳しい指導をしつつ、悩みを共に解決することで、学生の成長に繋がることにやりがいを感じています。

年間スケジュール（部署全体）

４月	学生センターオリエンテーション（毎年４月１日に実施） 履修相談の受付 ※特に４月に集中しますが年間を通じて対応しています 各種証明書発行開始 履修登録後の処理 授業開始対応、教室変更対応
５月	履修関係のデータ作成 国からの調査への回答作成
６月	履修要覧の作成開始 学期末試験準備
７月	先生への成績登録案内 学期末試験実施
８月	成績登録後の処理 教室備品の確認 次年度教室整備の計画 ２学期授業開始準備
９月	成績発表（成績調査） ２学期授業開始対応、教室変更対応 ２学期履修登録
10月	次年度授業計画の確認 次年度新入生ガイダンス準備開始
11月	次年度に向けた各カリキュラムの設定 学年末試験準備
12月	次年度の科目の設定
１月	先生への成績登録案内 学年末試験実施
２月	成績登録後の処理、卒業判定 次年度授業教室割振
３月	卒業・成績発表（成績調査） 退学・休学・留学願出の対応 卒業式業務 履修要覧納品 次年度時間割発表、シラバス公開 次年度授業準備 次年度ガイダンス・新入生ガイダンス準備 新学期履修登録の準備 新入学生学籍登録、新入生学生証発行

スケジュール上、２月から４月が繁忙期です。学生にとっての夏休み・冬休み・春休み期間も、成績の処理や次年度の準備等があり、一生懸命働いています。

1日のタイムスケジュール

8：40	始業、グループミーティング
9：00	メールや決裁書類の確認 窓口対応（履修相談や証明書の発行） 他部署や先生との打ち合わせ 履修データ、成績データ、授業データ等の管理 教室の点検、トラブル対応
11：30	お昼休み（１時間）
12：30	窓口対応（履修相談や証明書の発行） データや資料の作成 懸案事項の検討 他部署や先生との打ち合わせ 履修データ、成績データ、授業データ等の管理 教室の点検、トラブル対応
15：10	教授会への参加（隔週火曜日のみ）
16：45	終業

繁忙期は日中に窓口対応が多くあるため、終業時間後にメール対応やデータ、資料作成を進めることもあります。

取材・文／菊地慶治郎、藤原優花、平林渉、清水真穂、岩下向日葵、小西寅太、寺本悠莉　撮影／菊地慶治郎、松原正樹、清水真穂
取材協力／大学学長室広報センター、学習院大学キャリアセンター、学習院大学教務課

たまには専門外のことも学んでみませんか？

学習院大学ならでは！

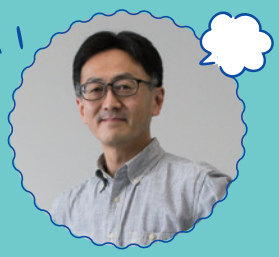
気になる講義

学習院大学では、学部を問わず受講することができるユニークな講義が開講されています。
私たちはその中から「現代マンガ学講義」と「宇宙利用論」に注目して取材を行いました。
それぞれの講義の概要や受講している学生の感想を通して、その魅力をお伝えします。

Lecture_01

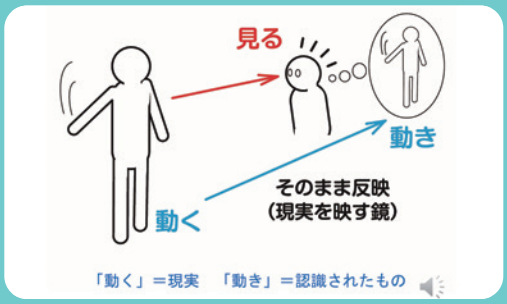
現代マンガ学講義

佐々木 果先生



講義内容（配当年次2～4年）

マンガやアニメーションなどの関連分野について、人文科学の観点や方法を生かしながら考えていく授業です。科目名には「現代」とありますが、**歴史的なアプローチを重視している**ので、実際には古い時代のことを考えることが多いです。現代の文化について考えるためには、それが成立した背景となる過去を見て、今と比較して考える必要があるからです。第１学期は、**主にマンガというメディアの成り立ち**を形式的な面から検討します。基本的には講義ですが、みなさんに文章や絵を書く課題に取り組んでもらう回も少しあります（絵の技術は必要ありません。落書き程度で大丈夫な内容です）。第２学期は、主に**文化的な観点**に立って、**マンガや関連分野の社会的な位置づけ**について考えます。特に戦後の大衆文化史という観点から検討をしていきます。



マンガの成り立ちをスライドと音声で説明！

受講生のぶっちゃけ話

私は法学科ですが、マンガを読むのが好きという理由でこの講義を取りました。私はコマの役割を学ぶ際に、既存の３コママンガの順番を入れ替えて、パターン別にストーリーを考えたのが印象に残っています。演習的な講義であるため面白さと学びの定着にも繋がり、**マンガの根幹にも興味がわく講義**なのでおすすめです！

（法学部法学科３年　横山大貴さん）

受講生学部別分布表

法学部	経済学部	国際社会科学部	文学部	理学部
563人	294人	214人	605人	37人

教授から聞いた！アピールポイントと開講理由

マンガ研究という分野は、大学の中ではまだ歴史も浅く、日本でも本格的な研究はまだまだこれからというのが現状です。**学習院では大学院の身体表象文化学専攻でマンガやアニメーションの専門的な研究をしており、この授業はその成果を踏まえた内容になっています**。より多くの人にこの授業に参加してもらうために、ある程度自由なタイミングで授業を受けることができる**オンデマンド方式の遠隔で開講しています**。そのこともあってか、今年度は履修者が非常に多くなり、授業運営としてはかなり限界に近づいてきている感じですが、今のところ履修制限は行っていません。来年度以降も、できる限りその方針を維持したいと思っています（もし限界を超えた時はごめんなさい）。この授業を受けて興味をもった人は、ぜひ大学院に進学して、マンガ研究に挑戦してみて下さい。

Lecture_02

宇宙利用論

渡邉 匡人先生

小塚荘一郎先生、乾友彦先生、SpaceBD社 西真一郎氏

講義内容（配当年次1～4年）

米国が発表したアルテミス計画を契機に宇宙活動の民間移行が加速し、**ビジネスチャンスのフロンティアとして宇宙が注目されています**。一方で、**宇宙でのビジネス競争が激化し新たな覇権争いが生じると、国際紛争の元にもなりかねません**。このため、宇宙空間を持続的にかつ平和利用していくために、今から宇宙空間利用に関する教育が必要です。上記背景から、**SpaceBD社と「宇宙利用論」のカリキュラム作成や授業運営を共同して行い**、2023年度より授業を開始しました。

本講義では、**宇宙に関わる実務者が最新の情報を学生に伝えます**。学生は学生同士で話し合いながら講義内容を振り返ります。そして、学生と講師での活発な質疑応答が行われています。講義後の感想では、**「他の講義とは違い、異なる学年・学科の人との交流や、知識を得るためだけでない講義を受けることができ新鮮だった。」**という回答も多くあり、**今までにない文理融合の授業**となっています。

受講生学部別分布表				
法学部	経済学部	国際社会科学部	文学部	理学部
12人	9人	20人	4人	29人

他学部で和気あいあいとディスカッションをする様子

Q1 文理融合のディスカッションでどのような見識を得られましたか？

私は文系の学生のため、「宇宙」という分野自体についていけるか、不安に思いながら受講していました。しかし、文理混合の講義だからこそ、その**不安感は理系の方との話し合いで解消できた**と感じています。そして、新しい知識をつけるだけでなく、**学年や学部を超えたお互いの知識共有と深堀が出来ているように感じています**。

（国際社会科学部４年　石島楓子さん）

私は理学部の学生ですが、他学部の学生と議論を重ねて行く中で、理論的な視点よりも想像的な視点で議論することが多かったです。そのため、**同学部の学生との議論では、想像もつかない意見が多く、新たな視点を得ることができました**。

（理学部数学科２年　深澤貴大さん）

Q2 「宇宙利用論」の学びを活かして将来に活かしたいことは？

「宇宙利用論」で得た宇宙が持つ可能性の大きさは私の将来に大きく影響を与えました。受講前の私は「宇宙」とは全く関わりのないものであると考えていましたが、**宇宙は私の身近にある存在である**と気づかされました。私の信条は常に挑戦的でいることですが、**宇宙には無限の可能性が広がっており、各方面において挑戦することが可能な業界である**ことが分かりました。現在、私は就職活動中でありますが、宇宙業界に事業拡大を行っている企業にも視野を広げました。未知の領域に手を出すことはリスクがあります。しかし、**それでもなお、挑戦をやめない宇宙業界は魅力の宝庫です**。

（国際社会科学部３年　藤本結衣さん）

私は宇宙に関わる仕事をしたいと考えており、この講義を受講しました。この講義では宇宙飛行士の方に宇宙での話を聞いたり、宇宙とエンタメを絡めて事業を行っている方の話を聞いたりしています。 受講前は宇宙に関わる仕事は宇宙飛行士や宇宙開発技術者などを想像していました。しかし、**宇宙産業開発に関わらずとも自身の興味と宇宙を結びつけて、仕事が出来ることを知り、私は仕事について広い観点から考えることができました**。私も講師のように自分の興味と宇宙を掛け合わせ、宇宙産業にも貢献できるようなビジネスを探したいです。

（理学部物理学科１年　宇田川絢加さん）

取材・文／横山大貴、大川桃子、伊藤心音、小関那奈、藤森かのん　撮影／横山大貴
取材協力／渡邉匡人先生、深澤貴大、石島楓子、宇田川絢加、藤本結衣　SpaceBD社

あなただけの手帳

バレットジャーナル

Bullet Journal

バレットジャーナル（Bullet Journal）とは、箇条書きを使って自分の予定やタスクを手帳に整理していく手帳術の事です。
バレットは本来「弾丸」を意味しますが、ここでは箇条書きの一項目を示すドット（・）を指します。
スマホ等でスケジュール管理している人も多い現代、今更手帳…?と思うかもしれませんが、
今やバレットジャーナルの輪は世界中に広がっています。 あなたも、自分だけの手帳づくりを始めてみませんか?

バレットジャーナルは、ライダー・キャロル（Ryder Carroll）が自身の頭の中を整理するためのノート術として編み出しました。彼は、「物事を整理して考えるのが苦手」という自分の課題の克服のため、ささやかな工夫を重ねました。その中で成果のあがった方法を紙のノートの中で組み合わせ、スケジュール帳やToDoリストなどの機能を１冊のノートにまとめ、そして出来上がったのがバレットジャーナルでした。

バレットジャーナルは、日記やアイデアのメモ、目標設定など幅広い用途に利用できるノート術となっています。少しのルールと自己流のアレンジを組み合わせて、ストレスを軽減した効率的なタスク管理を行うことで、あなたの目標を達成する助けとなること間違いなしです。 たった１冊のノートと１本のペンがあれば始められる、というハードルの低さもバレットジャーナルの魅力のひとつです。実際に自分の手で文字を書くことで気持ちが落ち着き、ただ目標達成のためだけでなく自身の休息のためにもつかえます。

黄色と深緑が特徴の図案スケッチブックでおなじみ、
大手文具メーカーのマルマンさんにお話を伺いました！

マルマン株式会社さん

1920年創業。スケッチブックの製造に始まり、マルマンは常に“書きやすい紙”にこだわったものづくりをしてきました。“Creative Support Company”として、紙を通して生まれるひらめきや創造力をひろげる製品をお届けしています。

Q バレットジャーナルの魅力とはずばり…

バレットジャーナル最大のメリットは、ペンとノートがあれば誰でも簡単にはじめられること。また、デジタルツールではなく手書きで管理するため、「アイデアを整理しやすい」「思考を深めやすい」「必要・不必要な情報がわかる」「記憶に定着しやすい」といったメリットもあります。“先延ばし癖”の解消やクリアになっていない思考・アイデアの整理、過去の振り返りなどに適している方法です。

Q 大学生におすすめの文房具を教えてください！

おすすめは「セッションバインダー」です。このバインダーは、項目ごとに整理でき、見たいページにすぐに辿りつけるので、勉強効率がUPします。淡いカラーやグラデーションといったカラーやデザインなのもおすすめの理由の一つです。サイズはミニ・B5・A4の3種類。ミニサイズは片手ほどの大きさで持ち運びやPCとの合わせ使いにも便利で、人気上昇中のサイズです。

Q 株式会社マルマンの強みはなんでしょうか？

マルマンのオリジナル用紙はすべて国産でなんと13種類もあります！これだけのオリジナル用紙を作れるのは、技術と伝統と徹底した紙へのこだわりがあるからこそ。どんな筆記用具にも対応する筆記用紙から、子どもから専門家まで様々な要望に応える画紙まで。あなたの用途にぴったり合った紙がきっとみつかります。

Q ペーパーレス化が進む今を生きる大学生に向けて一言お願いいたします！

デジタル社会が進む中、日本人はノートやスケッチブックの重要性に気づき始めています。マルマンは、紙に触れ書くことで思考を整理する価値を見直し、顧客とのコミュニケーションを深め、新たな価値を創造することに注力します。歴史ある製品開発を続け、デジタルとアナログが融合する時代でも、マルマンは「紙」という自然の贈り物を通して、みなさまの毎日がより豊かになるよう応援しています。

サイト「Life with Journal 暮らしを整える手帳とノート」を
運営されているゆかさんにお話を伺いました！

ゆかさん

高校生のころに雑誌に載っていた手帳に一目惚れしてから、手帳の楽しさに目覚め、
年中手帳のことを考えている手帳好き。2016年にバレットジャーナルと出会い、
ますます手帳や文具の魅力にハマる。手帳と手帳のおともの文具について情報発信をしている。

Q バレットジャーナルの魅力とはずばり…

「今に集中できる」ということ。まさにマインドフルネスなノート術です。頭に浮かんだあれこれを全て受け止めてくれるバレットジャーナル。1冊のノートに書き込んでおけば、あちこち情報を探す手間も省け、必要になるときまで忘れていても問題ありません。今日のページを開けば、やることや、予定に集中できます。また、書き出すことで、不安や考え事で頭がゴチャゴチャしたときの整理にも役立ちます。

Q 大学生におすすめの文房具を教えてください！

マイルドライナー（ゼブラ株式会社）

おだやかで優しい色合いが特徴のラインマーカー。イラストを描いたり、大事なところに印をつけたり、手帳にも授業のノートにも役立つ。バレットジャーナルの枠線を描くときにも便利。全35色とバリエーションが豊富なのも嬉しい。

日付印（シャイニー S-400）

インクパッドが装填されていて、手軽にポンと日付が押せるスタンプ。かっこいい日付印で、ノートが引き締まる。ノートを書く時に押せば、さあやるぞ!と気持ちの切り替わりにもなる。

インクパッド内蔵のシャイニー商品以外にも、インクパッドが別となっている lebez 商品などがあります！

Q ゆかさんがバレットジャーナルに出会う前はどんな手帳を使っていましたか？また、バレットジャーナルの方がその手帳よりも優れていると感じる点はどこですか？

私が大学生の頃は、バーチカルタイプの手帳を使っていました。時間軸が縦に並び、一週間の予定が見渡せるタイプの手帳です。市販の手帳は、時間軸などが固定なので、自分の生活時間帯と合わないことがあります。バレットジャーナルは、自分でフォーマットも書けるので、自分の生活に合わせて調整することが可能です。また、書く分量も調整できるので、たくさん書きたい日は思う存分書き、書くことがない日は、スキップすることもできる点が使いやすいです。

Q ペーパーレス化が進む今を生きる大学生に向けて一言お願いいたします！

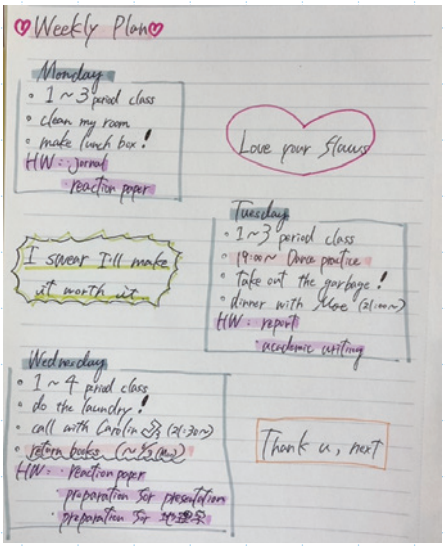
アナログなノートや手帳は、時代に逆行しているかのように思われますが、デジタルにはない良さがあります。手で書くことで記憶に残りやすくなったり、感情や思考が整理されたりする効果もあります。紙の手触りを感じながら、手帳を通して自分自身を見つめる時間を大切にしてください。とはいえ、アナログの手帳を使うことは決して、デジタルを否定することではありません。デジタルの良さも上手に取り入れながら、自分だけの手帳ライフを楽しんでみてください。

バレットジャーナル、やってみよう

バレットジャーナルの魅力が少し分かってきたところで、
実際に企画メンバーがバレットジャーナルに挑戦してみました！
その中で出たお悩みに対し、マルマンさんやゆかさんから
アドバイスも頂いています。これを読んであなたも、
一冊のノートからバレットジャーナルを始めてみませんか？

お悩み 1

イラストを入れたいのですがあまり描くのが得意ではありません。可愛く余白が埋まる方法を知りたいです。



マルマンさんからのアドバイス

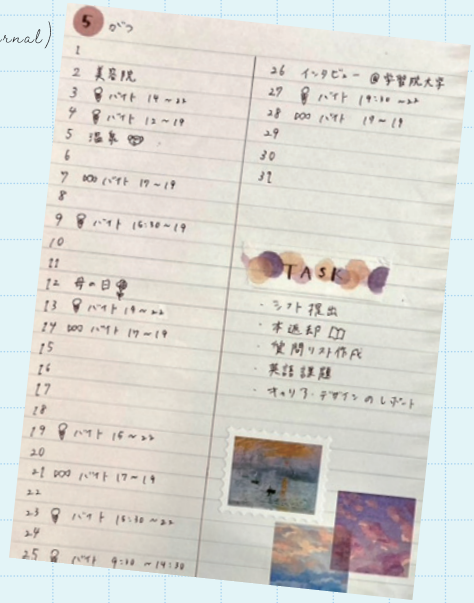
写真を加えたり、イラストを描いてみたり、もし絵が苦手であればマスキングテープでデコレーションしながらスタンプを押してみたり。自分らしく楽しんでいってください！

ゆかさんからのアドバイス

好きな言葉を散りばめると、ページを開くたびに気分が上がりますね！ スペースを埋めるためにシールやマスキングテープを使うことも多いです。100円ショップでも可愛いシールがたくさん販売されているので、私もいろいろ買ってストックしています。あとは、スタンプ（ハンコ）などもアクセントになって良いですね。様々な作家さんが販売されているので少しずつコレクションしていく楽しみもあります。

感想・まとめ

幼い頃から文字がたくさん書かれた日記に憧れ、何度か挑戦したことがありましたが、なかなか続かず三日坊主で終わってしまうことがよくありました。しかしバレットジャーナルを始めてから、日記ってこんなに気軽に始められて自由度が高いものなんだ、と考えを改めさせられました。書き忘れても翌日から始めればいいという心持ちは、忙しい人にとって続けやすいポイントになるのでいいなと思いました。またバレットジャーナルを書いていないと、日々感じたことをメモに残すことはないので、自分自身が考えていたことを振り返ることができて楽しいです。



お悩み 2

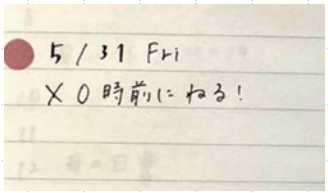
出かける予定が無い日など書くことが思いつかない事があります。もっとゆるく「お昼寝」などをタスクにしてもいいのでしょうか。どこまでを「タスク」とするかの匙加減が難しいです。

マルマンさんからのアドバイス

マルマンでご紹介している、バレットジャーナルを続ける4つのコツ。その中で「完璧を目指さない」というものがあります。バレットジャーナルに抜けや漏れがあっても、過剰に気にする必要はありません。ToDoリストを作成するものではないので、書き忘れた日があれば翌日から再開し、書き間違いがあれば二重線ですぐに修正すればよいのです。もっとカジュアルに付き合っていくのがバレットジャーナルのいい所だと思います。

ゆかさんからのアドバイス

今日はゆっくり昼寝するぞー!と意識しているときは書くのもよいと思います！ ただ、無理して書かなくても良いのではないでしょうか。予定やタスクを書くだけがバレットジャーナルではないので、１日が終わったあと、その日に感じたことや思いついたアイデアをメモしておくのも一つの方法です。「今日はのんびり過ごせた」とメモしておくのもいいですね。また、毎日行うようなルーティンも記録しておきたい場合は、一週間や一ヶ月まとめてハビットトラッカーのような形で記入しておくのも良いと思います。できた／やった日にチェックをつけていくと達成感を味わえます。



 取材・文／高橋由唯璃、今野有季乃、飯塚瀬里、高島帆乃花、勝原杏菜、髙杉紗弥子

Ikebukuro　Takadanobaba　Mejiro

学習院生必見！

大学周辺のガッツンと飯！

食堂、お弁当、キッチンカーなどなど、「今日のお昼ご飯どうしよう?」と迷う方も多いのではないでしょうか？今回は、そんな悩める皆さまに是非知って頂きたい大学近くのお店を紹介していきたいと思います！

1 肉の八十二食堂

Mejiro

★東京都豊島区目白3の13の23 八白店舗2F
★目白駅から徒歩3分

厚切りチャーシュー定食

ランチ 1,280円

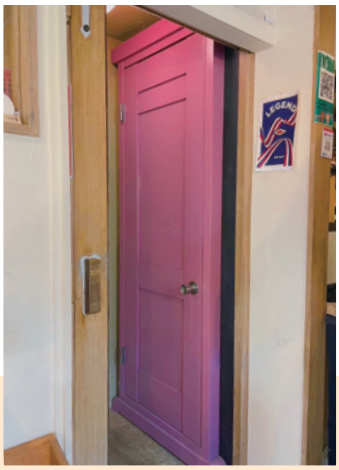
ディナー 1,680円（ドリンク付き）

「肉の八十二食堂」は、目白から徒歩3分の場所にある大衆食堂です。店内は昭和レトロを彷彿とさせる雰囲気で、常に様々な年代の音楽が流れています。カウンター席とテーブル席があり1人でゆっくりご飯を食べたいとき、もしくは大人数で楽しくご飯を食べたいときのどちらでも楽しく過ごせるお店です。またSNSも積極的に使用しており、Instagramで多くの情報を得ることができます。

このお店では11時半からお昼の定食が食べられます。どのメニューもボリュームがあり食べ盛りの学習院生にはぴったりです。また15時半までお昼の定食を食べることができるので、空きコマでお腹が空いたときにも活躍します。TAKEOUTも可能なので大学で食べたいなんてときにもいかがでしょうか？目白で1番と言っても過言ではないほどおすすめのお店です！

今回取材班がいただいたのは店主おすすめの厚切りチャーシュー定食。3日間手間暇かけて作られるこだわりのチャーシューが2枚も乗っている贅沢な一品です。驚いたのはなんといってもその分厚さ！　厚さ3センチほどあるお肉は噛み応え抜群で満足すること間違いなしです。

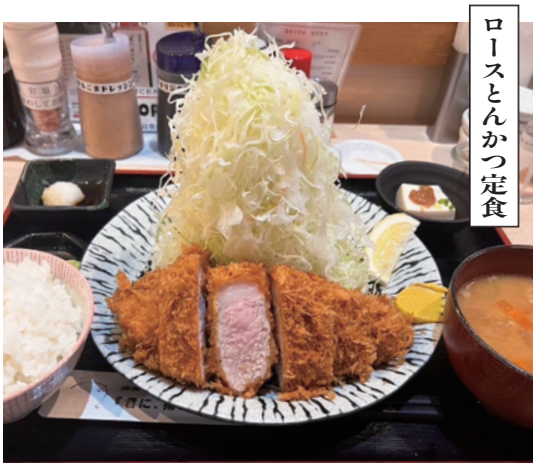
また、定食は副菜も充実しておりお肉以外も楽しむことができるようになっています。サラダのドレッシングは酸味があり、ほかの副菜もさっぱりとした味付けになっていて、チャーシューとの食べ合わせが非常に良く、老若男女誰でも食べやすいように工夫されていることがわかります。



お店の入り口を上がった先にはなんだか見覚えのあるドアが！　この先には一体何があるのでしょうか？

2 Ikebukuro 君に、揚げる。

★東京都豊島区南池袋 2-47-7 サンハイツ池袋 1F
★池袋駅東口から徒歩８分



ロースとんかつ定食

ヒレかつ定食

「君に、揚げる。」は、池袋駅東口から徒歩８分の場所にあるとんかつ屋です。店内は清潔感のある内装と、店主を中心とした明るい従業員の方々が接客しており、とても居心地の良い空間となっています。

今回の取材でいただいたのは、店主おすすめのロースとんかつ定食とヒレかつ定食です。お肉の中心まで加熱調理をするのではなく、余熱で火を通すことでお肉がとても柔らかく、絶品のとんかつとなっています。そして、このお店のすごいところは何といってもご飯とキャベツの大盛りです。無料でご飯かキャベツのどちらか１つを大盛りに変更可能と学生にとって非常にありがたいサービスを提供されており、そのサイズは１番大きいものでご飯は約５００g、キャベツは約２５０g！　自分の食べきれる量を注文するよう心がけましょう。もちろん普通サイズも用意されていますのでご安心ください。部活後や試験前の願掛けにガツンととんかついかがでしょうか？

テーブルには、下の写真のようにさまざまな調味料が並べられています。

店主のおすすめは自家製とんかつソースと岩塩。自家製とんかつソースはごまが入った甘めのオリジナルソースで、とんかつとの相性が抜群でした。岩塩はアンデスの紅塩を使用していて、お肉自体のうまみと衣のサクサク感をより楽しむことができます。

また、ロースとんかつにはわさび塩やわさび醤油、ヒレかつには醤油がおすすめだそうです。

他にも、定食にはおろしポン酢・からし・レモンが付いていて、何度も味変をしながらとんかつを楽しめました。

卓上には自家製のピクルスもあります。とんかつを待っている間に自由に取って食べることができ、野菜のみずみずしさとお酢の程よい酸味がおいしかったです。

ドレッシングはごまと青じその２種類のオリジナルドレッシングがあるため、ボリューム満点のキャベツも飽きずに楽しむことができます。

3 Mejiro MAC's CARROT

★東京都豊島区目白3の16の16
★目白駅から徒歩4分

今回は目白駅から徒歩4分の場所にある「MAC's CARROT」にお邪魔しました。広々とした店内は大人数でもくつろぐことができ、晴れた日にはテラス席での食事も楽しめます。また、どのメニューもボリューム満点でお腹いっぱい食べることができ、大きな満足感を感じることができるお店です。

頂いたチキンカレーはなんといっても上に乗った大きなチキンが魅力！ ガーリックが利いたカレーと肉厚で柔らかなチキンを一緒に味わえる大満足の一品です。ひとりでガッツリ食べてもよし、数人でシェアしてもよしとなっています。また、カレーに限らず全ての料理にトッピングが付けられ、様々なアレンジを楽しめます。

創業51年となる今でも、「いつ来ても同じ味が出る店」、「100年続く店」を心掛けて先代オーナーさんから引き継いだお店の味を守り続けています。入口の看板に書かれた「THE FIRST&LAST」という言葉が表すように、一日の始まりの朝にはコーヒーを、一日の終わる夜にはお酒やディナーという風に、いつ来ても楽しめるお店であることを目指しているそうです。お腹が空いたときにはいつでも！ 立ち寄ってみてはいかがでしょうか。

チキンカレー

4 Takadanobaba Curry Kitchen CACA

★東京都新宿区高田馬場2の19の8
★高田馬場駅から徒歩2分

「Curry Kitchen CACA」は、高田馬場から徒歩2分のところにあるカレー屋さん。店内は落ち着いた雰囲気で、カウンター席と小さなテーブル席があり、ひとりでも友達と行くのもおすすめです。お財布に優しい価格で、ガッツリしたカレーを楽しむことができます。

今回、頂いたカレーはどちらもカレー本来の味を楽しんでもらうべく辛さは控えめで、スパイスのジャリジャリ感を無くして作られています。そして、なんとご飯おかわり無料&学生証提示で100円引き！（全てのメニュー可）さらには、食べた分だけ貯まるスタンプカードもあり、最後の特典（先着順）ではトッピングが永久に無料に！ また、お昼だけでなく夜まで営業しており（詳細はSNS参照）、とても学生に優しくガツンと食べたい日には訪れたくなるお店です。気さくな店主が考え抜いた絶品カレーを食べに行ってはいかがでしょうか？

スタンダード牛すじカレー

カレーチャーハン

5 江戸麺 GOODLE

Takadanobaba

★東京都新宿区高田馬場 4-13-13 ★高田馬場駅から徒歩４分

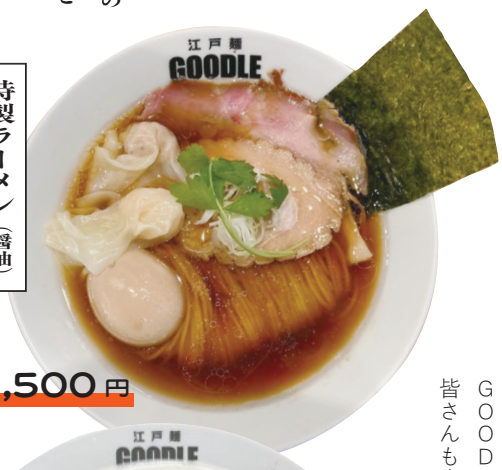
今回お邪魔したのは、学業や仕事の活力となるような本物のラーメンを目指しているという「江戸麺 GOODLE」様。一歩店内に入ると、和モダンな落ち着いた雰囲気が広がっており女性でも足を運びやすい印象がありました。

今回頂いたのは味玉鶏白湯ラーメンと特製ラーメン（醤油）。

女性におすすめのメニューである鶏白湯ラーメンは、全体的にさっぱりとした味わいです。特に、チャーシューは低温調理のレアチャーシューを使用しておりとても柔らかく美味しかったです。また、三河屋製麺特製の滑らかな細麺はシンプルなスープとの相性抜群！

もう1つは、学生におすすめのチャーシュー、味玉、肉ワンタン等の全トッピングが乗せられた特製ラーメン（醤油）です。見た目の華やかさは勿論、お店のこだわりの1つである、鶏の旨みを逃さぬように旨味が抽出されたスープをしっかり堪能できるとても美味しいラーメンでした。

外国人の方から老若男女まで様々なお客様に来て頂けるようコッテリし過ぎず満足感のある1杯になっている「江戸麺GOODLE」さんのラーメンを皆さんも食べてみてください！



特製ラーメン（醤油）

1,500円

味玉鶏白湯ラーメン

1,150円

6 渡なべ

Takadanobaba

★東京都新宿区高田馬場 2の1の4
★高田馬場駅から徒歩10分

今回お邪魔したのは「渡なべ」様。ラーメンプロデューサー渡辺樹庵さんが代表を務めているお店で、豚骨魚介系のラーメンを提供しています。渡辺さんの「隠れ屋のようなお店」というイメージから生まれたスタイリッシュな内装で美味しいラーメンを楽しむことができます。

今回頂いたのはおすすめメニューである「味玉らーめん」。

鯖節と宗田節を用いたこってりしたスープの後に魚介の香りが口いっぱいに広がり、何回も飲みたくなるようなスープとつるっとした中細ストレート麺の相性が抜群！ さらに私達が驚いたのは一口では食べきれないほど大きなメンマ！ この理由として「渡なべ」さんは短冊状の乾燥メンマを3日かけて戻して、途中で提供するサイズにし、味付けして、再び1日寝かせる、というようにメンマを5日間もかけて作っています。だからこそ、意識して食べて欲しいという思いでこの大きさにしたそうです。

また、チャーシューは通常バラ肉を使用しており、火入れの時間を短くする事で味がパサっとなるのを防いでいるそうです。

多くの工夫が凝らされ最後まで食べ応えのあるとても美味しいラーメンでした！

皆さんもぜひ、立ち寄ってみてはいかがでしょうか？

味玉らーめん

1,250円

取材・文／藤岡朱莉、山下航、吉田千鶴、川野愛美、小紫愛和、佐々木舞緒、菅原優羽

We Love vinyl & Turn Table

レコード、聴きたい。

サブスク全盛の現代で、再ブームとなっているレコード。
何が人々を魅了するのか、なぜ今レコードなのか。その魅力を紐解く。

取材協力

TOWER VINYL SHIBUYA

〒150-0041
東京都渋谷区神南1-22-14 6F

2024年2月の店舗リニューアルで6Fの全てがレコード売り場に。売り場面積が約2倍に拡大した。

国内外のレコードを約10万枚取り揃える。

新品と中古の比率は6：4くらい。レコードの『面』を見せるディスプレイと余計なものは置かないことがこだわりです。

レコードに加え、最近密かにブームになりつつあるカセットテープも販売。中古だけでなく、新品もあるのが驚きだ。さらに、中古のバンドのポスターやＴシャツも同フロアにて販売。

「あえて」を楽しむのが一番の魅力

インタビューに答えてくださった店員の武田さん。
お気に入りのレコードは
「Joy Division/Unknown Pleasures」。

拡大をした理由や狙いはなんですか？

やはり一番大きいのは海外からの観光客の方が戻ってきていることでそこのニーズに合わせて、という所ですね。もちろん日本のお客様も増えてきてはいるんですけど、それとは比べ物にならないくらい海外の方が増えています。今はもう7割くらいが海外の方です。現在では日本・海外共にレコードの人気と需要が高まっています。

——確かに今も店内に外国人観光客の方がいますね。やはりここ数年でレコードの再流行は感じていますか？

そうですね。今はサブスクでも聴けるのにあえてレコードを選ぶっていうのは、その『あえて』を楽しんでいるのかなと思います。若い人はむしろレコードを新しいメディアとして捉えている人が多いみたいです。以前は、プレーヤーがなくても、好きなアーティストがレコード出したからとりあえず揃えてコレクションするという方もいらっしゃいましたが、今はそのような方々もやっぱりプレーヤーが欲しいと言ってご来店されるようになっています。

——ではこのブームはこれからも続いていくと思いますか？

はい。でも、数年前は一枚2、3千円だったのが今5千円くらいします。輸送コスト、材料費などの高騰もあり価格が上がっていく中でどうなっていくのかがひとつの課題かなと思います。

——レコードの魅力はどこにあると思いますか？

レコードは作るのが大変なので、期間限定で少量だけ作っているものが多いです。中古だとお店に一枚しかないこともあるので『あ、これあるんだ』とそのときの出会いが楽しくてどんどん集めてしまいます。あとは、昔の曲をレコードで聴くと当時の雰囲気を味わえることとか、バンドの音が生々しく聴こえるのも特徴だと思います。

——レコードを趣味にすることは大学生にもおすすめですか？

そうですね。レコードはあまり価値が下がらないので、学生時代から集めていても大人になったときに後悔しないですし、無駄遣いではないと思います。

あと今、音楽ってネットで気軽に聴ける時代ですけど、便利すぎると逆に向き合わなくなる気がするんですね。その対極にあるのがレコードです。値段もするし、丁寧に扱わないといけないので、そういった意味では時間をかけて向き合うものです。しかも、外ではなかなか聴けないので家でじっくり時間を取りますよね。聴いているときにライナーノーツを読んだり、そのアーティストについて調べたりっていう時間を作る。そうすることでどんどん音楽との関わりが深くなっていくんじゃないかなって思います。うちはレコード初めてだけど興味があるというお客様にもご来店いただきやすいお店というのを目指しているので、是非学生さんにも気軽に来ていただきたいですね。詳しい店員も沢山いるのでわからないことがあったら何でも聞いてください。

——他のレコード店と違うと自信のある所はどこですか？

ワンフロアでここまで大きいレコードショップは日本には他にはないと思います。他の大手のレコード店は中古品を多く扱う所が多い中で、うちは国内でリリースされた新譜は基本全部入荷しています。新品をここまでしっかり取り揃えているお店というのはアメリカでもそんなにないので、最近は海外からのお客様も非常に多いですね。

——今回のリニューアルで売り場の

01 迷ったらこれ、間違いない名盤３選。

TOWER VINYL SHIBUYA で人気のレコードと店員さんのおすすめをピックアップ。

01

『Taylor Swift/1989』
（2014）

洋楽では一強と言っても過言ではないほど売れているという名盤。「日本人だけでなく、外国人観光客もうちで買っていく人がいます」

02

『久石譲 / となりのトトロ
サウンドトラック集』（2018）

日本の文化として人気のアニメはレコードでも売れているという。特に外国人観光客にはジブリが人気で、お土産感覚で買う人が多いそう。レコードで聴くとより雰囲気がある作品。

03

『山下達郎 /FOR YOU』
（1982）

大学生へのおすすめとしても選んでいただいたおすすめの1枚。「シティポップといったらもうこれです。」時代を感じさせるジャケットも魅力。（権利の関係でジャケット写真は省略）

初めてのレコード体験。02

レコードに触れたことすらほとんどない記者４人のありのままのレポート。

記者たちもレコードの魅力を知るため、試聴体験をさせていただいた。試聴に選んだのは店員さんが「大学生へおすすめの1枚」としても選んでくださった『山下達郎 /FOR YOU』。ディスクをプレーヤーへ置き、針を落とすところからレコードを聴く時間ははじまる。

TOWER VINYL SHIBUYA にはオーディオ設備の整った試聴スペースも完備。（試聴の際には店員さんへの声がけが必要。）レコードに興味が出たら是非足を運んでみよう。

記者の感想

Voice_01
針を落とすという行為がすごく
繊細で、感動した。

Voice_02
高音も低音もクリアで音が立体的。
ライブハウスにいるかのよう。

Voice_03
音に深みがあり、音楽の雰囲気を
強く感じることができた。

Voice_04
音質が良いのに、どこか
古めかしいようなレトロな音だった。

Voice_05
レコードには聴くまでに手間がかかったとしても、
準備をして家でゆっくり聴く価値のあるものだと感じた

03 さて、プレーヤーを買って聴いてみよう。

高価でハードルが高いイメージのオーディオ機器。しかし今では初心者でも手を出しやすい
比較的安価なものも数多く存在する。好みの相棒を手に入れてレコードライフを楽しもう。（価格は編集部調べ）

01

Amadana Music
レコードプレーヤー SIBRECO

スピーカーを内蔵しており、これ1台でレコードを楽しむことができる。洗練された高級感のあるウッド調の見た目が特徴的。インテリアに馴染みやすいビジュアルで、大人っぽく落ち着いた部屋作りがしたい人にもおすすめ。（¥17,600）

02

ION AUDIO
Vinyl Transport

トランク型のデザインがレトロでかわいいプレーヤー。こちらもスピーカー内蔵な上、単3電池での駆動も可能なため、持ち運んで外でもレコードを楽しむことができる。複数のカラーラインナップからきっとお気に入りが見つかるはずだ。（¥9,400）

03

Audio technica
SOUND BURGER

レコードプレーヤーに見えないコンパクトでポップな見た目が目を引く。珍しいそのデザインだが初代モデルが発売されたのは1982年。最新モデルは Bluetooth 接続したスピーカーなどで聴くことが可能。（¥23,980）

プレーヤーにレコードを挟んで使う
姿から“BURGER”の名がついた

取材・文/鈴木乙文、小崎有彩、高柳信之介、橋本和樹、宮本采依、新井さら、新井悠久、関田百華
取材協力/タワーレコード株式会社、徳間ジャパンコミュニケーションズ、amadana株式会社、inMusic Japan株式会社、株式会社オーディオテクニカ

大人が絵本に惹かれるワケ

～豊かな読書体験をあなたに～

詩的な文章と様々な絵に彩られた、子供の読みもの"絵本"。
なぜ私たちは大人になっても絵本を読みたくなるのでしょうか。そのヒミツと、絵本を楽しめるスポットをご紹介します！

ちひろ美術館・東京

緑生い茂る、開放感のある入口。2002年、全館バリアフリーに生まれ変わった館内には、誰でも楽しめる工夫がたくさんあります。中にはどんな展示があるのでしょうか。

ちひろ美術館はいわさきちひろを含む228名の絵本画家の作品を収蔵する、世界で最初の絵本美術館です。上井草駅から徒歩７分の美術館は、実はちひろの自宅兼アトリエ跡に建てられています。彼女が描いた水彩画を見ながら、なつかしくてやさしい気持ちになってみませんか。

〒177-0042　東京都練馬区下石神井 4-7-2

展示室にはちひろの絵がたくさん飾ってあります。作品の中心が床から135cmのところに設置されているため、大人と子どもが共に作品を楽しめます。

ちひろ美術館・東京の魅力

昭和52年９月、ちひろ美術館はちひろの作品展示の常設化を希望するファンの声をもとに設立されました。追悼展に訪れた多くのファンがいつでも作品を鑑賞したいと願ったそうです。しかし、当時は絵本＝芸術という考えがまだなく、美術館で絵本の展覧会を開催するところはありませんでした。そこで美術館の建設のために募金活動が始まり、自宅兼アトリエ跡に「いわさきちひろ絵本美術館」として開館しました。

世界ではじめて設立されたこの絵本美術館は通常の美術館と大きな違いがあります。それはあらゆる人々にとっての「ファーストミュージアム」であり得る、ということです。ちひろ美術館では展示する絵の中央の高さを１３５㎝に設定しており、これは子供が鑑賞しやすく、大人にも程よい高さになっています。他にも18歳以下は入館料が無料、子供が靴を脱いで遊んだ

緑がたくさんな「ちひろの庭」。ちひろが愛した草花が植えられています。アトリエのベランダからは、庭の花々が見下ろせたそうです。

美術館のおすすめスポット、「ちひろのアトリエ」です。画机や本棚など、部屋ごと忠実に復元されており、ちひろを身近に感じることができます。

職員さんおすすめの絵本

『なぜ　あらそうの？』

（ＢＬ出版）ニコライ・ポポフ作　1,650円

この絵本には言葉は一切無く、絵のみでとても大きなことを伝えています。表紙には、にこやかに花を見つめるカエルが一匹描かれています。しばらくして、そのとなりにネズミが現れますが……。ページをめくる度にカエルとネズミの報復と応酬が続きます。原題はWhy？（なぜ？）。子どもだけでなく大人にも、「なぜ？」とこの絵本を通して考えてほしいです。

り、絵本を読める「こどものへや」があったりなど、ちひろ美術館には子供から大人までが楽しめる工夫がたくさんあります。実際に、休日は家族連れが多く、平日は大人や学生が訪れるなど、来場者の年齢層は幅広いです。

また、ちひろ美術館には「教育プログラム」があり、水彩技法体験や読み聞かせ、ギャラリー・トークなどを実施しています。水彩技法体験では、水彩絵の具を使ったにじみの技法を体験することが可能です。にじみは同じものが1つとしてない作品を生み出し、このような「色の不思議さ」を知ることによって、よりいっそう作品を味わうことができます。絵本の読み聞かせは毎月の第2・第4土曜日に実施しています。参加費は無料で、子供だけでなく大人も参加することができます。

絵の素晴らしさ、楽しさを知ることは私達の想像力を豊かにし、多くの可能性を広げます。絵本を楽しむことに年齢など関係ない！皆さんもぜひ、ちひろ美術館を訪れてみてはいかがですか。

 ※掲載している写真は全て撮影当時のものです。

Book house cafe

神保町駅の近くにある、子供の本と食事が楽しめるBook house cafe。店内は落ち着いた雰囲気で、国やジャンルを問わず様々な絵本を販売しています。「親子で楽しめるブックカフェ」がコンセプトですが、絵本作家を招いたイベントなども行われており大人だけで来店しても充分に楽しむことが出来ます。訪れて、あなたにぴったりな絵本を探してみませんか。

〒101-0051　東京都千代田区神田神保町 2-5　北沢ビル 1F

“低学年向け“、”入手がむずかしい本”、“かがくのほん”…棚には色々な種類の本がたくさん並んでいます。思い切って手に取れば、新たな絵本との出会いがあるかも！？

前述したとおりBook house cafeでは絵本だけでなく、おいしい食事も楽しむことができます。アツアツなチーズが香ばしい焼きハヤシや、ヘルシーで一品ずつこだわりが感じられる和弁当、またケーキやプリンなどのデザートも提供されており、食べ盛りの子供も、健康に気を遣う大人にも楽しめるメニューになっています。

大人にとって絵本とは

――大人の方にはどのような絵本が人気なのでしょうか。

装丁が凝っているものを手に取る方が多いように思います。しかし、読書の楽しさを自分自身で見つけてほしいという思いから、大人向けの絵本コーナーというものはあえて設けていません。

――大人向けの絵本は近年多く作られるようになったものなのでしょうか。

大人向けの絵本は近年になって急に新しくできたものではないと思います。もともとあった絵本という存在に、大人が目を向けるようになったのではないでしょうか。

――なぜ大人の方が絵本に目を向けるようになったのでしょうか。

1つには、社会の変化が関係していると思います。昔は絵本というと、女性や子どものものというイメージがありました。しかし現在は、男性も優しいものや可愛いものを「好き」と言える社会に変化しつつあるように思います。今はお父様とお子様で来店される方もたくさんいらっしゃいます。

絵本は自己対峙のきっかけをくれるものだと考えています。お友達と一緒に来てお話をしながら読むのも楽しいですが、1人で来てもきっと楽しい時間になると思います。あなただけの一冊を見つけてほしいですね。

編集委員からのおすすめの絵本

『おおきなおさら』（パイ　インターナショナル）

あさのますみ作　イシヤマアズサ絵　1,350円

心癒されるタッチで紡がれるくまのルウさんと大きなお皿の物語。夫のムーさんから贈られた大きなお皿はルウさんの宝物。２人のときも家族が増えても思い出は大きなお皿と共にありました。けれど子どもたちは巣立ち、ムーさんも……。幼い頃よりも失う悲しみが分かるようになった大人だからこそ、より強く心に響くストーリーです。気がつけば思い出の品に思いをはせている。そんな感動の１冊！

取材・文・撮影／田中朋歩、鈴木夏音、山本佳奈、松本明香里、堀内沙来、福田さくら

ESSAY 01

先を生きた／生きている人

深澤 克俊
Fukazawa Katsutoshi
学習院女子中・高等科　国語科教諭

「なんで先生になろうと思ったんですか？」

生徒から聞かれるこの質問に、毎回なんと答えようか悩んでしまいます。そもそも「先生」という呼称は教員だけでなく、医者や弁護士、政治家、作家などにも使われるものであり、自分が今「先生」であるということが、実は未だにしっくりときていません。

二〇一八年に『先に生まれただけの僕』というテレビドラマが放送されましたが、「先生とは何か」という根本的な問いを考えさせられました。

◆

さて、このたび「先生の先生」というテーマでの依頼を受け、改めて自分にとっての「先生」について考えてみました。特定の職種に限定するのではなく、「先を生きた（生きている）人」という広い意味で今回は述べてみたいと思います。

まず挙げるのは、上杉鷹山です。偉人に敬意を込めて「〇〇先生」と呼ぶことがありますが、私にとっては上杉鷹山がその人です。他家からの養子でありながら米沢藩主となり、家臣と衝突しながらも、財政再建のために自らが率先垂範を心掛ける姿勢に感銘を受けました。口先ではなく、仲間と一緒になって行動することが真のリーダーなのだと学びました。

「為せば成る　為さねば成らぬ何事も　成らぬは人の為さぬなりけり」という言葉は、私の座右の銘です。

次に私の両親を挙げます。私は外見が父親似で、実家に帰ると近所の人から間違われるのですが、外向的で友人が多く、失敗を恐れずに何でも挑戦する性格は母親譲りです。元々は生まれも育ちも異なる二人から誕生したからこそ、私は今の私になれたのであって、その影響力は計り知れません。

教員という仕事を通して多くの生徒と接していると、同じ人間が誰一人としていないことに感動を覚えます。一人一人が誰かの子どもであって、親から受け取ってきたものを一生懸命に発揮しているからです。「同じ」や「普通」を求められることが多いですが、十人十色だからこそ人は互いに惹かれ合い、尊重し合えるということも忘れてはいけません。

◆

ちなみに冒頭の質問についてですが、「学校の先生」という仕事に初めて興味を持ったのは、中学生の頃。当時好きだった女の子に、「勉強を教えるのうまいね！将来先生にでもなったら？」と言われたことがきっかけです。「ブラック職場」などと揶揄される多忙な業界に導いた罪深い言葉ではありますが、教員でしか味わえない多くの学びと感動を得られているので、今のところ満足しています。

今回執筆を依頼してくれたのは、今年三月まで担任をしていた教え子です。末筆ながら、この貴重な機会を与えてくれた教え子に深く感謝すると共に、自分も誰かにとっての「先生」になれるよう精進していきたいと強く思いました。

第54回 輔仁会 雑誌賞 発表

佳作

跡部大炊助勝資（あとべおおいのすけかつすけ）……弘中遷

佳作

翡翠の花……原口綾斗

佳作

ヤドリギ……千代はるか

●選考委員（五十音順）

女子中・高等科講師…石井健博

高等科教諭…伊藤禎子

文学部教育学科教授…梅野正信

●応募作品一覧

夕人たちの交差点…播磨未智

生命の蒔絵…藍色文学

翡翠の花…原口綾斗

夏の果て…早坂

Fish…青木美晄

跡部大炊助勝資…弘中遷

都会人と魔法使い…佐野帆南

僕は小説が書けない…と龍

ヤドリギ…千代はるか

あの笑顔を、掴むために。…立手立規

選評

杞憂

女子中・高等科講師
石井健博

数年来、輔仁会雑誌賞の選考委員を務めている。輔仁会雑誌賞では、選考委員が全ての応募作品を読んで、賞を決定しているが、毎年、読み切れないほど多数の応募があったら如何せん、と心配になる。今年度の応募作品数は例年並みの十、と聞いたときは、ほっとしたが、いざ読み始めると、大作・力作が多く、楽しいながらも、なかなか骨が折れた。しかし、選考委員の苦労など慮らず、来年度は、更に多くの応募を期待したい。もし、応募作品が倍増すれば、大学生の編集委員の方々に候補をしぼって頂き、その中から選考委員が受賞作を選んではどうか。今年度の選考会では、編集委員の方々の意見も大いに参考になった。輔仁会雑誌賞の選考に、編集委員の力を更に発揮してもらいたい。杞の国の人は、天地が崩墜することを憂えた。来年度は天地崩墜、とまでは行かなくとも、より多くの応募を期待したい。多くの応募作品があってこそ、良い小説賞となる。これを読んでいるあなたも、是非。

選考会では、三名の選考委員が、同じ三作品を受賞候補として挙げた。しかし、どの作品を第一席とするかは、意見が割れ、三作品を佳作とすることに決した。以下、受賞作について愚見を述べる。

佳作三作の中で、私は「ヤドリギ」を一番に推した。女子高生の内面が丁寧に描かれており、読んでいて心の痛みを感じるほどの現実感がある。ラストには小さな希望を見出し、読後感も良い。「そんなことないよ」という言葉についての指摘は、現代日本社会への批判としても読める。単なるエンタメに終わらない深さのある作品である。

「翡翠の花」は、読んでいて、純粋に楽しめた。荒唐無稽ともいえるが、非現実的な不思議な世界観は魅力的である。女主人は、悪の魅力にあふれており、ラストも痛快である。悪徳を楽しめるのも、小説ならでは。

「跡部大炊助勝資」は、戦国時代の武田家滅亡に取材した歴史小説である。いかにも歴史小説風の文体は安定感がある。さほど有名ではない跡部勝資を主人公にしたのも良い。一般的な読者であれば、未知の人物の未知の物語として楽しめる。歴史通であれば、武田家滅亡の一因となった奸臣とされる勝資が、なぜ勝頼と最期を共にしたのか、謎解きとしても楽しめる。

惜しくも受賞を逃した作品から、気になったものを、いくつか。

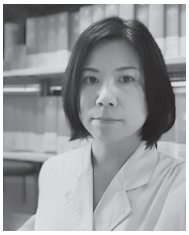
「Fish」は、月移住計画にゆれる二人の若者の物語。親しげに読者に語りかける文体は良い。謎めいたストーリーも楽しめる。

「夏の果て」は少女と幽霊（？）の交流を描く。冒頭の屋上で一人寝そべる描写は上手い。結末は意表を突かれる。

「都会人と魔法使い」は、詩的ともいえる文章が読んでいて心地よい。二人のすれ違いも上手く描けている。

選評

力作ぞろいから頭抜けるために



高等科教諭
伊藤禎子

今年の輔仁会誌投稿作品は全部で十作品であった。多くが中編的な文字数であり、いずれも力作と感じさせるものであったが、その中から、三作品を「佳作」として選出した。

「翡翠の花」は、なんとも不思議な作品である。こまかな状況や、設定などは、作品が進むにつれて見えてくるようになっており、お話の始まりは、ともかく読者を小説内世界へミステリアスに呼び込んでくる。言葉遣いそのものは今風であり、読みやすいが、けっして幼稚なわけではない。美しくも不気味な館のにおいに巻き込まれるのだが、ただし最後の展開だけ物足りなさを感じた。この独特な「におい」を最後まで充満させ、謎の館から戻ってこられないくらいの読後感が欲しいと思った。

「跡部大炊助勝資」は大作である。そこまで歴史的にメジャーではない人物に焦点をあて、一人の心理を歴史的事項にそくして丁寧にたどり、かつお話としても面白く読めるものになっている。これだけの長さで整理整頓しているのは力がある作者であると感じさせる。ゆえに一つ要望してみたいのは、今あるような時系列の流れではない形の構成は可能かどうか、特定の場面にしぼって、ドラマを凝縮させる語りは可能か、という点である。いわゆる「歴史小説」ではなく、ひとつの「心理小説」として切り込んだ場合、どのような工夫が可能であるだろうか。「勝資」の生きざまをこのような形に組み直せる場合、作者の表現力はもっと高まるのではないかと期待する。

「ヤドリギ」もまた、一定の長さがある中で、丁寧にまとめあげた作品となっている。思春期に誰しも通りうる「哲学」と、それとの格闘が、等身大の言葉で紡がれているような気がした（作者は中高生であろうか）。一つ一つの言葉に「嘘」が感じられず、読後感もすっきりとする。ただし、読みやすさは、ライトノベル的な印象にもつながっており、読者対象が若者に向きすぎている。もっと読み応えのある、歯ごたえのある文章を求める読者層にも耐えうる小説とするには、もしかすると今の作者の純粋さ、素直さに加えて、ひねくれた側面も必要となってくるのではないか。今後積み重ねる作者の人生経験が、作者の表現の幅となっていくだろう。

今回「佳作」には至らなかったが、「生命の蒔絵」は個人的に好きな作品だ。とにかく表現力が高い。だが、高さゆえに筆が独り歩きしすぎている感があり、もったいない。地の文と会話文での主人公の言葉遣いの差や、蒔絵の物語内における意義など、随所に設定を詰めていける部分があると思う。とはいえ、この表現力の高さの未来が楽しみである。

選評

選評が織りなす世界

文学部教育学科教授
梅野正信

佳作三編いずれも優劣を撰じがたく、逡巡を重ねること一再でなかった。

「翡翠の花」は「レモングラス」「バニラの花」など、舞台となる空間、邸宅の風景を丁寧に描くことで、女性たちのやや断じた物言いを違和感なく溶け込ませる。「感覚が麻痺したあの街に戻る?」「普通ってなにかしらね」「画家の役は楽しめるけど、長女の役を楽しめなかった」。あっさりと作品世界へ引き込んでしまう巧みな筆致がここちよい。

「跡部大炊助勝資」は、勝頼落命にいたる家臣・勝資の末路をたどるつもりでいたら、いつのまに、死を前にした勝資の自問が入り込んでくる。命を差し出す大儀と、我に返る懐疑との間で揺れ惑う勝資、その眼前で、「殉じるのは妻の役目」と残して自決する北条夫人。「誇りの為に死ぬのか」「意地?」「…使命、ですか」、一人ひとり、勝資に言葉を残し、命を落とす。作者は、その言葉のいずれにも納得はしていないようにみえる。余韻を残す作品であった。

「ヤドリギ」は、痛々しいほどに自らを責め、それでいて弁明さえ寄せつけない。「出来れば目を背けたい迷い」「優しさは、時々暴力的」「褒めたりされると余計惨めになる人間の存在」。射るように投げられる言葉の端々は、迂闊に読む者を傷つけてしまう。それほどに直截である。

受賞に至らなかった作品も、丁寧に書き手の思いが織り込まれ、好感をもって読むことができた。

「夕人たちの交差点」は、入院生活に入り込んできた「お喋り魔人さん」への鬱陶しさが、魔人の命が尽きる予感とともに形を変えてゆく。そのうつろいが軽妙な独白と会話でうまく表現されていた。

「生命の蒔絵」は、老成を思わせる女性の語りに、蒔絵と「老婆」の物語が重ねられてゆく。主潮をなすモノローグと途切れのない文体がよく調和していた。

「夏の果て」は、冒頭、学校の屋上に照りつける真夏の太陽、額の汗が「アスファストに楕円の影を落」す情景を印象的に描く。熱風が紙面にたちあがり、塊となってまとわりつく筆力を感じさせた。

「Ｆｉｓｈ」は、語り手の大学院生、彼から離れていく同居人の心持が、交互に描かれる。離反を止めようとしない無力感と諦念が、ファンタジーを背景に、落ち着いた文体で綴られていた。

「都会人と魔法使い」は、魔法使いとなって離別した友人への思い、再会がもたらす複雑な心境、邂逅の過程が丁寧に描かれていた。

「僕は小説が書けない」は、軽快な語り口に引き込まれ、つい最後まで読み通してしまう。そのリズム、心地よさが印象に残る。

「あの笑顔を、掴むために」は、ひたすらに友人であろうと願い、繋なぎとめようとする話者の哀切、ひたむきな思いが描かれていた。

応募作品それぞれに、形を変えた原石の輝きがみえ、固有の世界、特有の文体を生み出す予兆を感じさせるものばかりであった。感謝したい。

第54回 輔仁会 雑誌賞 発表

佳作

翡翠の花

原口 綾斗

1

ガーデンルームはレモングラスの豊潤な香りで満たされていた。夏の薫風が、イングリッシュガーデンに咲いたバニラの花が放つ豊かな匂いや、薔薇の芳香を、開け放しにされた扉から運んでくる。シルクのカーテンがゆっくりとした物腰で、そよ風と踊る音を聴きながら、館の主人はいつものように、ウィリアム・モリス柄のソファに横たわって、晦渋(かいじゅう)なドイツ哲学書を読み耽っていた。薄い桃色のブロードのワンピースを身に着けて、トルコ石の連なったネックレスを片手でいじっている。長い黒髪は木漏れ日に照らされて、神秘的な模様を浮かび上がらせており、両耳にぶら下がっている円筒形の翡翠のイヤリングは、新緑の庭園と見事に調和していた。

庭園の中では、スモックを着た閨秀(けいしゅう)画家が繊細なタッチで風景画を描いているのが見える。気まぐれな主人は、モデルを頼んでも三回に一回しか乗り気にならず、三十分以上は同じ姿勢でいられないため、主人の機嫌が斜めになった時は、じっと動かないでいてくれる心優しい庭園が、彼女の拠り所になっていた。今も長い髪を束ねて、陽光と夏風に彩られた庭園の、絶妙な表情の変化を表現するために、様々な種類の緑の組み合わせを試している最中だった。

洋館のキッチンでは、女料理人が主人のために手際良く果物の盛り付けを済ませ、最後の仕上げにセルフィーユを載せていた。人数分のデザートを完成させたパティシエールが、洋館の裏口を開けて庭園に足を踏み入れた時、ダマスク・モダンの薔薇の香りが彼女の鼻腔をくすぐった。彼女はTシャツにジーンズというラフな格好で、前髪を揺らしながら、複雑な概念のパズルに夢中な女主人の前に、単純な快楽をそっと置いた。

「本日のスイーツは甘夏のパフェになります。文(あや)様」

女主人はすぐさま本を閉じ、まるで異国の地からやって来た行商人が、王妃に献上するために持参した宝飾品を見るかのように目を輝かせた。

「さっきから甘夏のいい香りがキッチンからしていたから、何を作ってくれるのか楽しみにしていたの。とっても美味しそう」

女主人は彼女のパティシエールに、楊貴妃のような笑顔を向けて、差し出された長いスプーンで、中央にのったバニラアイスクリームと、トパーズのように眩しい甘夏を掬って咥えると、目を閉じて、その柔らかい舌で両者のマリアージュを堪能した。

「とっても美味しい！　感覚的な快楽に余計な言葉はいらないわね」

料理人はわずかに笑みを浮かべて、恭しくお辞儀をした。

「ありがとうございます。料理人冥利に尽きます。しかし、差し出がましいことを承知でお願いしたいのですが、物足りない部分がございましたら、遠慮なくおっしゃってください。さらに精進いたしますので」

「涼子は努力家ね。私にも貴女のような向上心があればいいのだけれど」

「文(あや)様はそのままで完璧です」

「あら嬉しい。このデザートも完璧よ」

文は涼子の右手にそっとキスをした。すると、庭

園の方からスモックを脱ぎながら女画家が歩いてきた。中には黄色のブラウスを着て、黒地に白の水玉模様の入ったスカートを履いている。耳からは大きな紫水晶の耳飾りが、陽の光を反射して輝いている。画家はスモックを畳んで、庭に一番近いテーブルの上に置き、ソファに気怠そうに腰掛けた。
「結花、涼子が今日も美味しいデザートを作ってくれたわ。貴女も頂いたら？」
「ぜひ。頂いてもいい？　涼子」
「どうぞ、お口に合えばいいのだけれど」
「涼子の料理が口に合わないことなんて、私が味覚障害にならない限りありえないわ」
　結花はゆっくりと甘夏の果肉とバニラアイスを味わい、疲れた体に贅沢な甘さが染みわたっていくのを感じた。
「絵は順調？」画家に彼女のパトロンが訊く。
「まあ、概ね。いつ見ても美しい庭ね。美雨ちゃんが世話をしてくれているおかげかしら。毎日、毎時間違う表情を見せるから、描き飽きなくて助かるわ。でも、そろそろ文ちゃんの絵を描きたいところね」
　女主人は体を起こすと、猫のように体を伸ばしながら、欠伸をした。
「だってモデルって退屈なんですもの。貴女も絵を描くときは黙ってしまうし、鏡とお喋りしていた方が、まだましだもの」
「なら美雨ちゃんに話し相手になってもらえばいいじゃない。文ちゃんは話し相手さえいればいくらでもお喋りできるんだから」
　画家は大きなアーモンド型の目で、部屋の隅に控えていた家政婦を見た。
「退屈な人を除いてね。でもそうね、美雨さえよければ」
　女主人も家政婦の方を見て微笑んだ。
「ねえ、どうせなら、涼子も入れて、三人一緒に描いてもらえないかしら。いつも私一人だけで寂しいし」
　美雨は女主人の提案に驚いて、首を横に振った。
「そんな、私なんて。話し相手なら努めますが、モデルなんて、文様のお邪魔になります。滅相もございません」
「いいのよ、こうなったら文ちゃんは止まらないもの。美雨ちゃんがいないと絵が進まないし、可愛い二人を描けるなら私の筆も進むもの」
　結花は肩をすくめて言った。美雨はしぶしぶ承諾して、モデルという大役に少し頬を赤らめた。涼子も、最初は遠慮していたが、二人に説得されて、しぶしぶ了承した。
「まあいいけど、綺麗に描いてね？　結花」
「任せなさい。最高傑作にしてあげるから」
自信満々に結花が言う。涼子が立ちっぱなしの美雨を手招きした。
「美雨ちゃんも食べて。朝からお掃除して疲れたでしょう」
「ありがとうございます。いただきます」家政婦はゆっくりと椅子に腰かけた。
　四人の若き女性たちは、ふっくらとしたソファに腰掛け、ローテーブルを囲んだ。各々が各々の美徳を褒め合い、馥郁とした夏の庭園の香りにうっとりとしていた。早々にパフェを食べ終えた主人が、皆にジョコンダのような微笑を浮かべてこう言った。
「美しい絵画に美味しい料理、美しい音楽、そして美しい貴女たち。これ以上、何が必要かしら。ここには美しいハーモニーだけがあって、くだらない世間の騒音も届かない。雲の峰のようにゆったりとした時間と、自然と人工が調和した穏やかな空間。これこそ、私が長年思い焦がれていた人工楽園だわ。たとえ明日私が死ぬとしても、きっと今日と同じく爽やかな気持ちでしょうね。美しいものだけに囲まれて、私は静かに地獄へ行くの」
　蝉時雨が黄昏に溶けていく。まもなく訪れる夜の静寂を知らせるかのように。

2

　東京から四時間、ローカル線を乗り継いで、大学生の石田美雨はようやく目的地に辿り着いた。待ち合わせに指定された場所は、自動改札機もなく、中年の駅員が一枚ずつ硬い切符に穴を開けて出入を確認するような、田舎の辺鄙な駅だった。魂が抜けたような、寂しい街並みを見て、美雨はここまで来てしまったことを若干後悔し始めていた。誰一人歩いていない、名前だけは明るい商店街。恐らく閉店したであろう、色あせた服屋の看板。誰がデザインしたのか、まったく可愛くない地元のゆるキャラの銅像。すべてが、気持ちを荒涼とさせるのに十分だった。すると、前方から、この街には似つかわしくない、白いアルファードが走ってくるのが見えた。駅前に停車したアルファードからは、これまた街と不釣り合いな、青いワンピースに、白いハイヒールを

履いた長身の女性が降りてきた。女性は美雨を見つけると、ショートボブの髪を揺らしながら近づいてきた。

「石田美雨さん？」

「はい。石田です。あの、依頼主の方ですか？」

「いいえ。私はただの料理人。館の主人はお屋敷で昼寝でもしてると思うわ。私、須崎涼子っていうの。よろしくね」

太陽のような涼子の笑顔に、美雨は一瞬たじろぐも、差し出された手を握った。触ってみると見た目以上に厚く、料理人の手という感じがした。

「じゃあ行きましょうか。長旅で疲れたでしょう。後でスイーツを作るから楽しみにしていてね」

涼子は車のトランクを開け、美雨の荷物を押し込み、運転席に颯爽と乗り込んだ。美雨は助手席に座り、ふかふかの椅子に身を委ねた。美雨はふと、竜宮城に連れていかれる浦島太郎のような心持ちになった。長旅で疲れていたのか、美雨はすぐに眠りについてしまった。

世界中が大混乱に陥っていた夏、美雨は、高校の先輩だった柳井（やない）結花に誘われ、N県にあるお屋敷の、住み込みの家政婦として雇われた。業務内容は一般的なものだったが、大学生のアルバイトとは給料の桁が違った。始めは詐欺じゃないかと疑ったが、資産家の道楽でやっているだけだから大丈夫だと結花に言われ、既に結花もその屋敷で画家として働いているとのことだったので、半信半疑だったが、結局ここまで来てしまった。

結花とは高校一年生の時、美術部の体験入部の時に初めて出会った。彼女の絵も美しかったが、むしろ絵を描く結花の方が美雨の心を揺さぶった。絵を描いているときの真剣な眼差しや、絵を描き終わって髪をほどく繊細な動きを見て、こんなに美しい人がいるんだ、と美雨は思った。美雨は学校で結花を見かけたらその日一日、世界が少し色彩を取り戻し、部活のある日の前日は楽しみと緊張で眠れなかった。美雨と出会ったとき、結花は高校三年生で、美大受験のために予備校に通い始め、徐々に部活にも顔を出さなくなっていた。結花は無事に第一志望の美大に合格し、在学中から注目を集めて、個展を開いたり、少しずつメディアにも顔を出すようになっていった。美雨も美大を目指そうかと思ったが、自分には才能がないと諦めて、結局都内の私大に進んだ。退屈な大学生活を送っていた美雨にとって、結花からの連絡は、大袈裟に言えば救いの蜘蛛の糸だった。

蝉の音で目が覚めた。木漏れ日が涼子の顔をなぞっては消えていく。サングラスをかけた涼子の姿を見て、美雨は洋画に出てくる女スパイのようだと思った。結花からは、涼子はフランスで料理の修業をした後、二十代の若さで都内の一等地にレストランを出した気鋭の料理人だと美雨は聞いていた、そのルックスがマスコミに受け、「美しすぎる料理人」として一躍時の人となったが、マスコミの報道に違和感を覚え、メディアへの露出は近年控えめになっていた。ウイルスの影響で店をしばらく閉じざるを得ず、暇を持て余していた時に、文から専属の料理人として働かないかという依頼が来たのだという。青いワンピースとサングラスを着こなすモデルのような姿からは、コック帽を被ってフライパンを振る様は、美雨には想像がつかなかった。

「あと少しよ。長旅で疲れたでしょう、まだ寝てていいからね」

涼子がハンドルを握ったまま言う。

「ありがとうございます。さっきの街とは大違いですね。綺麗な夏木立」

「私も好きよ、この道。よく結花ともドライブするの。さっきまで山道でカーブが多かったのだけど、ここまでくれば景色を楽しむ余裕が出てくるわね。それにしても今日は蝉が煩いわね。美雨さんを歓迎しているのかしら」

涼子はそう言うと、万緑を見渡しながら何やら考え込んだ。

「蝉って美味しいのかしらね。まだ食べたことないけど、素揚げとか美味しそうじゃない？」

やっぱり料理人だ。以前テレビで、アザラシの腹の中に海鳥を詰めたイヌイットの伝統料理を食べる料理人の映像を見たが、涼子さんもその手の人なんだろうか。そう美雨は心の中で思った。

「見えてきたわ。あれが翡翠館よ、私たちしか知らない秘密の館」

3

翡翠館は和洋一体の建物で、正面はレンガ造りの洋館になっており、赤いレンガに張り付く蔦は、怪しげな雰囲気を感じさせるが、高くそびえたつ尖塔や、レンガの重厚感は、建物の歩んできた歴史と伝統の重さを感じさせた。アールヌーヴォー風のデザインが施された木製の大きな玄関扉は、どことなく

ヨーロッパ中世都市の趣がある。洋館を抜けると、瓦屋根で二階建ての日本建築が姿を見せ、さらにその奥には、翡翠館という名前の由来にもなった、美しい翠色の日本庭園が、悠久の昔からあったかのように佇んでいる。洋館は三階建てで、かつてはダンスホールとして使われていた大広間や、百人は入りそうな大食堂がある。大正初期に建てられたこの奇怪な建物は、好事家だった当時の家主が、家族や親類の反対を押し切って建てたものである。建築家を見つけるのに五年、建築家と設計図案を練ること三年、建築に七年という年月を経て建てられており、当の館の主は完成の二年後に、病にかかって亡くなってしまった。

呼び鈴を鳴らしたが、誰も出てこない。

「はあ、きっとまだ寝ているか、どこかで遊んでいるんでしょう。美雨さんが来るからお出迎えに来てって伝えておいたのに。結花って学生のころからこんな感じだったの？」

フランクに結花の名前を呼ぶ涼子の顔をちらっと見て、美雨は答えた。

「結花先輩は絵のこと以外は割とルーズでしたね。遅刻魔だったらしいです」

「じゃあ今と変わらないわね。まあ、そういう人だからこの屋敷に呼ばれたんでしょうけど。結花は百歩譲っていいけど、主人が来ないんじゃしょうがないわね。大体目星はついてるから、一緒に探しましょう」

そういうと涼子はポケットから鍵を取り出して、身長の倍はある大きな扉をゆっくり開けた。翡翠館に入ると、えんじ色のカーペットと、天井から大きく垂れさがるシャンデリアがまず目に入ってきた。大広間には、玄関扉をいれて、四方に扉が一つずつあり、部屋の四隅には螺旋階段があり、奇妙な存在感を放っていた。二階は吹き抜けになっており、十字架に架けられたキリストのステンドグラスが見えた。

「こっちよ」

涼子は一階右手の扉を開け、長い廊下を白いハイヒールでコツコツと鳴らしながら進んだ。

「あの、館の主ってどんな方なんですか。先輩は面白い人って言っていたんですが」

「それがあんまり分かってないの。私も結花も、雛罌粟文っていう名前以外は教えてもらってないの。いつもはポーカーフェイスなんだけど、時々すごく優しい顔になるときもあるの。あと、すごい美食家ね。少し塩加減を変えただけでも気が付くし、隠し味の材料を全部当てられたこともあるわ。三か月前にね、私のレストランに突然綺麗なクチナシの柄の便箋が届いたの。怪しいと思ったんだけど、便箋からはクチナシの上品な香りがして、開けてみたら綺麗な文字で、夏の二ヶ月間だけ専属のシェフとして雇いたいって書かれてあったの。それで、この手紙の差出人ってどんな人なんだろうって興味が湧いたの。ここの住所が書いてあったから来てみたら、想像通り！　しかも報酬は私のレストランが一年かけてようやく稼げるような額だったんだもの。来ない理由はないと思って」

一息おいて、涼子は続けた。

「文様は、秘密主義なの。なんでこの屋敷にいるのか。普段何をしているのか。どんな目的で私たちを集めたのか。訊いても教えてくれないの。料理の好みは教えてくれるんだけどね。こんな大きな館の持ち主なんだから、旧華族とか社長令嬢とかじゃないかしらね。そうじゃないなら神か妖怪の類じゃないかって、結花と噂しているんだけど」

涼子が笑いながら突き当り左手の扉を開けると、薫風が館の中に吹き込んできた。奥には瓦屋根の日本家屋が見え、洋館との間にはテニスコート分くらいの大きなプールがあった。プールは日の光を反射して白く光り輝き、永井博が描くような、明るさと静謐さを漂わせていた。プールの端に女の人が二人いるのが見えた。一人は白いビキニを着てプールサイド近くの椅子に寝そべって煙草を吸っており、もう一人は裸で、紫色のフロートマットの上に横たわっていた。海外文学ならギリシア彫刻のような、とでも描写するような、しなやかで静的な美しさを小さな身体に宿していた。最初、彼女は死んでいるのではないか、と美雨は思ったほどだった。

「結花、文様！　何をしているんですか。美雨さんがいらっしゃいましたよ！」

涼子は椅子に掛けてあったバスローブを手に取って、裸の女性に近づいた。

「寝かせといてあげなさいよ。昨日夜遅くまでポーカーして疲れてるんだから」

ビキニの女性が気怠そうに煙草の煙を吐き出しながら、涼子に言う。

「結花先輩！」

声をかけられたビキニの女性は、美雨に気が付くとパっと顔を明るくして、持っていた煙草を灰皿に押し付けて、声の主の方へ近づいてきた。

「美雨ちゃん！　来てくれたのね。こんな怪しいバイト受けてくれないんじゃないかと思ってたから、来てくれて本当に嬉しいわ」
　結花は、少し日焼けをしていたが、高校の時と変わらない凛とした顔で、美雨に微笑んだ。水着からは塩素の匂いと、香水だろうか、仄かにジャスミンの香りがした。爽やかな夏の午後に、美雨はデカダンな空気を感じ取った。竜宮城というのはあながち間違っていなかったかもしれない。
「またお会いできて嬉しいです！　本当に」
「相変わらず真面目ねえ。こんな暑い中マスクなんかしちゃって。ほら、そんなもの取って、可愛い顔を見せて」
　結花は美雨の耳に手を伸ばし、紐を優しくつまんで、マスクをとった。美雨は自分の頬が紅潮するのを感じた。
「うん、美雨ちゃんは相変わらず可愛い。いいのよ、ここではそんなこと気にしなくて。美雨ちゃんの顔が見えないと寂しいもの」
　結花先輩はいつもこうだ。自然とこういうことができてしまう。美雨は、久しぶりに会えた喜びを噛みしめると共に、彼女の慣れた手つきに過去の人たちとの思い出を感じ、少し嫉妬した。すると、プールの端で悲鳴と、バシャンという水の音が聞こえた。見ると涼子が裸の女性に腕を掴まれて、全身プールに浸かっていた。プールサイドには、さっきまで涼子が持っていたバスローブが落ちていた。
「もう、何するんですか。このワンピースお気に入りだったのに！」
「ふふふ、涼子がプールに入りたそうにしてたから」
「してないです！」涼子はびしょびしょのまま、文に怒った。
「ねえ、結花もいらっしゃい！　冷たくて気持ちいいわよ。ほら、貴女も！」
　不意に自分のことを指され、美雨が戸惑っていると、結花がぱっと美雨の手を掴んだ。美雨はつい荷物の手を放してしまい、結花に手を引かれるまま、水の中に飛び込んだ。大きな水飛沫が上がり、涼子の小さな悲鳴と、裸の女性と結花の笑い声が屋敷中に響いた。水の中ではしゃぐ三人は、人魚のように美しく、美雨は絵画の世界に迷い込んだような、夢うつつとした気分を味わった。四人の起こす波紋が交わっては消えて、泡が生まれては消え、消えては生まれてを繰り返した。プールサイドに飛沫が飛び、太陽がそれを蒸発させる。水の音と蝉時雨だけが聞こえる世界で、彼女たちは子どもみたいには水と戯れた。

4

「改めて、ようこそ翡翠館へ。私は雛罌粟文、一応ここの主人になるのかしら」
　美雨たちは濡れた服を乾かし、着替えて洋館の客間に移動した。文だけは、バスローブを着たまま、『ウルビーノのヴィーナス』のようにソファに横たわっていた。中央のテーブルには、涼子が盛り付けた目にも鮮やかな果物のプレートが置かれ、文はマスカットを一粒つまんで口の中に放り込んだ。涼子は、ソファの後ろに立って、主人の髪を優しくとかしていた。さっきまでのデカダンな雰囲気は消えて、美雨の目からは、ブラッシングされる猫と飼い主のようで、微笑ましく見えた。プールではしゃぎまわって疲れたのか、少し眠そうだった。美雨と結花は、文と涼子の向かい側のソファに腰かけ、結花は灰色のブラウスと黒のスカートという装いで、小さな画用紙にスケッチを描いていた。
　文はマスカットを食べながら、美雨の方を向いて言う。
「結花から聞いていると思うけど、貴女の仕事は主に私の世話と屋敷の掃除、たまに涼子の料理の手伝いとか、結花の絵の手伝いとかをお願い。まあやれる範囲でいいわ。　あとは、そうね、まあ私はきっとわがままだろうから、どうにか慣れて」
　涼子と結花は苦笑いを浮かべた。文は言い終わると、じっと美雨の顔を見つめた。美雨はどんな顔をしていいかわからず、壁に掛けてある、キュビズム風の絵画に視線を移した。

「結花にこんな後輩がいたなんてね」
文がいたずらっぽい目で結花を見る。結花はスケッチの手を止め、美雨の顔をじっと見つめて微笑む。
「ええ、美雨ちゃんは私の一番可愛い後輩ですから」
そう言うと、結花は美雨の肩に手を回した。自分の肩を優しく触る結花の細い指を美雨は緊張しながら見つめていた。
「巧言令色鮮し仁ってやつね」
文はひそひそと涼子に言う。
「なにか言った？」
「結花はプレイガールですから」と、文の髪をすきながら、涼子が言う。
「やめてよ、涼子まで。可愛い後輩の前で。綺麗なものを愛でることの何が悪いの」
結花は唇をとがらせて反論する。
文と結花の言い合いを見つつ、美雨はおずおずと手を挙げた。
「あの、いくつか質問してもいいですか？」
文はスライスされたメロンを頬張りながら頷いた。
「文様は、なぜ私たちだけをこの館に集めたのですか？　こんなに大きなお屋敷なら、もっと従業員を雇うべきじゃないのですか？」
涼子は髪をすくのを止めて、文の肩をとんとんと軽くたたいた。文はゆっくりと起き上がって、再び美雨の目をじっと見る。
「私の長年の夢は、芸術家であり、芸術作品である人たちと一緒に暮らすことだったの。ここは私の人工楽園なの。屋敷を管理するだけなら、適当に男を雇えばいいわ。お金さえ出せば、大抵の人はきちんとやってくれるもの。でもそれじゃあ、あの忙しなく動き回るしか能がない人たちの暮らしと変わりがないじゃない。私の願いは、ただ美しい人たちと美しい夏を過ごすこと。仕事というのは口実のようなもので、本音を言えば、私は仕事というものを憎んでいるの。結花から貴女の話を聞いて、興味が湧いたの。今日、貴女を一目見て、ああこの子ならぴったりだって思ったの」
美雨はいぶかしげな目線を文に向ける
「そんな理由でいいんですか？　一応履歴書も持ってきたんですけど」
「そんなもの要らないわ。人を見た目で判断しないのは愚か者のすることよ」
「でも、私は芸術品でも、ましてや芸術家でもないですよ」
「貴女は芸術家が絵を描く生き物だと思ってる？　それとも、歌を歌う生き物だと思ってる？」
美雨は黙っている。
「だとしたら、貴女は芸術のきわめて小さな面しか見えていないわ。人生こそ、第一の芸術なのよ。すべての芸術作品は、人生を彩るための予行演習に過ぎないの。曰く、人生は短く、芸術は長し。人生を犠牲にする現代人の多いことと言ったら、口にするのも嫌なほど悲劇的じゃない。幸運にも、貴女はすでに芸術的よ。芸術的な愛を知っているのだから。ねえ、この奇妙な屋敷で二ヶ月だけのバカンスを楽しむ？　それとも、すべての感覚が麻痺したあの街に戻る？」
文はソファに深く座ったまま、詩を朗読するかのように美雨に囁いた。穏やかで音楽的な話し方の奥底には、ギリシアの神々の持つような力強さと残酷さが隠れているように美雨は感じた。
「いえ。戻りたくないです。どうか、ここにいさせてください」
文の言葉を完全に理解できてはいなかったが、こちらの魂を見抜くような文の目を見てＮＯとは言えなかった。それは、結花が絵を描いているときの目と同じだった。また、美雨はこうした決断をずっと待っていたような気がしていた。自分ひとりで味わう決定的な瞬間を。ここでなら、退屈な日常から逃れられるかもしれない。そんな願いも湧いてきた。
「二ヶ月間だけですが、よろしくお願いします」
美雨は頭を下げて、握手をしようと手を伸ばすと、文はその指の隙間に自分の指を無理矢理差し込んで、指を絡ませた。
「ええ、よろしくね美雨。きっとすばらしい夏になると思うわ。まあ、出ていきたくなったらいつでも出ていけるから。熊にだけ気を付けてね。じゃあ涼子、結花、あれを持ってきて頂戴」
「かしこまりました」
「はいはい」
そう言うと二人は足早に部屋から出ていき、数分後、赤と白のワインボトルと四つのワイングラスを持って戻ってきた。美雨と涼子は白ワイン、文と結花は赤ワインを選んだ。文がグラスを高く掲げる。
「では、この退屈で騒々しい社会で、貴女たちと出会えたことは私にとって僥倖と言うほかありません。二ヶ月だけのバカンスに、そして、この蒸し暑い夏の日に乾杯」
「乾杯！」

5

その日から翡翠館での奇妙な生活が始まった。翡翠館は、テレビもパソコンもなく、電波も通じないという、まさに陸の孤島だった。その代わり鏡は至る所にあった。そして、時間に縛られたくないという女主人の趣向で、時計もなかった。「時間なら太陽を見ればいいじゃない」と女主人は言い放った。当初、美雨は困惑したが、あらゆる世俗的な情報から遮断され、画一的な物差しから解き放たれた生活は、思いのほか快適だった。時間にも人にも縛られない生活、清閑ですべてが詩的な生活、これこそ現代人が失ってしまった最も大きなものじゃないかと、美雨は毎日考えている。アラームではなく蝉時雨とともに始まる朝、無機質な高層ビルもタワーマンションもない、広く澄んだ空、帰宅ラッシュに急かされることなく、じっと落日を見つめる黄昏時、俗悪な看板も、下劣な酔っ払いもいない、闇だけがずっと広がる夜の静寂。これらを全身で味わうことは、美雨の魂と感覚を癒して、前近代的社会には全員が持っていた人間性を取り戻すために必要な過程だった。美しいものだけが、人の心を癒すことができると美雨は翡翠館での生活を通して確信した。翡翠館の住民たちは、涼子の作る目も舌も楽しませるフレンチ料理を食べ、結花の描くロココ調の乙女たちの絵を見て、文の美しい指が奏でるジムノペディを聴いた。ここでの生活はすべてが詩的で、音楽的で、神話的だった。ここでの生活を終えた後も、あれは全部夢だったのではないかと、美雨は何度も回想した。

美雨の翡翠館での生活は、基本的に文と一緒だった。朝から晩まで、夜伽にも付き添った。文の側にいて、会話の相手をしたり、演奏の感想を言うのが、美雨の主な仕事だった。館の掃除も美雨の仕事だったが、朝日と共に目が覚めれば、太陽が南に上りきるまでには掃除が終わっていた。文が朝早く起きることは稀で、掃除を終えた美雨が起こすのが日課だった。文の声は音楽的な美しさを持っており、文は寝る前に、即興のおとぎ話を聞かせてくれた。子ども向けではない、残酷で、救いのない、けれど美しいおとぎ話を。

涼子と結花の二人は比較的自由に過ごしていた。涼子は基本的に図書館で本を読むか、新しいレシピの開発のために洋館のキッチンにいることが多く、結花は日本庭園かイングリッシュガーデンのどちらかで絵を描くことが多かった。翡翠館にはカレンダーがなく、住民たちはスマートフォンを見る習慣を捨ててしまっていたため（文はそもそもスマホを持っていなかった）、今日が何日かほとんどだれも把握しておらず、唯一、町へ食材の買い出しに行く涼子だけがまだまともな曜日感覚を保っていた。

昼と夜は、涼子の作った料理を、洋館の食堂に集まって全員で囲むことが翡翠館の暗黙のルールだった（朝は、文と結花が起きてこないので、涼子が美雨のために軽食を用意するのが常だった）。時計がないので集合はまばらだったが、夕食は日が沈むと同時に始まるので、主人の言葉通り、太陽を見て住民たちは行動するようになっていた。住民たちは洋館のベッドルームで眠ることが多いが、気分屋の文や結花は、日本家屋の方に布団を敷いて眠ることもある。

美雨から見て、文はとにかくお喋りな人だった。四六時中、何かしらの話題について喋っている。会話というよりも、文が一方的に喋るだけで、美雨はタイミングよく「へえ」とか「なるほど」と言って相槌を打つだけなので、美雨は私と話していて退屈じゃないかと主に言ったことがある。

「あら、美雨の相槌があるからこうして話せるのよ。前に言ったでしょ。私は鏡とでもお喋りできるって。そうだ、鏡といえば、最近考えていたことがあるんだけど」

文の言う「最近考えている」は、大抵二、三分前に思いついたことだと美雨は分かっていた。

「『白雪姫』ってあるじゃない。あの女王が、鏡に『世界で一番綺麗な人は誰』って訊くじゃない？ 子どもの時は何も考えてなかったけど、今思えば、女王は自分の老いを自覚してて、でもそれを認めたくなくて鏡に話しかけてるんじゃないかしら。鏡自身が話すのは、童話的な脚色で、あのお話って美と老いを巡る女王の抵抗の物語として読めない？ だって明らかに女王の方が主体的に動いているじゃない？ 研究者がすでに指摘してることかもしれないけど、美雨はどう思う？」

と、いつもこんな調子で、文は思いついたことを矢継ぎ早に話し続けるので、美雨はしばしば返答に困ってしまう。美雨が話題を振ることもたまにあった。

「文様にとって、美しさって何ですか」

文は少し考えて、

「軽薄で、移ろいやすくて、人の心を掴むもの」と

言った。
　美雨は分かったような、分かってないような顔で、とりあえず頷いてみた。そして二つ目の質問をした。
「文様っておいくつなんですか？」
「九十二歳」眉一つ動かさずに文が答える。
「真面目に答えてくださいよ」口をとがらせて美雨が言う。
「だって年齢なんて知ってどうするの。私が二十五歳でも三十五歳でも、どっちでもいいじゃない。私がここにいて、あんみつを食べていることの方がよっぽど重要じゃないの。ねえそっちのぜんざいはどう？」
　実際、文は大学生と言われても、アラサーと言われても納得ができるほど年齢不詳だった。若者の悪徳と大人の美徳の両方が、文の表情や細かい仕草に宿っていた。
「美味しいですよ。流石涼子様ですね」
　あっという間に一か月が経ち、美雨は、結花には変わらず先輩呼びだったが、涼子には様付けで呼ぶようになっていた。この館ではそう呼んだ方が適切なように感じたからだ。
　翡翠館には、洋館と和館の間に造られたイングリッシュガーデンと、和館のさらに奥の池泉庭園の、二つの庭がある。また、日本庭園の中には数寄屋造りの茶室、無月庵があり、この日は四人で無月庵まで出向いて茶会を開いた。主人の提案で、全員浴衣を着て、池泉庭園園を見て回った。池には、大きな鯉たちが悠々と泳いでいた。主人が鯉を食べるために餌をあげすぎたことが原因らしい。涼子が鯉特有の臭みを抜いたが、文によれば、あまり美味しくはなかったそうだ。文は線が細いが、大食漢だった。特に甘いものとステーキに目がない。三食スイーツでもいいと依然涼子に話していた。涼子は主人の健康を考えて、栄養バランスのとれた食事を出すが、会話や演奏をしている時の大人びた表情とは違う、子どもっぽい瞳で間食のスイーツをねだられると、ついつい甘やかして作ってしまう。そして、甘味を味わって気分のいい文の姿を、結花がスケッチするというのが、翡翠館でよく見られる光景だった。
「そう言ってもらえて嬉しいわ。和菓子は作ったことがなかったのだけれど。でもあんこってまだまだ可能性のある食材ね。今度デザートで出してみるわね」
　縁側に腰かけている四人の姿は、ローランサンの絵画のような美しさがあった。結花は団扇でゆっくりと涼子を扇ぎ、文は美雨の膝の上で、ぼんやりと畳の網目を見ていた。
「文様は、今まで一人でこのお屋敷に住まわれていたのですか？」
「いいえ、私もここに来たのは一か月前だもの」と文は淡々と答える。
「え？　そうだったんですか。私てっきり文様は旧家の末裔かなにかだと考えていたんですが」
　涼子は驚いた様子で文の方を見る。
「そこは秘密だけど、だから私もこの屋敷に何があるのかとか、どんな人が住んでいたのか詳しくは知らないわ。まあ不動産屋が教えてくれた情報から考えると、相当の浪費家だったみたいね。本を読みすぎて頭のおかしくなった資産家が建てた異形の建築。なんだか住んでみたくなるじゃない？」
　文は冷えた緑茶を啜りながら、いたずらっぽい笑顔を浮かべる。簾から見える入道雲は、画家が気まぐれに描いたように白かった。美雨は、文の浴衣の金魚がゆっくりと泳いだような気がした。

6

ある日のこと、翡翠館に夕立が降ってきた。文様と私は和館の端居でいつものように読書をしていた。文様はふいに、「綺麗ね」と呟いた。
「雨の音ってこんなに綺麗だったのね。もっと早く気付けばよかった」
その時の文様の声がずっと耳に残っている。私は文様の綺麗ね、を聞くために生きてきたのだと思った。

7

「ねえ、涼子。世界っていつか終わると思う？」
「どうでしょうかね。いつかは終わるんじゃないでしょうか」
「そうねえ、じゃあどんな風に終わると思う？　花火みたいに一瞬パって銀河に咲いて終わるのかしら」
「私はもっと静かに終わってほしいですね。蜘蛛が巣にかかった蝶をゆっくりと食べていくように、ゆっくりちょっとずつ世界が崩れていく方が素敵じゃありません？」
「貴女、料理人じゃなかったら拷問官とか向いてそうね」
涼子は何も言わないで微笑んだ。
「文様は派手なのがお好きでしょう？」
「ふふ、この世のすべてをぶっ壊せたらさぞ楽しいでしょうね」
文はワインを一口飲んで、いつものように、嘲るような笑みを浮かべた。
「私が死ねば、世界も死ぬわ。それだけは決まりきってるもの」
夏の匂いが部屋に染み込んできて、風鈴と蝉の音だけが、この世界が動いていることを知らせてくれる、そんな夏の日だった。久しぶりに何もしたくなかった。それはほかの住人も同じようで、全員で洋館の食堂でお喋りをしていた。部屋には文が選んだクラシックのレコードがかかっている。
「あと二週間で、ここでの生活も終わりなんですね」美雨は寂しそうに呟く。
「あら、まだ二週間も残ってるのよ」
そう言うと、文はマドレーヌを紅茶に浸して、ゆっくりと咀嚼した。
「感傷的な別れなんて、美しくないもの。最近のドラマには含羞がないからいけないわ」
「そうね。評論家も、芸術家も、大衆も、恥じらいってものを無くしてしまったのよ。中身が空っぽだから、見せるのを躊躇ったりしないのよ」結花が同意する。
「すべてを白日の下にさらせば解決するなんて、子どもみたいな解決策しか思いつかないのかしら。現代人は、恥も、秘密も、嘘も愛せなくなってしまったの。この国が衰退しているのは、まさにそこにあるんだと私は思うわ」
文がアンニュイな顔で言う。涼子は、フレーバーティーを飲みながら、二人の会話を母親のように優しい目で見つめていた。
「ごめんなさいね、政治の話なんて退屈ね。政治は幸運な貧困層と不幸な富裕層だけが話し合うべきものであって、健全な魂の持ち主の話題じゃないもの。それはそうと、最近考えていることがあるのだけど」文が言う。
「はい」美雨はいつものように相槌を打つ。
「私たちは、こうして何不自由なく生活できているのだけど、いわゆる『普通の』人たちって家族で暮らしているじゃない。私の両親は私が生まれる前に死んじゃったから、家族ってものがよく分からないのよね。暖かい家族も、壊れた家族も、物語の中では知っているけど、現実の家族ってどんなものなのか、貴女たちに訊いてみたかったの」
涼子がミルフィーユの皮をくるくる巻きながら言う。
「うちは普通の家庭でしたよ。父も料理人で、浅草の洋食屋で働いてて、母がそのお店のアルバイトをしてて、二人は仲良くなってそのまま結婚して、私と妹をここまで育ててくれました。いまだに仲はいいですよ」
「その普通っていうのが分からないのよね。普通ってなにかしらね」
文が首をかしげていると、結花が難しい顔をして会話に入ってきた。
「私の家は大家族で大変だったな。貧乏なくせに子どもたくさん作って、長女の私が美大に行くことも両親は大反対で。芸大なんて金がかかってしょうがないからね。両親の気持ちも分かるけど、美大に行くならもう娘とは思わないって言ったくせに、私の絵が売れて、メディアに出るようになったらすっか

り手のひら返し。一円も援助しなかったくせに、兄妹たちの学費をよこせって。ふざけんじゃないって思ったわ。こっちが必死に奨学金を返して、ようやく人間的な暮らしができると思ったのに。芸術も芸術的な愛も分からない馬鹿のくせに。家族なんていうのは死ぬまでまとわりつく他人よ」
「じゃあ家族にお金はあげたの」涼子が訊く。
「うん、その代わり手切れ金だと言って渡したわ。あの時の親の顔は一生忘れない」
結花が満面の笑みで笑う。まるで両親を殺して、すっきりしたとでもいうような顔で。
「ごめんね、美雨ちゃん。今まで黙ってて。貴女につまらない話を聞かせたくなかったの」
学校での結花は、いつも上品で、皮肉屋っぽいところもあるが、絵に真剣に取り組んでいて、成績も優秀で、家庭の問題などおくびにも出さなかったので、美雨は結花がここまで家族と確執があることは知らなかった。
「私、先輩は裕福なご家庭なのだと思っていました」
「そうね、学校だとそういうイメージで演技をしていたから」
「演技？」
「そう、演技。ありのままの自分なんて、私は信じてないの。人は演技をする生き物で、演技をしてないと生きられないの。演技は、人生を彩るために不可欠なものであり、私たちは与えられた役から完全に自由になることも、完全に成り切ることもできないの。だけど、その狭い世界の中だからこそ、人間の自由が発揮できるんじゃないかしら。そして、いつか決定的な瞬間を味わうの。私は、今も柳井結花を演じているの。みんなそうじゃない？　私は画家の役は楽しめるけど、長女の役を楽しめなかったの。ただ、それだけ」

8

その日の夜、いつも通り美雨はベッドで文の朗読を聞いていた。その日は中原中也の詩の朗読だった。音楽的な文の声を聴いていると、まるで子守唄を聞いているような気分になり、美雨はいつも文より先に眠りに落ちてしまう。
「文様、少しお話ししたいことが」
「なに」文がゆっくりと美雨の顔を見る。なに、の二文字だけでも、色っぽさがあった。
「昨日、その、見てしまったんです。結花先輩と涼子様が、プールで、その、キスしているところを」
文は本を閉じて、少しだけ口角を上げた。
「ふうん、続けて」
女主人はこの、まだ奇跡的に純朴な少女が、芸術的な失恋を吐露する貴重な現場に立ち会えたことにまず喜びを感じ、そしてこれからこの娘にどんな言葉をかけて影響を与えようか、逡巡していた。
「文様は、お気付きかもしれないのですが、結花先輩は、私の、その、初めて好きになった人なんです。私が卒業式の日に先輩に告白して、先輩はキスしてくれました。でも、それだけで。先輩には私よりお似合いの人がたくさんいるし、その、よくある淡い初恋とかいうものにして、終わらせようと思っていたんですけど、今回先輩が連絡をくれて、少し期待もしていたんですけど、結局なにも無くて。結花先輩は涼子様の方がお似合いですし、だから、その、すいません。ちょっと混乱していて」
美雨の眼は少しだけ潤んでいた。文は美雨の顔を見て、少しだけ胸の疼きを感じ、ゆっくりと美雨の傍へ寄って、美雨の肩に手を回した。
「あんなに饒舌に語っておいて、あの子も変なところで奥手なのね。きっと貴女を汚したくないとか、そんな理由なんでしょうけど、馬鹿なことよね。芸術的な愛に汚れたところなんてどこにもないのに。軽薄さは中途半端が一番いけないのに。私が言えることはね、初恋なんて大抵くだらないし、初恋を嬉々として語る人間は大抵面白みに欠けた人間だけど、初恋の香りを貴女がまだ覚えていて、目の前に果実が置かれているのなら、なにを躊躇うところがあるの？　ここには芸術を理解しない人はいないのよ。貴女はもっと自分の快楽を知るべきよ。快楽以外に心を癒すものはなにもないのだから」
「それは、先輩に告白しろという意味ですか」
「そう解釈してくれてもいいわ。でも、貴女が本当に望むことって、なに？」
文が美雨にぐいと顔を近づける。唇はほのかに紅く、睫毛は長く美しい曲線を描いている。吐息が顔に当たる。文の栗色の瞳に美雨が映る。美雨が目を逸らそうとして下を向くと、ピンクのドレスの隙間から文の綺麗な乳房が見えて、なお恥ずかしくなって、部屋にかけてあるサン＝タンドレの静物画に視線を移した。虚栄と死の象徴である頭蓋骨が画面の中央に鎮座している。「軽薄で、移ろいやすくて、人の心を掴むもの」という文の言葉を思い出した。

カーテンが開けたままになっており、月光が窓から漏れている。美雨が口を開く。
「今夜だけでも、ぜんぶ忘れさせてください」
　美雨が言い終わるやいなや、文は美雨の薄桃色の唇に口付けをした。美雨にとって、唇を合わせている時間は、刹那にも永遠にも感じられた。文の匂いを嗅いでいると、全身が溶けるような多幸感に包まれた。唇を離した時、まるで禅僧が坐禅を終えた後にも似た、形容し難いまどろみが両者に宿っていた。蕩けた顔の美雨を見て、文はベッドから立ち上がり、さっとカーテンを閉め、蠱惑的な笑みを浮かべてこう言った。
「月が覗かないようにね」

9

　次の日、暇を持て余した女主人がこう呟いた。
「蝉に火をつけて飛ばしてみたら綺麗かしら」
　美雨は早速蝉を捕まえてきて、虫籠にいれた状態で文の前に差し出した。蝉は喧しく騒いだ。夜になり、文は少しだけ虫籠の蓋を開いて、マッチで火をつけようとしたが、羽が少し焦げた臭いとわずかな煙があがるだけで、うまく火がつかなかった。終いに文は飽きて、木の枝を蝉に突き刺して殺してしまった。結局、涼子と結花も誘って花火をした。美雨はかわいそうに思い、死骸を日本庭園の隅に埋めておいた。きっと小さな虫や微生物たちがあの蝉を食べるだろう。あの蝉みたいに、文様にぐしゃっと頭をつぶされて、あの庭に捨てられたら、虫たちが私を食べてくれるのだろうか。結花先輩は私の死体が腐っていくのを絵に描いてくれるだろうか。涼子様は私の死体の一部を上手に焼いて、夕食に出してくれるだろうか。美雨はそんなことを考えて、少し自分は頭が狂ってきたんじゃないだろうかと怖くなった。この話を館の主人にしたら、大笑いされた。
「私もそういう妄想をよくするわ。夢野久作なんか読んだ後は特にね。ねえ、美雨。ここが実は精神病院だったらどう？　実は貴女は母親を殺した殺人犯で、精神鑑定の結果、脳に重度の欠陥が見つかって、新手の精神治療のために、このアサイラムに連れてこられたの。私も涼子も結花も、重度の妄想癖がある精神病患者で、この屋敷の地下には、他の精神病患者がうじゃうじゃいるの。治療不可と認定された患者は、バラバラにされて闇の世界に臓器として旅立つか、一部の変態たちの慰み者にされるの。ねえ、そうだとしたら美雨はどうする？　ここから逃げる？」
　美雨は即座に答えた。
「文様と一緒なら、どこでも平気です」

10

　しかし翡翠館の日常は、突如終わりを告げた。
「警察です。進藤智子さんは御在宅でしょうか？」
　あと数日で八月が終わろうというある日、残暑の厳しい中、マスクを着けた警察官二人組が翡翠館の門を叩いた。その日、結花と涼子は食材の買い出しのために町へ出かけており、翡翠館には文と美雨だけだったので、美雨が応対をした。
「いえ、存じ上げませんが」
「この方なんですがね」と言って警官は写真を見せてきた。
　それは紛れもない、文の顔だった。美雨は平静を装って、
「やっぱり見たことはないですね。私もあまり外に出ないもので」
警官がジロっと美雨の目を見た。美雨は少し驚き、
　一瞬目をそらして、怪しまれないようにもう一度警官の白いマスクを見つめた。
「そうですか。近くの住民の方から、この方を見たという通報をいただきましてね」
「はあ、それでこの方は、その、なにをしたんですか」
「いやあ、まあそれは。あんまり大きな声じゃ言えないんですが、殺人です。資産家の夫婦に毒を盛って」
「おい、喋りすぎだぞ」
もう一人の警官が話を遮った。「殺人」の二文字を聞いた瞬間、美雨の全身の動きが止まったのを、警

官は見逃さなかった。
「本当にご存じありませんか？」
「ええ、進藤さんなんて方は存じ上げません。あの、ご主人様のお世話がありますので、これで」
何とか声を絞り出して、美雨は退散しようとする。警官たちはなにやら話し合った後、マスク越しでもわかる、わざとらしい笑みを浮かべてこう言った。
「どうもご協力ありがとうございます。またお話を伺うこともあるかと思いますので、その時はよろしくお願いいたしますね」
美雨はゆっくりと玄関扉を閉めようとした。扉が完全に閉まるまで、警察官はわざとらしい笑みを崩さなかった。その不気味な笑みは、どことなく母が三者面談で担任に見せる嘘くさい笑みと重なった。美雨は、文が寝ている寝室に向かって全速力で駆け、寝ぼけ眼の主人に事情を説明した。文はただ、「そう、早かったのね」とだけ言って、一切の質問に答えようとはしなかった。
夕方、帰ってきた二人に美雨は事情を説明した。涼子は、不安を抱きつつも、いつものルーティンで、夕食を作った。文の好きなサーロインステーキを皆で食べながら、三人は文を囲んだ。
「文ちゃん、いえ、進藤智子さん。どういうことなの。説明してほしいことが山ほどあるのだけど」
いつもと変わらない表情で、文が言う。
「文ちゃんでいいわ」
文はゆっくりとステーキを口に運び、グラスの赤ワインを一気に飲み干した。
「幽霊の正体見たり枯れ尾花、ってところね」
結花がキッと文を睨む。
「こんなときに秘密主義を気取ってる場合じゃないでしょ。貴女捕まっちゃうかもしれないのよ」
涼子が文のグラスにワインを注ぐ。グラスを傾けながら文が言う。
「くだらない真実なんて聞いてどうするの。貴女が思い描いているシナリオが真実でいいじゃない。重要なことは私が何をしたかではなく、何をするかよ」
「私たちには聞かせられないってこと？　私たちはそんなに信用が置けない連中ってこと？　私たち、結構深い仲だったと思っていたのだけど」
結花が詰め寄る。文は真面目な表情になって、三人の顔をゆっくり見る。
「違うわ。大事な貴女たちだからこそ、私の醜悪な罪を晒すようなことはしたくないの。結花が家のことを美雨に話したくなかったのと同じ。もし私のしたことを貴女たちが知ったら、きっと私を軽蔑するでしょう」
そんなことないです、と美雨は言おうとしたが、文は言葉を続けた。
「私が貴女たちに向けた愛はね、単なる肉体的な快楽を超えた芸術的な愛だったの。それはヴァージニア・ウルフが、クリスティーナ女王が、平塚らいてうが、そしてサッフォーが知っていたような愛なの。しかし、それと私の罪は関係ないわ。貴女たちは人生を芸術にすることができる稀少な人たちなのだから、いずれここから出なくてはいけない運命だったのよ。凡庸で、汚れた、理不尽な世界へ」
文は言葉を続ける。
「そもそもが、砂の上にできた城だった、夏の夜の夢だったという、それだけの話。みんな、ここまで一緒にいてくれてありがとう。私の願いは一つだけ、最後まで妖しげで、不思議な、美しい雛罌粟文でいさせてほしいの」
そう言うと文は懐からなにか黒い塊を取り出した。
「早まってはいけません！」美雨は大声で怒鳴った。拳銃だった。
「地下の倉庫で見つけたの。他にもライフルとか銃弾がたくさんあったわ。この屋敷は何のために建てられたのでしょうね。美雨、いいのよ。ここが終点なの。エゴイストの最後にはちょうどいい小道具じゃない」
美雨は、今にも泣きだしそうだった。涼子も結花も、涙ぐんでいる中、文だけがいつも通り超然としていた。
「感傷的な別れは、美しくないと言ったじゃない。最後を美しく飾ることこそ、私のためだと思ってはくれないかしら」
文はため息をついた。
「しょうがないじゃない。現実はいつだって散文的で、どうにかして筋を合わせようとしてくるんだから。ここでの生活は、すべてが美しかった。ねえみんな、覚えているかしら。
涼子、私が貴女のために摘んだライラックの花の色をまだ覚えている？
結花、二人で焚いた龍涎香の神秘的な香りをまだ覚えている？
美雨、あの綺麗な夕立の音をまだ覚えている？
すべて、私にとって美しい思い出なの。
だから、どうか泣かないで。

貴女たちが芸術的に生きていれば、またきっと会えるわ。
だからそれまで、さようなら」
　文の後ろには、結花が描いた、三人の若く麗しい女性たちの絵が、永遠の若さを保ったまま、静かに飾ってあった。
　美雨たちは和室の方へ戻ったが、文のことが気がかりで、誰も眠れなかった。蝉の音は鎮まらず、枯山水を眺めても、山水画を見ても、胸騒ぎが鎮まることはなかった。全員が、現実で起こりつつある死の生々しさに怯えていた。布団に入り、ようやく夜も更けてきた頃、パトカーのサイレンが遠くから聞こえてきた。美雨たちは文が自殺を踏みとどまったのだと思い安堵したが、数分後、洋館から銃声が二回、熱帯夜に鳴り響いた。美雨たちは顔を見合わせ、一斉に起き上がり、渡り廊下を抜けて洋館に駆け付けた。大広間まで到着すると、あの大きな玄関扉が開いているのが見えた。外に出てみると、警察官が二人、腹から血を流して倒れていた。そして、テールランプをつけたまま、全速力で山道を下っていくパトカーの姿が見えた。足元を見てみると、警官の血溜りの上に、いつも文が身に着けていた翡翠のイヤリングが片方だけ落とされていた。それは、ヨカナーンの首に淫靡な眼差しを向けるサロメのように、妖しい光りを放っていた。

第54回 輔仁会 雑誌賞 発表

佳作

ヤドリギ

千代 はるか

帰りの支度をしながら私は迷っていた。子供が母親にどちらのお菓子を買ってもらおうか迷うのと同じように、私も二つの選択肢に挟まれていた。けれど子供の迷いみたいな微笑ましいものではなくて、出来れば目を背けたい迷いだった。迷いながら鞄に教科書とかノートとかを詰め込んでいた。

筆箱をその中に押し込んだ時、視界の隅に制服のスカートの裾が現れた。顔を上げると、屈んでいる私を見下ろす結衣ちゃんがいた。

「帰る？」

そう聞かれた瞬間、決めた。二つの選択肢のうちどちらを取るかは、目の前の彼女が決めたようなものだった。

「うん、帰ろ！」

そう答えて鞄を右手に、机のフックに掛けていた手提げ袋を左手に持って立ち上がった。左右の荷物の重さの違いにぐらつく私は、天秤みたいだった。右の皿に取った選択肢、左の皿に捨てた選択肢が載っている。右の方が重い。

教室の外に出て、ロッカーに左手の荷物を押し込んだ。手提げ袋の口から水色のメッシュ生地が覗いた。反射のように三つの顔が浮かんだ。私が捨てた選択肢を、何の迷いもなく取り続けるあの子達の顔。

結衣ちゃんとは今年初めて同じクラスになった。彼女はいつも一人でいた。昼も一人でお弁当を食べ、放課後も一人で帰っていた。けれど、周りから存在を忘れられている訳ではなさそうだった。近くを通る人がちらりとその姿を見るほど、彼女は綺麗な子だった。クラスの中心にいそうな存在だった。だからこそ、一人でいることが不思議だった。

一か月前、初めて結衣ちゃんに話しかけた。意外にも、彼女はあっさりと私を受け入れた。話しかけたその日から一緒に帰った。お互い部活には入っていなかったから、ほぼ毎日のように一緒に帰った。

それまでは奈美ちゃんと一緒に帰っていたけれど、結衣ちゃんに話しかけてから、私は彼女と距離を置いた。美術の授業で判明したことだけれど、奈美ちゃんには誰もが認める絵の才能があった。けれど、その才能をあからさまに見せびらかす彼女が、クラス中から白い目で見られていることは明らかだった。そんな彼女の隣より、私は結衣ちゃんの隣にいることを選んだ。

結衣ちゃんは、奈美ちゃんのように自分から喋らない。相槌も奈美ちゃん以上にそっけない。それでも私は、彼女と帰り続ける。

ダンスの練習をしなければいけない。

そう分かっていても、体はベッドから動かずにいた。結衣ちゃんと話らしい話もしないまま別れて家に着き、自室のベッドに寝転がってからもう十五分くらい経つ。目を閉じると、学校での光景が嫌でも浮かんだ。ロッカーに押し込んだ手提げ袋。その口から覗く水色のメッシュ生地。私と、隣のクラスの優香ちゃん、紗奈ちゃん、朱理ちゃんで組んだ、ダンスユニットのユニフォーム。

私達がダンスを披露する文化祭まで、一か月を切っていた。

ヤドリギ

二か月前にユニットを組んでから、四人の予定が合う日の放課後には練習をすることになった。ダンスの振付を考えるのは、優香ちゃんと紗奈ちゃんが担当した。バレエ教室に通う優香ちゃんと、元ダンス部の紗奈ちゃんが考え出した振付を見た時の私は「すごいかっこいいー！」と手を叩きながら、表情は硬くなっていた。

ダンスは苦手だった。体育の授業で、球技やマラソンには何とかついていけても、ダンスだけはからっきしだった。何度曲を聴いてもリズムが取れず、動きは周りから一つ遅れる。体育の授業でのダンスのテストで、クラスメートの一人に指されて笑われてから、苦手は恐怖に変わった。

今日の放課後も練習の予定があった。私が練習をサボったのはこれで三回目になる。二回目までは誰にも何も言われなかったけれど、さすがに見過ごされる訳にはいかないだろう。

私は勢いを付けて起き上がった。スマホを起動して、チャットで優香ちゃんが送ってくれた動画を開く。四角い画面の中の優香ちゃんは、アップテンポの曲に合わせ、無駄のない動きで踊っている。目を凝らしてその動きを追い、真似しようとしても、手足は思い通りにならない。優香ちゃんがどうしてあんな振付をこなせるのか、分からない。

それでも必死に手足を動かした。お母さんが夜ご飯に呼んで来るまで練習した。夜ご飯の後も、お風呂の後も練習した。それでも、自分の動きのぎこちなさは変わらなかった。

だから嫌なのだ。だからサボりたくなるのだ。自分のどうにもならない部分に向き合わざるを得ない練習に、どうして足が向かうだろう。

教室に入ると、もう結衣ちゃんは席に着いていた。近付いて声をかけようと思った瞬間、こちらが先に声をかけられた。

「梨花ちゃん、おはよう」

結衣ちゃんではない人に。

振り返らなくても、誰かは分かっていた。背後には、優香ちゃんと紗奈ちゃんが立っていた。「おはよう」は優香ちゃんの声だった。

「おはよう」

背中の後ろめたさが顔にまで出ないように、口角を上げて答える。

「梨花ちゃん、昨日の放課後練習あったんだけど、覚えてた？」

優香ちゃんが、遠慮がちな口調で単刀直入に尋ねた。隣の紗奈ちゃんは何も言わず、私をじっと見つめている。やっぱり、三回目のサボりは見過ごされなかった。

「あー、ごめん！　昨日塾あったんだよね。だから行けなくて」

嘘が、口から滑り出た。

「あ、そうだったんだ」

「ほんとごめんね！　次絶対行く！　次いつだっけ？」

「いや、まだ具体的には決まってなくて」

「塾って何時からだったの？」

優香ちゃんの言葉を遮るように、紗奈ちゃんが初めて口を開いた。優香ちゃんの表情が硬くなった。

「五時、から」咄嗟に、中学時代に通っていた塾の時間を答えていた。

「ちょっと参加するだけでも無理だった？　十分くらいだけでも」

紗奈ちゃんは私から目を逸らさない。真っ黒な瞳が、二つ並んだ銃口に見えた。

「授業の前に、先生と面談あって、遅れられなくて」

銃口を前にしても、こんな嘘がすらすらと出てくることに自分で呆れた。

「そっか。面談あったなら仕方ないね。ごめん」

紗奈ちゃんはそこで追及を止めた。心臓が痛いほど暴れていた。涼しい教室内で、私は腋に汗をかいていた。

「昨日さ、新しい振付教える予定だったから、出来ればみんなで集まりたかったんだよね。朱理も来てたし」

空気を変えるように、優香ちゃんが明るい声を出した。その明るさで余計に、自分がなじられていることが浮き彫りにされたようで、ますます汗が噴き出た。

「ごめん、本当にごめん。塾別の日に移せば良かった」

「いやいやそんな！　そこまでしなくても。塾の方が大切だもん。うちらもごめんね、そのこと配慮してなくて」

優香ちゃんが顔の前で両手を振り、早口でそう言う。もう私は彼女の顔を見ることが出来なかった。

「じゃあ、次は梨花ちゃんが来れる日に練習しよ！　今週塾入ってるのっていつ？」

笑顔で尋ねる優香ちゃんには、人を疑うという機

能が備わっていないように見えた。嘘を吐こう、とまた自然に思った。
「金曜、土曜が無理。それ以外だったら行ける」
「了解です！　あ、じゃあ今日の放課後練習出来ないかな？」
「あ、そうだね、練習しよう！」無理矢理声のトーンを上げた。
「紗奈、行ける？」
「私は大丈夫だけど、朱理ちゃん怪しくない？　委員会あるって言ってなかったっけ」
「あ、そうじゃん。でも、いつもそこまで長引いてないし、途中参加ってことで。私伝えとく」
「よろしくー」
「ありがとう」
　紗奈ちゃんの「よろしくー」を追うように、私もそう言った。返事はなかった。
「じゃ、今日の放課後ってことで！　梨花ちゃん場所分かるよね？　校庭の奥の方」
「うん、大丈夫」
「おけ、そこ集合ってことでよろしく！　ごめんね、時間取らせちゃって。じゃね！」
　優香ちゃんは小さく手を振って、教室を出て行った。その後を、何も言わずに紗奈ちゃんが付いて行く。彼女が教室を出る一瞬、こちらを見たような気がした。まだ立ち尽くしている私の全身を、じろりと見まわすように。
　ふっ、と体が軽くなった。長時間背負っていた重い鞄を降ろした時のような浮遊感を覚えた。まだ鞄は背中にあるのに。
　覚束ない足取りで結衣ちゃんの席に向かった。私が近付くと、彼女は顔を上げた。
「結衣ちゃん、おはよう」
「おはよう」
　結衣ちゃんが答える。この子はいつも、私の目を真っ直ぐに見て、おはよう、とか、じゃあね、とかを言ってくれる。それなのに、会話ではどこかそっけない。
　そのまま横を通り過ぎて自分の席に向かおうとした時、背中に声をかけられた。
「昨日、塾あったんだね」
　肩が跳ね上がりそうになった。結衣ちゃんは、おはようの時と変わらない目で私を見ていた。
「……え、聞こえてた？」
　努めて何気ない口調を装い、答える。「聞こえてた？」の「た」が、少し震えた。
「聞こえるよ。声まあまあ大きかったし」
「マジか。えー」その先が見つからない。黙り込んだ私に、結衣ちゃんは続ける。
「塾、五時からって言ってたけど、大丈夫だったの？　私とゆっくり帰って」
「あー全然大丈夫！　塾近いから」
「ふうん」
「でも今日は一緒に帰れないや。ごめん」
「別に謝らなくていいじゃん」
結衣ちゃんの言葉は攻撃的ではない。けれど、しんと冷たい。他の子が当たり前のように持っている温かさが、この子にはない。
　じゃあね、とだけ言って、私は窓際の自分の席に着いた。すぐ隣の窓から見える空まで、昨日ロッカーに押し込んだユニフォームみたいな色をしていた。

ヤドリギ

「一旦、休憩しよっか」

優香ちゃんがそう言った途端、体からどっと力が抜けた。座り込んではあはあと息を吐く私の横で、紗奈ちゃんは新しいステップを練習している。その姿が、疲労で動けない自分を嘲笑っているように見えるくらいには、私は卑屈だ。練習を始めてから三十分近く経っていた。朱理ちゃんはまだ来ない。

「梨花ちゃん大丈夫？　顔赤いよ」

優香ちゃんが駆け寄って来る。こうして座っている間も額から汗が滲む私と違って、優香ちゃんは汗一つかいていないように見えた。

「ちょっと、疲れちゃったかも」

「ほんと？　やばそうだったら無理しないでね、まだ熱中症とか油断出来ないし」

「うん、大丈夫、ありがとう」

優香ちゃんはにこっと笑って頷き、紗奈ちゃんのところへ向かった。二人がペットボトルを片手に話しているのを見て、自分が水筒を教室に置き忘れたことを思い出した。二人は疲れなど少しも感じさせないような軽やかさで、また振付を練習している。

座り込んだ姿勢のまま、私は自分の体が地面に沈んでいくような感覚を覚えた。体の疲労とはまた別の感覚だった。優香ちゃんと紗奈ちゃんの会話が、遠くに聞こえた。

家で何度も練習した筈だった。動画の中の優香ちゃんに必死で動きを合わせたつもりだった。けれど、そう言っても信じてもらえないような動きをあの二人に見せて、私は今座り込んでいる。今までもそうだった。どんなに頑張ったつもりでも、あの二人には追い付けなかった。委員会や部活のせいで私より練習に来ていない朱理ちゃんさえも、私よりも素早く滑らかに手足を動かした。

「ここの動き、ちょっと簡単すぎない？　手も付けてみる？」

優香ちゃんがそう言って、複雑なステップに手の動きを追加する。私が昨日一番苦戦したステップだった。紗奈ちゃんはそれを見ながら「いいじゃん」と頷いている。けれど優香ちゃんは突然その動きを止め、難しい顔をして紗奈ちゃんに囁いた。

「でもさ、梨花ちゃんに出来るかな？」

優香ちゃんは、私に聞こえないくらいの声量で言ったつもりだろう。紗奈ちゃんも、私には聞こえていないと思っただろう。胸焼けのような感覚を覚えた。生ぬるかった風が急に冷たくなった。

紗奈ちゃんが優香ちゃんに何か返す。それに優香ちゃんが頷くと、二人は私の方へと歩み寄って来た。私は重い体を起こして無理矢理立ち上がった。優香ちゃんが口を開く前に口を開いた。

「ごめん、水筒忘れちゃった。取りに行ってもいい？」

目を合わせずに早口で言った。私が何か言うと思っていなかったのか、優香ちゃんは一瞬反応が遅れた。

「えっ、ああ、いいよ全然！」

「ごめん、すぐ取って来る」

そのまま走って教室に戻ろうとしたのに、足が動かなかった。「取って来る」と言って動かない私を、目の前の二人は不思議そうに見ている。思わず、ここで言うつもりはなかった言葉が、ぽろりと零れた。

「なんかごめんね。私、こんなに下手で。二人がどんどん新しい振付考えてくれてるのに、全然付いていけてないし。マジで足引っ張ってるよね。本当にごめん」

最後の方はもう消え入りそうになっていた。このまま、私が立っているところだけ穴が空いて、どこまでも落ちてしまいたいと思った。けれど希望も持っていた。私の言葉で、二人が少し妥協してくれるかもしれない。もうちょっと振付を簡単にしようか、なんて言ってくれるかもしれない。

「そんなことないよ！」

優香ちゃんの声に、弾かれたように顔を上げた。彼女は急に早口になり、まくし立てるように続けた。

「梨花ちゃん、全然下手じゃないよ！　振付だってちゃんと覚えてるし、ちゃんと踊れてるよ！　梨花ちゃんが難しいところは、うちらだって難しいから。大丈夫だよ梨花ちゃん、大丈夫！」

優香ちゃんの言葉は、全て前向きだった。私を攻撃するような言葉は一つも入っていなかった。だから、聞いていて辛かった。

どこをどう見れば、私のダンスを下手じゃないなんて言えるのだろう。本心から言った言葉でないことは明らかだった。その証拠に、紗奈ちゃんはさっきから何も言わずにいる。優香ちゃんの優しさは、時々暴力的だ。無理に持ち上げたり褒めたりされると余計惨めになる人間の存在を、きっと彼女は知らない。

「あ、朱理ちゃん来た」

紗奈ちゃんが急にそう呟いた。彼女の視線の先を見ると、朱理ちゃんがこちらに走って来ていた。屈託のないその笑顔は、この澱んだ空気を変えるには

十分だった。
「水筒取って来るね」
「あ、うん」
朱理ちゃんと入れ替わるようにその場を離れた。彼女の「委員会長引いちゃってー、ごめーん」という声がどんどん遠ざかって、やがて聞こえなくなった。
校舎の中はひんやりとしていた。頬に触れると、熱かった。ぼんやりとした視界の奥に、すらりとした人影が映った。
「梨花ちゃん？」
とその人影が言った。結衣ちゃんだった。そんな筈はないのに、さっきまでの練習の様子を見られていたような気がして、決まりが悪くなった。
「今から帰るの？」
「うん。梨花ちゃん練習？　頑張ってね」
「ありがとう、頑張る」
結衣ちゃんは横を通り過ぎて行った。柔軟剤のような匂いがして、汗臭い自分が恥ずかしくなり教室へと走った。
水筒は机の上にあった。取ってそのまま戻ろうとして、足を止めた。何となく窓に目をやった。そこからは校庭全体が見渡せる。優香ちゃん達も見えた。さっきまで私に一言も話しかけなかった紗奈ちゃんが、腰を反らせて笑っていた。

今日も私は練習をサボって、結衣ちゃんと一緒に帰っている。彼女との帰り道も、居心地が良い訳ではなかった。練習よりはマシというだけで。
結衣ちゃんは滅多に自分から話さない。かといって、私が話していてもあまり興味を示そうとしない。たまに相槌を打ちながら、黙って聞いているだけだ。
この子は自分にしか興味がないのではないか、と疑ったこともあった。その美貌を、誰かから賞賛されるのを待っているのではないか、と。だから言ってみたことがある。
「結衣ちゃんって、本当に綺麗だよね」
帰って来た答えは、
「そうなのかな」
だった。それ以来、彼女と通常のコミュニケーションを図ることは諦めている。
「やっほー、お二人さーん」
そう言いながら、私と結衣ちゃんの間に割り込んで来たのは奈美ちゃんだった。元々良くなかった居心地が悪化した。結衣ちゃんと帰るようになってから、奈美ちゃんとは一度も話していない。そのことで何か言われるのかもしれない、と身構えた。
けれど、奈美ちゃんは私の予想とは全く違うことを口にした。
「聞いて下さいよー。谷崎先生にね、『あおぞら』の表紙描いてくれないか、ってまた頼まれちゃったんですよー」
奈美ちゃんが大きな溜息を吐く。『あおぞら』は、生徒の作文や絵画作品を掲載する校内雑誌だ。
「いや、私が描いたらまたみんなの理解が追い付かないものが完成しますよ？　って言っても、描いてくれってめっちゃ言われて。どうしよー。見た人をまた混乱に陥れてしまったらどうしよー」
ああ、また始まった。私が溜息を吐きたくなる。
自虐に見せかけた自慢は奈美ちゃんの癖だ。この癖のせいでクラスで孤立したようなものなのに、彼女は懲りていない。さらに続ける。
「しかも最近画力落ちててさー、先生のご期待に応えられるか不安なんだよねー。この前の美術で、私が描いたの見た？　下手じゃない？」
私はぎゅっと口を結んだ。結衣ちゃんも何も言わない。突然訪れた沈黙に、奈美ちゃんは戸惑ったようだった。「え、何この時間」と半笑いで呟いた声は震えていた。私は耐えられず口を開いて、
「そんなことないよ」
言いたくなかった言葉を押し出した。途端に奈美ちゃんは笑顔になった。
「いや下手だよー！　それで最近モチベ下がってて。でも描くかー、どうせ暇だし」
それだけ言うと奈美ちゃんは、じゃね、と手を振って走り出し、私達から離れて行った。私はしばらく言葉が出ず、呆然とその背中を見送っていた。
「下手でもいいのにね」
「え？」
私は隣を見た。結衣ちゃんの目は、まだ奈美ちゃんの方を見ていた。
「いや、奈美ちゃん」
結衣ちゃんはそれきり黙ってしまった。そのうちにいつも別れる公園に差し掛かり、別れた。

ヤドリギ

やっぱりチャットには連絡が来ていた。ダンスユニットのグループに三件。内容は、見なくても分かった。

「梨花ちゃん、今日も練習無理だった？」

「あんまりこういうこと言いたくないんだけど、もうちょっと来てほしいな。あと、どうしても行けない時は、事前に言ってほしい」

「急にごめんね」

三つのメッセージは、どれも優香ちゃんが発したものだった。分けなくていいじゃん、と思わず呟いた。チャットのアイコンに付いた「3」に不安を覚えたことが悔しくなった。

しばらくその画面を無言で眺めていた。紗奈ちゃんと朱理ちゃんからのメッセージは何も無い。この画面の向こうで静かに怒る二人の姿が見えた。力の入らない指で文字を入力した。

「本当にごめん。次からはもっと行くようにするし、行けない時は連絡します」

軽い送信音に似合わない内容のメッセージを送る。そのままチャットを閉じようとして、やめた。優香ちゃんとのチャットを開いた。

震える指で、入力した。

「優香ちゃん、今日は練習行けなくてごめん。相談があるから聞いてほしい。申し訳ないんだけど、今の振付は私には難しすぎます。家で沢山練習しても、ついていけない。振付を簡単にしてもらうことって出来ませんか？　練習来てないのに何言ってんだよって感じかもしれないけど、お願いします」

やっぱりやめよう、と思わないうちに、送信ボタンを押した。

優香ちゃんとは、去年一緒のクラスだった。彼女は有名だった。定期考査ではどの教科でも三位以内に入っていた。

去年、始業式を終えて教室に戻った時に初めて話しかけられた。

「新田さんだよね？　入学前に書いた作文で、表彰されてた。私、ずっと話しかけたかったんだよね」

優香ちゃんは私を、彼女のグループに誘った。優香ちゃん、紗奈ちゃん、朱理ちゃんの三人だけだったグループに突如入った私は、作文の天才として優香ちゃんに紹介された。天才なんかではなかった。あの作文だって佳作だったし、それ以降は一度も入賞していない。それでも、ダンス部で活躍する紗奈ちゃんや、華やかな雰囲気の朱理ちゃんと同じグループにいることは、私を安心させた。このグループが私の個性になるかもしれない、という安心だった。

私には個性がない。

そのことに気付いたのは、小学六年生の時だった。道徳の授業で、自分の個性を見つけよう、というテーマの下、グループワークが行われた。一人ずつ、メンバーそれぞれの個性を相手自身に伝える、という形式だった。私達のグループは四人だった。一人目は前の二人にそれぞれ「頭がいい」、「絵が上手い」と言った後、私の顔を見て数秒悩んだ末、

「優しい」

と言った。くすっ、と誰かが笑った気がした。

二人目も同じようなものだった。「顔がいい」、「ダンス上手い」と言った後、私には、

「誰に対しても親切」

と言った。また小さく笑いが聞こえた。頬が熱くなったのを覚えている。

自分には個性がないのだ、とこの時自覚した。そして、個性にも優劣があることを知った。優しさや親切心が個性と言われても、頭の良さや絵の才能に比べたらそれが弱いことは明らかだった。個性と呼ぶ気にもなれない。塾のスローガンや学校の教育目標にまで「個性」という言葉が並ぶ中で、私は一人淘汰されそうな感覚を覚えた。

「そんなことないよ、優しさだって立派な個性だよ」

自分に個性がないことをお母さんに打ち明けた時、そう言われた。柔らかい言葉で、私の悩みを否定した。温かい言葉の筈だった。けれど、受け入れられなかった。自分がそんな弱い個性しか持っていないことを、認めたくはなかった。

優香ちゃんのグループに入った時、ほんの少し希望が見えた。このグループが、私の個性の代わりになるかもしれない。優秀な優香ちゃんや、運動神経抜群の紗奈ちゃん、華やかな朱理ちゃんのグループにいることが、私を表すものになるかもしれない。自分自身に個性がなくても、淘汰されずにいられるかもしれない。

あのグループを失うことは考えられなかった。だから、優香ちゃんにダンスユニットを組もうと言われた時も、断る選択肢はなかった。やっと得られた個性を、手放すわけにはいかなかった。

けれど私は今、そこから離れようとしている。誰もが惹かれる結衣ちゃんの隣という強い個性を得た私は、優香ちゃん達のグループという個性を捨てよ

うか、迷っている。今の個性があるのなら、もういいのではないか。あのグループから抜けてもいいのではないか、と。

私は、ヤドリギみたいだ。中学の教科書で写真を見て、初めて存在を知った植物だった。地面に根を張ってしっかりと立つ木に寄生して、その栄養を自分のものにする、ヤドリギ。私と何も変わらない。自分に個性がないから人のそれを利用して生き延びようと、打算で動いている姿の醜さとか。

返信は夜遅くに来た。

受験の関係で、ダンス活動は今年が最後になること、最後なら優勝を狙いたいと思っていること、そのためにクオリティを上げたいから、振付はこのままで行きたいこと。それらが長々と書き連ねてあった。所々に「ごめんね」が散りばめてあった。

私は何度もその文面を読み返した。読み始めた時は激しく波打っていた心臓も、次第に静かになっていった。

その日以来、練習には行かなくなった。

帰り道を、今日も結衣ちゃんと歩いている。

私はまだ、優香ちゃんのメッセージに返信していない。チャットも開いていない。けれど、あの日以降新しい連絡は来ていなかった。

優香ちゃん達が教室に来ることもなかった。私は、ユニットから抜けたことにされたのかもしれない、と思った。練習に来ない日は連絡する、と自分が約束したことも忘れていた。

大丈夫。結衣ちゃんがいる。結衣ちゃんの隣という個性があれば、私が淘汰されることはない。

この子だけは、失う訳にはいかない。

水曜日の三時間目は文系と理系に分かれる。理系選択の結衣ちゃんは教室にいなかった。席に着いた途端、後ろから声をかけられた。

「梨花ちゃんやっほー」

奈美ちゃんだった。

「やっほー」

「最近、いつも結衣ちゃんと帰ってるよね」

体が強張る。奈美ちゃんはまだ事実しか言っていないのに、責められているような気がした。

「あー、そうだね」

「楽しい？　結衣ちゃんと帰ってて」

体がますます強張る。気を抜くと、本音が漏れそうだった。

「楽しいよ？」

「いつもどんな会話してるの？」

「うーん」

すぐに答えを出せなかった。私だけが話題を出して話し、結衣ちゃんがたまに相槌を打つだけのやり取りは「会話」と呼べるのかどうか怪しい。

「まあ、色々」

「へー、そうなんだ」

「うん」

「ふーん」

言いたいことがあるなら言えよ。

そう毒づきたくなってしまうほど、奈美ちゃんとの会話は間延びしていた、普段早口で喋る彼女からは考えられないほど、のんびりとした口調だった。それで自分が言いたいことを、私の口から言わせるように仕向けているような気がした。

「可愛いよね、結衣ちゃん」

急に結衣ちゃんを褒めたりする。彼女が何を言おうとしているのか、予測出来ない。

「ね、可愛いよね」

「学年でも有名だよ、あの子」

「まああんなに可愛いもんね」

「いや、そうじゃなくて」

窓から入り込んでいた風が凪いだ。周りの何人かがこちらをちらちらと見た。

「可愛いからってのもあるかもだけど、それとはまた別で。知らない？　中学時代の結衣ちゃんの話」

また一人、こちらをちらりと見た。さっきまでの教室の騒がしさが、三分の二くらいのボリュームになったように感じた。

「え、何」と絞り出すのがやっとだった。

「私、結衣ちゃんと同じ中学だったんだけど、あの人酷かったんだよ」

やめて。

そう言いたいのに声にならない。やめて、その先を言わないで。

「私の友達にね、すっごい自己肯定感低い子がいたの。なんかすぐ、私ブスだからー、みたいなこと言っててさあ。あ、その子がブスってわけじゃないよ！　普通に可愛い子だったし」

いつの間にか、奈美ちゃんのいつもの早口が戻っていた。

「もう、しつこいくらいに私ブス私ブスって言ってて、ちょっと面倒臭かったけど、そんなことないよって私とか周りの子も言ってたのね。そしたら結衣ちゃん」

そこで奈美ちゃんは、俯いていた私の顔を覗き込んだ。

「何て言ったと思う？」

口の中が乾いていた。

「ブスでもいいじゃん、て言ったんだよ。その子に向かって。そしたらさあ、その子泣いちゃって」

チャイムが鳴った。全身にまとわりつくような複数の視線から、急に解放された。それなのに、鎖で拘束されているかのように体が動かない。

「酷くない？」

教室に先生が入って来た。奈美ちゃんが席に戻っていく。ガタガタと椅子を引く音の中に取り残された私は、立ち上がるのが少し遅れた。

「結衣ちゃんってそんな子だったんだね」

帰り道でぽつりと呟いた私の言葉に、少し前を行く奈美ちゃんが振り返った。口の端に少しの笑みが見て取れた。

「そうだよー。今は大人しいけど、実際はヤバいんだよ。だからずっと友達いなかったんだよ」

「ブスでもいいじゃんって言ったこと、どれくらいの人が知ってるの？」

「多分だけど学年のほとんどが知ってるんじゃない？　この高校に進学したの、結衣ちゃんと同じ中学からの人が一番多いらしいし」

足元がぐらつく感じがした。盤上で白い面を見せるオセロの駒が、全て黒に裏返るイメージが頭の中に浮かんだ。結衣ちゃんを取り巻く視線の意味をやっと知った。

美しさに惹かれていた訳ではない。孤高の存在として見上げていた訳ではない。軽蔑していたのだ。心無い言葉を浴びせた人間として。

それなら私は、周りの目にどう映っていたのだろう。結衣ちゃんの本性を知らずに接していた幸せ者。外見の美しさだけに惹かれてくっつく馬鹿。もしくは、孤独な結衣ちゃんに手を差し伸べた優しい人だろうか。どうかそれであってほしい。

彼女の隣にいれば淘汰されないと思い込み、会話が弾まなくても、そっけない態度を取られても、必死に付いて行った自分がこの上なく惨めに思えた。ヤドリギが安全だと思って宿った木は、もう枯れていたのだ。

押し殺していた不満が、むくむくと膨らむのを感じた。口が勝手に開いた。

「結衣ちゃんって正直さあ」

「お、何？」

私の言葉に反応した奈美ちゃんがこちらを振り返る。その目に浮かんだ好奇の色を見た瞬間、何かが外れた。

「コミュニケーションに向いてないよね。話してて分かったんだけど。自分から話あんまりしないだけならまだしもさ、こっちが話振ってんのに、いっつも興味なさそうな相槌打ってるんだよ？　なんかさあ、人としてどうなの？　みたいな」

奈美ちゃんが声を上げて笑った。耳障りな甲高い声が、むしろ心地良かった。口は止まらない。

「しかもさー、私が結衣ちゃんのこと、可愛いね、とか褒めても、それにも全然反応しないんだよ？　普通さ、そんなことないよーって謙遜するか、もしくはありがとうって言ったりするじゃん。あの子、そういうことも一切言わないの。いつも上の空みたいな返事しかしなくて、それで」

「梨花ちゃんっ」

それまでにやにやしながら聞いていただけの奈美ちゃんが、急に顔色を変えて私の腕を引っ張った。そのまま俯いて黙っている。どうしたの、と尋ねても喋ろうとしない。視界の右側に人影が見えたような気がして、私はそちらを向いた。

車道を隔てた向こう側に、結衣ちゃんがいた。一人だった。私と帰る時より少し速いスピードで歩いている。下ろした髪に隠れて、顔は一瞬しか見えなかった。すぐに目を逸らした。

私と奈美ちゃんの歩くスピードは、さっきよりも遅くなった。結衣ちゃんは私達を追い越し、遠ざかっていく。算数の問題にこういうのあったな、と私は場違いなことを考えていた。時速何キロで歩くお兄さんに、後から出発した時速何キロの弟が追いつ

くのは何分後でしょうか、みたいなやつ。あれは何という単元だったっけ。どうでもいい。どうでもいいことだ。けれど、そんなことでも考えていないと、立っていられない。

「いや、マジでビビったー！」

突然の奈美ちゃんの大声に、脳内のどうでもいいことは吹き飛んで行った。十メートルくらい先の結衣ちゃんにも聞こえそうな声量に、心臓が跳ね上がる。

「怖すぎない？　マジで気付かなかったんだけど！　いやー、気まずっ」

「ちょっと、聞こえるよ」

「大丈夫だよー、てか梨花ちゃんの言ってたことだって絶対聞こえてたでしょ。ならいいよ、今更」

結衣ちゃんが側まで来た時は、あんなに顔を強張らせていたくせに。呆れを通り越して悲しくなった。私の居場所はもう、こんな子の隣しかないのかもしれない。

結衣ちゃんの姿はどんどん小さくなっていく。

結衣ちゃんは今、一人だ。

奈美ちゃんと帰ったあの日以降、私は結衣ちゃんに話しかけていない。教室に入る時に目が合わないよう、後ろの扉から入り、お弁当の時間には逃げるように奈美ちゃんのところへ走っていく。放課後も、急いで荷物を鞄に詰め込み、奈美ちゃんの机へと駆け寄る。

結衣ちゃんは、私が離れたことに戸惑っているようには見えなかった。奈美ちゃんとお弁当を食べている時、ちらりと結衣ちゃんの方を伺ってみても、目が合うことはなかった。黒板の方を向いて一人黙々とお弁当を食べる彼女の背中は、私を拒否している、という感じもしなかった。拒否ですらない、最早、興味をなくしたという感じがした。いや、元々興味なんてなかったのかもしれない。

結衣ちゃんは、どこにもはまらないパズルのピースみたいだ。きっと、別のパズルから外れて、ここに紛れ込んでしまったのだ。だから彼女はどこにも当てはまらない。この教室だけではない。この学年の、いや、もしかしたらこの学校の、どこにも当てはまらない。一つだけ余ってしまった、パズルのピース。

私の宿れる木は、もう見つかりそうにない。

その日の一時間目のＨＲでは、みんなそわそわとしていた。つられて私まで落ち着かなくなった。輪郭のはっきりとしない不安を、みんなで共有していた。

挨拶の後、先生に促されて結衣ちゃんが教壇に立った。ざわざわとしていた空気がピン、と張り詰めた。結衣ちゃんがおもむろに口を開いた。なぜか私は、この後に彼女が言う言葉を知っているような気がした。

「お父さんの仕事の都合で、転校することになりました。なので、今日がみんなと会うのが最後です。半年とちょっとの間、ありがとうございました」

どうして私は、彼女がこう言うことを知っていたのだろう。

誰かが、えっと声を上げた。マジか、という呟きが聞こえた。えー寂しくなるー、と誰かが言った後、教室の隅で失笑が漏れた。結衣ちゃんは前を見たまま、どの言葉にも反応しなかった。

席に着いた結衣ちゃんの背中を、私はずっと見ていた。穴の空くほど見ていた。それでも結衣ちゃんは振り返らなかった。教壇に立つ先生から「先程からどこか一点を見つめている新田さん、聞いていますか」と名指しで注意された。周りの何人かが、こちらを見て少し笑った。それでも結衣ちゃんは振り返らなかった。

ホームルームが終わった直後、結衣ちゃんの周りには見たことないくらいの人が集まっていた。どこに転校するの、もうこっちには戻ってこないの、今までありがとう。みんな、口々に結衣ちゃんに話しかけた。

私はそれを、自分の席で見ていた。あの人混みをかき分けてでも結衣ちゃんに話しかけなければいけないと分かっていたのに、立ち上がれなかった。

結衣ちゃんはその日、昼に早退した。

ヤドリギ

奈美ちゃんは、推しのライブがあると言って先に帰った。残された私が廊下を歩いていると、前から人が歩いて来た。水色のユニフォームを着て、ペットボトルを持っていた。

優香ちゃんだった。

私は立ち止まった。すると、優香ちゃんも立ち止まった。一メートルくらい先にいる優香ちゃんの表情からは、喜怒哀楽のどれも見つけられなかった。

「梨花ちゃん、久しぶり」

優香ちゃんが、口だけを動かしてそう言った。何と返せばいいのか分からず黙っていると、彼女はまた口を開いた。

「私、梨花ちゃんに謝りたくて、待ってた」

「え？」

喉の奥から間抜けな声が出た。

「何で、優香ちゃんが謝るの」

「だって、私最低だったから。梨花ちゃんのこと、無理矢理ダンスに誘っちゃったし、梨花ちゃんが振付難しいって言ってるのに、そのままでやろうとしたし。私、梨花ちゃんの意見全然聞けてなかった。無理させちゃってた」

どくり、と心臓が鳴った。ＨＲの、結衣ちゃんの時と同じだ。目の前の彼女が何を言おうとしているのか、もう分かった気がした。

「紗奈と朱理にもね、言われたの。梨花ちゃん、本当は辛いんじゃないかって。私達が梨花ちゃんのペースに合わせないで、どんどん先進めようとしてるから。梨花ちゃんには迷惑なんじゃないかって」

「違う、そんなことない」

私は必死になっていた。もう優香ちゃんは、言いたいことをほとんど言ったようなものだった。切られる。穴だらけでありながら何とか残っていた私と優香ちゃんの繋がりを、彼女は今、ゆっくりと切ろうとしている。今にもちぎれそうなそれに、鋏を入れようとしている。グループなんていつ抜けてもいい、と思っていたのに、その瞬間を前にして私は焦っていた。

「迷惑かけてたのは私じゃん。私、ほんとに下手くそで、みんなの足引っ張ってたじゃん」

横を通り過ぎた、顔も知らない誰かがこちらを見た。私の声は、廊下に響くほど大きくなっていた。慌てて声量を抑える。

「練習に全然行かなかったのは本当にごめん。私の存在がみんなに迷惑だと思って、行かない方がいいんじゃないかと思って、それで」

違う。そんな綺麗な理由で行かなかったのではない。言うべき言葉はそれではない。

「いいよ、そのことはもう」

ちょきん。

鋏の音がした。たったの一メートルしか距離がないのに、優香ちゃんは随分遠くにいるように見えた。頭は考える機能を失って、言葉だけがぼろぼろと零れ落ちた。

「マジで迷惑だったよね、ごめんね、下手だったよね、ウザかったよね、いない方が良かったよね」

「そんなことない、そんなことないよ」

「そんなことないわけないじゃん！」

廊下に響き渡るような大声で言ったつもりだった。けれど実際は、喉の奥から掠れた声が出ただけだった。きっと優香ちゃんには届いていない。

しばらく、お互い何も喋らなかった。私は顔も上げられなかった。沈黙の中、優香ちゃんの静かな声が降って来た。

「私、浮かれてた」

もういい。もう何も言わないで。

「梨花ちゃんがダンスユニットに入ってくれた時、嬉しかった。尊敬してた子と一緒に何か出来るんだって。でも、梨花ちゃんの気持ちを全然考えてなかったよね。梨花ちゃん、塾もあって忙しいのに、練習に時間取れ、みたいなことも言っちゃって。自分勝手だった」

何も言わないで。

「ダンスは今のところ、三人でやろうって話になってる。勝手に決めちゃってごめん。でも、振付とか衣装のこととかで何かアイデアがあったら、全然言ってほしい。梨花ちゃんの意見、待ってるから」

私は顔を上げた。優香ちゃんは、結局私を切らなかった。ぼろぼろの繋がりを最後まで残していた。

「アイデアなんて無理だよ、センスないし」

「そんなことないよ。だって」

ごめんなさい。言葉にならなかった。

「うちらのユニフォームのデザイン考えてくれたの、梨花ちゃんじゃん」

「ごめん、ちょっともう急がなきゃ」

私は無理矢理足を動かして、優香ちゃんの横を走り抜けた。立っていられそうになかった。どんなに速く走っても、優香ちゃんの言葉は離れない。

ユニットに誘われた時、断れば良かった。違う、もっと前だ。優香ちゃんのグループに固執しなけれ

ば良かった。そもそも入らなければ良かった。人を利用して個性を得ようとしたのが間違いだった。そのことに執着したせいで、一つのグループを滅茶苦茶にした。

そんなことないよ。

もうこれ以上、この言葉を聞きたくない。

どうして認めてくれないのだろう。ダンスが下手なことも、迷惑をかけたことも、個性がないことも、全部私の事実なのに。変えられないことなのに。

そんなことないよ。

みんな、この言葉を盾のようにして、私から目を背けようとする。私の欠点を頑なに認めようとしない。

優しさのつもりだろうか。この上なく残酷な言葉なのに。

「梨花ちゃんじゃん」

私達が別れる公園のベンチに、結衣ちゃんは座っていた。その隣に、同い年くらいの女の子も座っていた。私が来るまで二人で喋っていたらしい。

中学の時の友達、と結衣ちゃんはその子を紹介した。私のことは、同じクラスの子、と紹介した。胸がちくりと痛んだ。

「釣り合わねーなって思ったでしょ、うちら見て」

突然その子がそう言った。私の心を見透かしたようなその言葉に、すぐには返せなかった。

「こんな美しい方に、なんでこんな芋女が、て感じでしょ？　自分でも思います」

「いや、そんなことないですよ！」

自分が嫌う言葉を自然に口にしたことに気付かなかった。

「いや、お世辞はいいって。もうこの顔にも慣れたから、ほんと」

「もうやめなよ。困ってる」

結衣ちゃんがぼそりと呟いた。今まで聞いたことのないような冷えた声だった。結衣ちゃんの友達は「はあい」と拗ねたような返事をして、立ち上がった。

「二人で話すでしょ？　転校前の最後の会話、邪魔しちゃ悪いから帰るね」

「バイバイ」

結衣ちゃんが手を振る。私はぺこりと会釈をしておいた。「なぜ会釈、なぜ敬う」と笑いながら、その子は公園を去った。

「私さ」

結衣ちゃんがそう呟いた。その目は私ではなく、公園を去ったあの子の背中を見ていた。

「中学の時、あの子のこと泣かせちゃったんだよね。あの子がいつも、自分がブスなことに悩んでたから、ブスでもいいじゃん、て言ったの」

「えっ」

息が止まりそうになった。狼狽える私には目もくれず、結衣ちゃんは続ける。

「悪気はなかったの。でも、周りには酷いって言われて、その子も泣いちゃって。それ以来、ずっとぼっち。高校でもそのこと広まっちゃったらしくて、ずっと友達いなかった」

「何で」やっとのことで私は言葉を挟んだ。

「何でそんなこと言ったの」

結衣ちゃんはそこでようやく私を見た。この大きい目を正面から見たのは久しぶりだった。

「何て言えば良かったんだろう、梨花ちゃん」

「そんなことないよ、可愛いよ、とか」

「やっぱ、みんなそれ言うんだね」

風が吹いた。私と結衣ちゃんの間を通り抜けて行く風は、もう冷たかった。

「口癖みたいになってるよね、それ。私も沢山言われた。テストの点悪くて、私頭悪いわーって愚痴ったら、そんなことないよって、それまで笑ってた子が急に慌ててそう言って。あ、友達いた頃ね」

結衣ちゃんが薄く笑う。こんな姿は知らなかった。

「勉強とか、見た目の話になると顕著だよね。そんなことないよ合戦じゃん。みんな急に必死になって、相手の自虐を否定して。少しでも相手の自虐を肯定したら負け、みたいな感じで」

結衣ちゃんと私は、目を合わせたままだった。

「テストの結果がいつも悪くて、私馬鹿なのかなって相談するたびに言われるの。そんなことないよ、あなたは頭いいよ、って。頑張って沢山勉強したんだよ？　家帰ってから毎日五時間もやったんだよ？　それなのに成績は悪いままで、そのことを伝えても、そんなことないよって」

結衣ちゃんはそこで大きく息を吐いた。肩が上下していた。

「疲れる、あの言葉。基本的な知能って、もうどうにもならないじゃん。私が頑張っても、そのどうにもならないことのせいで報われないの。本当はこう言ってほしかった。頭悪くてもいいじゃんって」

ブスでもいいじゃん。

ヤドリギ

結衣ちゃんの言った二つの言葉が、重なった。

「自分でも頭悪いって分かってるのに、それを、そんなことないよって否定されると、怖くならない？　頭悪いとダメなのかなって。自分が痛いくらい分かってる欠点を認めようとしないこの人は、その欠点を肯定してくれないのかなって」

私達はまだ、お互いに目を逸らさない。

「あの子は自分の顔のことで悩んでた。可愛いって言われる度に、私ブスだからって言ってて。でも周りはそんなことないよって言うだけで。ブスじゃダメなのかなってその子も思っちゃうんじゃないかって心配になって、それで」

そこで結衣ちゃんは口を閉じた。眉間に皺が寄っていた。

「でも言うべきじゃなかったよね。自分が言ってほしい言葉だからって、相手も言ってほしいとは限らないし。さっき、久しぶりに会って、謝ったの。相変わらず自虐癖は抜けてなかったけど。……最近さ、よく聞かない？　人間は全て美しい、とか、人にはみんなそれぞれの才能や個性がある、とか、みんなを肯定しようとする言葉。ああいうの聞くと、追い詰められてるような感じがするの。才能とか個性がなくちゃだめなのかなって。私、自分の才能が何かって聞かれたら、答えられないもん。だれかが、あなたの才能はこれだよって言っても、それが才能だと思えないもん。それくらい、私には何もないの」

胸のあたりが締め付けられるように苦しい。

「才能がなくてもいいじゃん、個性がなくてもいいじゃんって、そう言われたかった。その方が楽になれた。そんなことないよって言われるより、ずっと良かった」

もっと早く、この子に声をかけていれば良かった。

私が欲しかった言葉を、この子に言ってもらいたかった。

個性がなくてもいい。誰か一人でもそういってくれれば、それで良かったのだ。

右目からぽろりと水滴が零れた。後を追うように、左目からも一滴。しゃくり上げる私を結衣ちゃんは驚いた顔で見たけれど、何も言ってはこなかった。

「結衣ちゃん、ごめんね」

ここで泣くのは卑怯だと思った。それでも、涙を止められなかった。打算で結衣ちゃんと友達になったこと。帰り道で結衣ちゃんの陰口を言ったこと。結衣ちゃんから離れたこと。謝ることは沢山あるのに、何も言葉にならなかった。

「寂しかったよ、梨花ちゃんが急に話しかけてくれなくなって」

結衣ちゃんの言葉でますます涙が零れた。私は、ごめんね、ごめんね、と繰り返すことしか出来なかった。きっと、結衣ちゃんに対しての「ごめんね」だけではなかった。優香ちゃんや紗奈ちゃんや朱理ちゃん。一人一人に言わなければならなかった「ごめんね」が、三人のいないところで溢れた。結衣ちゃんに「みんな見てるよ」と言われるまで、私は泣き続けた。

水道の水でハンカチを濡らし、腫れた目元にあてがった。公園の時計は四時半を指していた。結衣ちゃんがベンチから立ち上がり、近寄って来た。

「大丈夫？」

「うん。ごめんね、急に泣いたりして。キモいよね」

「別にキモくないよ」

結衣ちゃんは時計を見上げた。

「そろそろ帰らなきゃ。引っ越しの準備手伝えって言われてるんだよね。最後だし、一緒に帰らない？」

結衣ちゃんの言葉に頷きそうになった、その時だった。

聞き覚えのある音楽が聞こえてきた。

テンポの速い、軽やかなイントロと、透き通るような歌声。

家と学校の練習で耳から離れなくなった、あの曲。

体が動きそうになった。もうずっと前のことなのに、体は動きを覚えていた。

「あ、イヤホン接続されてない」

私のすぐ横を、制服を着た女の子二人が通り過ぎて行った。一人が持っているスマホからあの音楽は聞こえてきたのだろう。私はしばらくその背中を見ていた。

「梨花ちゃん？」

結衣ちゃんの声に引き戻された。「帰らないの？」とも聞かれる。私は迷っていた。二つの選択肢に挟まれていた。一つは、結衣ちゃんと帰る選択肢。もう一つは――。

小高い丘の上に建つ校舎を見上げる。ここからでも、校門から出て来る生徒がはっきりと見える。隣の結衣ちゃんを見る。この選択肢を取りたい。彼女と一緒に、このまま帰ってしまいたい。

けれど、それを選んではいけない。
「ごめん、今日は一緒に帰れない」
私は結衣ちゃんの目を見て言った。結衣ちゃんは驚いたようだった。結衣ちゃんの誘いを断ったのは初めてだった。
「何で？」
「謝らなきゃいけない人達がいるの。多分、まだ学校に残ってると思う。今日のうちに謝りたい」
「今日じゃなきゃダメなの？」
結衣ちゃんが意外にも渋った。不満げなその顔を見て、やっぱり一緒に帰ろう、と言ってしまいそうになる。けれど、それでは今日謝る意味がない。無理矢理首を横に振った。
「結衣ちゃんに、見といてほしいから」
「見る？」
「うん。恥ずかしいけど、お願い。誰かが見ててくれないと、私、学校に戻れないような気がする。すごく怖いの。その人達とは久しぶりに話すの。私がずっと、会うの拒否してたから。ダサいよね。でも、今日謝りたい」
返事はすぐには来なかった。しばらく沈黙が流れた。耐えられず「やっぱりいいや」と言おうとした時、結衣ちゃんが口を開いた。
「どこまで？」
「え？」
「どこまで見てればいい？」
結衣ちゃんの目は、もう校舎の方に向いていた。背中側から西日を浴びる校舎は、巨大な影のように見えた。思わず足がすくんだ。
「えー、どこまでって」

「でも、ここからだと校門までしか見えないよね。そこまでいい？　さっきも言ったけど、そろそろ帰らなきゃだし」
何だか、いつもの結衣ちゃんのそっけなさが戻って来たようだ。今はそれがありがたかった。いつも通りの結衣ちゃんが、私を安心させた。
「そうだ、急いでるんだった。じゃあ、そこまでお願いします」
「見届けたら帰るからね」
「冷たくない？」
「だから急いでるんだって」
「私、校門入ったはいいものの、やっぱ無理ってなって、帰っちゃうかもよ？」
「大丈夫だよ。梨花ちゃんはそんなことしないよ、多分」
結衣ちゃんは私の目を真っ直ぐ見てそう言った。今になって、寂しさが押し寄せて来た。この公園を出たらもう彼女に会えないことが、実感として胸に差し迫った。
「じゃあ私、ここで見てるね」
結衣ちゃんはそう言ってベンチに座った。もう行かなければならない。心臓が速くなる。
「結衣ちゃん、ちゃんと見ててね。途中で帰ったりとかしないでね」
「しないよ。いいから早く行きなよ」
結衣ちゃんは手をひらひらと振る。涼しげな顔が憎たらしい。そうだ、最後に言っておこう。
「結衣ちゃん、転校先ではもうちょっと愛想良くした方がいいよ。相槌はちゃんと打つとか、自分から話すとか」

「は？」
「結衣ちゃんに友達がいないの、それも原因だと思うよ」
「……あー、はい。善処します」
結衣ちゃんが苦しげな表情になる。初めて見る顔に、私は笑った。
「じゃあね」
「バイバイ。行ってらっしゃい」
私は走り出した。
涙の跡が、風で一気に乾いていく。すれ違ったおばさんが私の顔を凝視したけれど、もう気にならなかった。
恐怖が薄れたわけではない。今だって、少し気を抜いたら足が止まりそうになる。逃げてしまいたくなる。
でも、結衣ちゃんが見ている。
私は足に力を入れた。もっと速く走ろう。早く学校に辿り着いてしまおう。どうしようもないくらいの恐怖が襲って来る前に。
もうヤドリギのままではいられない。地面に根を張って、どこまでも伸びていく木になるのだ。高くなくてもいい。太くなくてもいい。
校門まで来た時、一度足を止めた。振り返って、結衣ちゃんに手を振ろうかと思ったけれど、やめた。
校門をくぐると、やっぱり足が止まった。恐怖に追いつかれてしまった。あと右に数歩行けば校庭なのに、足が動かない。
一応、ユニフォームに着替えてからにしよう。
心の中でそんな言い訳をして、校舎に入った。
ひんやりとした空気に身震いして、階段を駆け上

がる。ロッカーから久しぶりに手提げ袋を取り出して、教室に入った。
やっぱり、急に強くはなれない。着替えを利用して時間稼ぎをしようとしている。自分の言った通り、このまま帰ってしまうかもしれない。

大丈夫だよ。梨花ちゃんはそんなことしないよ、多分。

私は窓を開けた。
さっきまでいた公園が、マッチ箱ほどの大きさになっていた。走り回る男の子達がいた。父親に背中を押されながらブランコを漕ぐ女の子がいた。犬を連れて歩く老夫婦がいた。
けれど、結衣ちゃんはもうどこにもいない。

第55回 輔仁会雑誌賞 作品募集。

応募規定

[募集対象]
学習院在籍中の全生徒・学生・職員

[ジャンル]
小説（未発表作品に限ります）

[書式]
文字数２万字以内、縦書き。
必ずページ番号をふってください。作中の人名や表現などについて、難しい、あるいは特殊な読み方をする漢字がある場合は、ルビ（ふりがな）をふってください。作品の冒頭に題名、終わりには「了」と記してください。

[応募方法]
作品はメールでのみ受け付けています。Microsoft Word で作成した作品データを、下記のメールアドレスまでお送りください。メールの本文には、題名・氏名・使用する場合はペンネーム・学科学年 (または所属部)・携帯電話番号を明記してください。

[アドレス]
hojinkaiaward55@gmail.com

[締め切り]
2025 年９月１日（月）

[発表]
輔仁会雑誌上で発表いたします。

[賞金]
入　選　５万円
準入選　３万円
佳　作　１万円

[その他]
応募に不備がある場合、選考されないことがあります。持ち込みや黎明会館のポストに直接入れられた作品は受理いたしません。

ゲームひろば

取材・文／山本佳奈、菊地慶治郎、石川真衣、橋本和樹、小西寅太、鈴木理詩

01
間違い探し

上と下の絵で６カ所変化しています。変化している場所を見つけましょう。

※ただし、絵の大きさ、長さ、位置の変化などの変化は含まれません。
　明らかに絵が変化しているものを探しましょう。

さくまサン GAKUSHUIN UNIVERSITY
©'12,'24 Gakushuin

02
トランプメイズ

以下のルールに従って、スタート (S) から開始してゴール (G) を目指すゲーム。

☞ ♠→♦→♣→♥→♠ ,,,,,, の順に通ること。
☞ 縦と横のみに進むことができる (斜めにはいけない)
☞ JOKER を必ず一回通ること。(JOKER はどこからでも入り、
どこからでも抜けられるが、♥→ JOKER →♠とすること。)
☞ 一度通ったマスを重複して通ることはできない。

S Start	♥	♠	♥	♠	♣	♠	♥	♠	♦
♠	♦	♣	♦	♥	♠	♦	♣	♠	♣
♣	♠	♥	♠	♣	♦	♥	♠	♠	♥
♦	♥	♣	♦	♥	♠	♣	♣	♦	♣
♥	♠	♦	♦	JOKER		♦	♥	♠	♦
♠	♥	♣	♠			♣	♦	♥	♣
♦	♥	♠	♦	♥	♣	♠	♦	♣	♥
♣	♣	♦	♥	♣	♦	♥	♣	♦	♠
♥	♠	♥	♠	♠	♠	♠	♦	♥	♥
♥	♦	♣	♦	♣	♥	♠	♣	♥	G Goal

03
漢字ぐるぐるパズル

リストの漢字を白マスに入れて熟語を作り、漢字しりとりを完成させてください。
しりとりに使用する熟語は、何文字熟語でも構いません。
リストに残った４つの漢字でできる熟語が答えです。

	月		天		行		
		内	感		井		動
参	水				関		説
	流	無				心	
			人	氷	海		育
火		女		若			実
	修	者		影		術	
	線			指	接		字

リスト

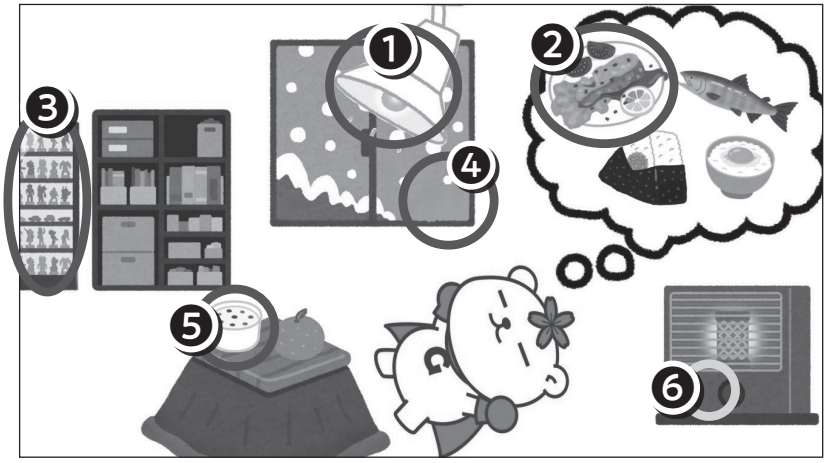
学	習	院
面	染	香
実	車	行
老	気	明
曜	火	神
月	雨	楽
止	吉	機
決	日	書
理	地	雲
教	下	水
議	導	花
鏡	五	蒸
武	野	男

答え

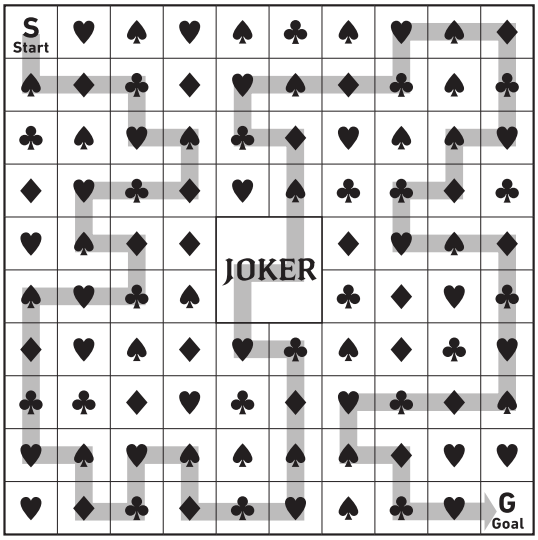
ゲームひろば
解答

01
間違い探し

❶ランプシェードが違う
❷おかずの内容が違う
❸棚の中が違う
❹山が消えている
❺具の量が違う
❻白いボタンが消えている



02
トランプメイズ



03
漢字ぐるぐるパズル

五	月	雨	天	決	行	楽	地
議	院	内	感	染	井	吉	動
参	水	蒸	気	機	関	野	説
日	流	無	月	下	車	心	教
曜	雲	神	人	氷	海	理	育
火	行	女	男	若	老	学	実
花	修	者	武	影	書	術	習
香	線	火	導	指	接	面	字

答え

明	鏡	止	水

ESSAY 02

先生の思い出

工藤 晶人
Kudo Akihito
学習院大学文学部教授

思い出すのは、中学時代に出会った二人の先生のことだ。古文を教えてくれたH先生はやや小柄のがっしりした体格で、いつも優しい微笑みをたたえていた。それだけに、ごくたまに顔を紅潮させて生徒を叱るときには迫力があった。大人になってから『今を生きる』という映画をみたとき、主役のキーティング先生に面影が重なってみえたことを覚えている。H先生もまた、本当の勉強は教科書の外にあることを教えようとしていた。

映画のような濃密な時間を私がすごしたわけではないし、先生と深い結びつきがあったということもない。これといって打ち込むものも無くのらくらと過ごしていた日々、ビートルズと大槻ケンヂを代わる代わる聴き込んだり、深夜バスに乗って正倉院展を見に行ったり、(当時まだなかった言葉でいえば)まずまずの中二病だった私にとって、H先生とのふとした立ち話が何かの支えになっていた。先生は、平安時代の歌人伊勢について語りだすと話が長くなった。田辺聖子にまつわるエピソードをあれこれ教えてくれたこともあった。文学少年ではない私は、先生が楽しそうに話している様子が単純に好きだった。

もう一人のK先生は、日本近代文学が専門で、高音に特徴のあるよく響く声の持ち主だった。ユーモラスで颯爽としていて、みんなの人気者だった。私はのちに先生の文体を真似て自分の本を書くことになるのだが、それはまた別の話。現代文の授業で覚えているのは映画の話ばかりだ。休日明けの授業の始まりには、生徒たちが待ち構えていたように声を上げる。「先生、何か見てきた?」ここで先生が「見てきましたよ〜」と答えたらその日はいい日だ。今日も映画の話で一時間が終わる!

マルセ太郎の「スクリーンのない映画館」のように、というのは言いすぎだろうか。弁士と一人芝居を兼ねた芸人よろしくK先生は語りだす。映画の背景、キャラクターの造形、そして物語の始まり。いよいよ続きが気になりだす頃合いを見計らったように、授業終了のチャイムが鳴る。書きながら記憶を美化しているような気もしてきたけれど、ハワード・ホークスの西部劇からテリー・ギリアムのSFまで、作品の場面を描写する声調を今でもありありと思い出すことができる。

あの頃、先生たちは雑談のなかでも真剣に生徒と対峙していた。世界の広さを、細部へのこだわりを教えてくれた。追いつけないものがあるということを分からせてくれた。馬齢を重ねて私は大学で歴史を教えるようになった。恩師には及ばないとしても、私も追いつけないものの魅力を伝えられるようになりたい。シラバスに書かれない雑談は、人文学の作法を教えることと根底的な部分で通じている。そうあるべきだと信じて教壇に立っている。

学習院さくらアカデミー

学生の皆さんのキャリアアップ・スキルアップに！

学習院さくらアカデミーでは、学生の皆さんのスキルアップ、自己啓発を応援する様々な講座を年間を通して開講しています。目標の実現に向けて、また自分の可能性を広げるためにも、さくらアカデミーの講座を積極的に活用してください。講座例としては、社会人としての基礎を身につける「**秘書検定講座**」、金融業界志望者向けの「**FP（ファイナンシャルプランナー）技能検定試験対策講座**」、WordやExcelなどのマイクロソフトオフィスのスキルを証明できる「**MOS資格取得対策講座**※」、就職や昇進に有利に働くといわれる「**TOEIC**」等の英語講座等、多彩なラインアップをご用意しています。

※ Wordは本学在学生、無料。

学習院さくらアカデミー

TEL：03（5992）1040

URL：http://g-sakura-academy.jp/

編集部員募集のご案内

学習院輔仁会雑誌編集員会では
一緒に雑誌を編集をしてくれる
仲間を募集しています。
伝統ある「学習院輔仁会雑誌」に
あなたの作ったページを
残してみませんか。

詳細は下記までお問い合わせください。

MAIL：hojinmagazin@gmail.com

Twitter：学習院輔仁会雑誌編集委員会（@hojinmagazine）

Instagram：instagram.com/hojinmagazine

学習院輔仁会雑誌編集委員会

初等科女子・女子部
制服指定店

ヨシザワ

中央区日本橋 3−4−15
八重洲通ビル 9F
TEL 03(3271)4996

味自慢
江戸風味 あられーおかき！

亀焼せんべい

贈答用各種箱詰承ⓜ
一地方発送も承ります一

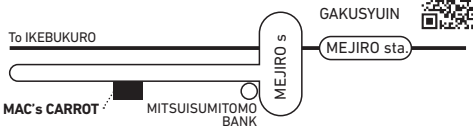
味乃店

豊島区目白 3-5-15 駅前ビル
TEL (03) 3953-2595

THE FIRST & LAST

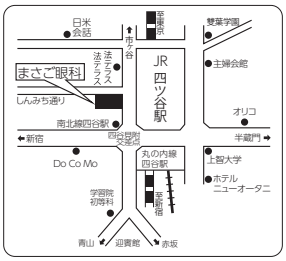
MAC's CARROT

11:00〜21:00
Reservation Call 03-3565-3668 080-5670-6295
e-mail macs.carrot1973@gmail.com
https://www.google.co.jp/amp/s/s.tabelog.com/tokyo/A1305/A130502/13012444/top_amp/
KOUN BUILDING 3-16-16 MEJIRO TOSHIMA-KU TOKYO



まさご眼科

DR. MASAGO'S EYE CLINIC



●新宿区四谷1-3
高増屋ビル4F
TEL：3350-3681

受付時間
平日/AM9：30〜12：20
PM2：30〜 5：20
水,土/AM9：30〜11：50

広告掲載社一覧

松屋 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
学習院蓁々会・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
学習院さくらアカデミー ・・・・・・ 135
味乃店・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 136
まさご眼科 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 136
ヨシザワ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 136
MAC's CARROT ・・・・・・・・・・・・ 136
株式会社世界文化社読者センター ・・・ 表III
一般社団法人 学習院桜友会・・・ 表IV

ご協力ありがとうございました。

広告募集のご案内

伝統ある「学習院輔仁会雑誌」に
広告を出してみませんか。
詳細は hojin.koukoku@gmail.com まで
お気軽にお問い合わせください。

学習院輔仁会雑誌編集委員会

お母様、お祖母様へのプレゼントにいかがですか？

夢と美を楽しむ。「家庭画報」は心豊かな暮らしをお届けします。

旅・食・美容・ファッション・インテリア・伝統文化……。1958年の創刊以来、厳選された質のいい情報を、美しい写真と優雅な世界観でお届け。読むだけで心が豊かになるとのお声を多数寄せていただいており、贈り物にも最適です。

最近の特集

2024年8月号 2024夏 パリの情熱	2月号 最上級の温泉宿
7月号 日本の夏をめぐる旅	1月号 龍神絶景を行く
6月号 「京都」美味案内	2023年12月号 高級感ある手作り インテリア
5月号 私の最高レストラン	11月号 「家庭画報」の手土産
4月号 心躍るアジアへ	10月号 京都・奈良
3月号 今、大流行の「アフタヌーンティー」	9月号 新しい英国

試し読みはこちら

- ●月刊／毎月1日発売
- ●B4変型判
- ●通常版：B4変型判 定価：1,650円（税込）
- ●プレミアムライト版：A4変型判 定価：1,300円（税込）

新規でお申込みの方 約20%off

年間購読料優待キャンペーン実施中！

通常版
年12冊19,800円（税込）
➡15,840円
（税込・送料当社負担）

プレミアムライト版
年12冊15,600円（税込）
➡12,480円
（税込・送料当社負担）

重さ半分 軽くてコンパクトなプレミアムライト版

プレミアムライト版は通常版と同じ内容でサイズは約85%、重さは約半分。ライフスタイルに合わせて2種類のサイズからお選びいただけます。

お申込み方法 ※申込期限2025年12月31日

インターネット
右の二次元バーコードを読み取ってください。

通常版　プレミアムライト

お電話
0120-35-4007
（土・日・祝を除く10:00～17:00）
※お申し込みの際は『輔仁会雑誌』をご覧になった旨お知らせください。

（株）世界文化社読者センター

購読料金のお支払いにつきましてはクレジットカード決済、または郵便局・コンビニエンスストアでのお振込みがお選びいただけます。本誌とは別送で詳しいご案内をお送りします。
※年間購読の途中解約はお受けできませんのでご了承ください。
※ご継続いただく際は通常価格となりますのでご了承ください。

桜友会は卒業生約14万人の

学習院同窓会です！

GAKUSHUIN
OUYUKAI
since 1921

學習院櫻友會

支部

全国支部　49支部

北海道から沖縄まで展開
（東京はエリア別に7支部）

海外支部　31支部

学校・学部同窓会
8部会

法学部同窓会
経済学部同窓会
文学部同窓会
理学部同窓会
草上会
中等科・高等科櫻友会
初等科桜友会
幼稚園桜友会

団体

職域桜友会　174団体

企業別・業種別に展開

輔仁会OB·OG会
131 団体

部活・サークル別に展開

HPも是非ご覧ください

https://www.gakushuin-ouyukai.jp/

一般社団法人 学習院桜友会

〈事務局〉　〒171-8588　豊島区目白1-5-1　学習院創立百周年記念会館2F